
曲空虚空

藤村 由紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曲空虚空

【Nコード】

N1685X

【作者名】

藤村 由紀

【あらすじ】

造られた空の下に広がる巨大な都市。全部で十二に分けられたこれらの街では、各街にある空面制御塔によって全天候が制御されていた。

平凡な暮らしを送る高校生のアキラは、ある日空の向こうから来たという少女に出会う。彼女はあるゲームの参加者としてやって来たといい、彼に協力を願うのだが、それは都市の未来に大きく関わる密やかな戦いの始まりを意味していた。

（縦書き読み推奨）

0・序

長い廊下の途中、細く開いたドアの隙間から、中の様子を窺う。

そこから見たものはまず父の背中、父はベッドの上の姉に優しい言葉をかけていた。何と言っているのかまでは分からなかったが「方法が見つかった」などと言っているのだろう。父からの事務的な連絡で自身もそれを聞いていた少女は、若干の緊張を覚える。姉は不安ではないのか、その顔を見たいと思った。

いつでも多忙な父が優しい顔をするのは、病いがちで寝室を出られぬ姉に対してだけだ。少女はそのことに気づいてから、ここ三年ほど家を空けがちになっていた。別の場所に行けば自分の能力を必要としてくれる人間がいくらでもいる——そのように思ったわけではなかったが、何だか家の中に自分の居場所がないような、そんな気がしたのだ。

少なくとも彼女は今、姉と父だけがいる部屋の中に入っていけないでいる。普通に挨拶の声をあげてドアを叩けばいいと、頭では分かっているのだが気が進まない。こんな風に怖気づいてしまうのは、自分が家を逃げ出してしまったからだとして少女は気づいていた。一度生まれた距離は、後ずさればその分だけ開いてしまう。そしていつのまにか歩み寄り方が分からなくなる。まるで世界がゆっくりと分かれていくかのようだ。

——はたして自分は今でも本当に家族なのだろうか。

少女は長い睫毛を伏せ、ただ床を見つめる。

自問すれども答は出ない。その間に父は姉の肩を労わるように撫で、踵を返した。扉の方へと向かってくる父親を見て、彼女は慌てて柱の影に隠れる。そんなことをする必要などないと、頭の中で理性が囁いたが、盗み見ていたことを知られたくはなかった。幸い父は娘の存在に気づかなかつたらしく、足音は規則的に遠ざかっていく。その音が階下に消えると、ようやく少女はほっとしてドアの前

に立った。きちんと閉められたドアを叩こうと手を上げる。

—— なんとはいえいいのだろう。

姉に会う為に帰って来たのだ。だがいつも、どんな話をすればいいのか分からない。

もつと幼い頃は毎日のように本を読んでもらっていた。その習慣がなくなったのは、数年前姉がひどい熱を出し、声を嚔らしてしまつてからだ。

突然の発熱を、自分が無理をさせたせいと思い込んだのは、何が切っ掛けだったのか。今ではもう思い出せない。ただ覚えていることは、掠れた声もとの澄んだ響きに戻った後も、彼女は絵本を姉のもとに持つていかなかったということだけである。

少女はノックをする為に上げた手をそつと下ろす。

—— 今更だ、と思つた。

何が今更なのかと思いつつ、けれどやはり開いた距離を埋める自信がない。

少女は足音をさせぬよう後ずさつた。そのまま立ち去ろうとした時、だが部屋の中から懐かしい声が彼女を呼ぶ。

「シエラ？」

「……っ」

「シエラ、帰ってきてるの？ そこにいるんでしょう？」

—— どうして、何もかもお見通しなのだろう。

母を知らない少女にとって、姉は不思議の塊だ。その温かさに胸の奥から満たされ、守られている気分になる。

シエラは止めていた息を吐き出すと、扉に手をかけた。ゆっくりとそれを奥へと押し開く。

姉の部屋は、最後に見た時と何ら変わりが無い。アイボリーの壁紙は染み一つなく、広いベッドはきちんと整えられていた。大きな窓からは薄紫色の空が見える。

家具や私物の少ない部屋。だが枕元のテーブルには写真立てが二つ置かれている。それが亡くなった母親と、そして父と自分を写し

たものだとしエラは知っていた。

家族の写真の隣で、姉は穏やかに微笑んでいる。そこだけは変わらぬ双眸に、しエラは思わず声を詰まらせた。喉の奥が熱くなる。視界が少しだけ滲んで、鼻腔がちくりと痛んだ。少女は深く息を吐き出すと、姉に向かって向き直る。

「お姉ちゃん……ただいま」

少しだけ掠れた声に、寝台に座る女は嬉しそうに笑った。

1・鏡の空と虚の都

今日の空は緑色だった。

透き通るようなエメラルドグリーン。人気の高いこの色が空を彩るのは実に十八日ぶりのことだ。予定天候は十七時から霧雨。五月は夕暮れの霧雨が多くて、一体誰の趣味かと問いたくなる。だがもう七年も続いている傾向であるからして、それは「季節」であると空塔管理部は主張したいのかもしれない。学校帰りのアキラは明るく澄んだ空を仰いだ。人影のないエリア道の片隅で、高校の黒い学生服は染みのごとく浮いて見える。

彼の視線が向かう先、きらきらと地上の光を反射する空の正体は、各都市に一つずつある空塔を支えとして、遙か上空に張られた鏡面体だ。そこには空塔からの命令を受けて予定通りの空が映し出され、場合によっては雨が降る。そしてアキラの住む第八都市の天候予定では、あと三十分後には霧雨が降り出すことになっていた。彼は腕時計を確認する。

「ぎりぎり間に合いそうだな……」

このまま行けば雨の降り出す五分前には寮へ帰りつけるだろう。アキラは買い込んだ雑誌を濡らさぬよう足を早めた。横を見れば埃っぽい車道を色褪せたちらしが飛んでいく。遠くに見える解体工事中のビルの隣、巨大な壁面ビジョンでは、若手歌手の訃報が流されていた。彼は薄灰色の建物群から、また空へと視線を戻す。

級友たちは転移ポートを使わず徒歩で移動する彼を変わり者と笑うが、アキラはこのように色の变化していく空を見ながら自分の足で歩いていくことが好きだった。一つの翳りも見えない緑の空に、彼は「向こう側」が見えないものかと無意識のうちに目を凝らす。近くのビルの壁面に設置された看板が、視界の隅で魚の鱗のようにきらめいた。緑の空はその反射も受け止めて、穏やかに透き通った光を地表へと返す。アキラはしばらくの間、目を細めて鏡面を注視

していたが、均一に調整された緑の向こうには一つの影も見えなかった。

「ま、虚都人が見えるなんて、あるわけないだろうけど」

空である鏡面体の上には、同じ鏡面を空とするさかさまの都市「虚都」があるという——それは子供の空想などではなく公的な記録にも載っている話ではあったが、そこに見られる「都市が存在している」という記述以上の詳細を知る者は、一般に知られている限りどこにもいない。

何しろ今まで鏡面を越えて向こう側へと渡った人間は一人もいないのだ。金や身分があれば鏡面体を越えられるわけではない。ただこの地上に、空塔の下に、誕生した者は皆、鏡面の先へ行く手段を持っていない。それは鏡面体に最も近い空塔に勤めている者でさえ同様であり、越えることの出来ない空は、いわば世界の果てを示す壁と思っただ方がいいのだろう。

アキラは舗装された街路を、時折空を見上げながら歩く。広がる空の向こうには上下反転したさかさまの住人が生活していると聞くと、実際に虚都を見てきた者などいない。「どこからそのような話が出てきたのか」とは、地上の住人であれば誰でも一度は抱く疑問であったが、今やそれは考えても仕方ない子供じみた問いとみなされていた。虚都の住人のことなど、天候予定よりもずっとずっと彼らの生活には関係がない。そのようなことを気にしているのは学者か夢想家くらいのもので、空を見ることが好きなアキラもまた、級友たちなどからはロマンチストとからかわれることがあった。

「蒸してきたな……」

霧雨の時刻が近づいてきたせいか、気温と湿度が少しずつ上がってきている。アキラは学生服の襟を緩めようかと手を上げたが、それをするより先に、反対側の歩道から軽い足音が聞こえてきた。見ると街路樹の下を、顔見知りの少女が制靴を鳴らして走ってくる。紙袋を抱えた彼女の方もアキラに気づいたのか顔を上げた。

「アキラくん！ 雨降ってきちゃうよ！」

「知ってるって」

アキラがそう返すと、彼女は大きな目を丸くする。急に立ち止まったせいで、耳の上で二つに結ばれている髪がふわふわと揺れた。その様はどこか耳の大きな小型犬を連想させ、アキラは口の中で笑いをかみ殺す。白いシャツに灰色のプリーツスカートという制服姿の彼女は、車道を挟んだ距離から目ざとくそれを見咎め、形のよい眉を寄せた。

「ちよつと、なんで笑うのよ」

「笑ってない。気のせいだろ」

「気のせいじゃないよ。アキラくん、いつもそうなんだから」

唇を曲げてにらんでくる少女の名前は佐野ミヤ。アキラとは同じ高校に通う一年生で、今は同じクラスに所属している。すらりと長い手足に整った顔立ち、そして人懐こい性格で、校内では他学年にまで広く顔を知られている有名人の一人だ。彼ら二人は初等部から数えて七度同じクラスになっており、お互いにそろそろ腐れ縁だと認識してきている。ミヤは左右を見回すと、車道を横断して彼の元に駆け寄ってきた。

「また本屋？ また付録を買いに行ったの？ アキラくんって本当に付録好きだよな」

「付録付録言うな。ちゃんと雑誌もついている。あと今回のやつは一年間買い続けると、十二都市のジオラマが完成するんだぞ。もちろん空塔と空ドームつき」

「ふーん。がんばってね」

どうでもよさそうな反応はいつも通りのものだ。ミヤは小走りに彼の隣へ並ぶ。細い指がエメラルドグリーンのを指さした。

「この色珍しいよね。ラッキー？」

「基本、短時間しか見れないからな。それも月に一回あるかないか」
「わたしが空塔管理部に就職したら、毎日この色にしちゃおうかな」
「お前が管理部に就職できるはずがないし、万が一できてもそんな仕事は回されない」

気分屋の幼馴染をそう両断すると、ミヤは大きく頬をふくらませた。緑の空から視線をはずし、隣のアキラをねめつけてくる。

「っていうか、アキラくんはあいかわらず転移ポート使わないんだね。放浪好きはいいけど、何も雨予定の日にやらなくてもいいのに」
「徒歩で帰るだけで放浪とまで言われるとは」

「だってそんなことしてる人、アキラくんくらいだし。だから孤独を愛するすみっこ男とか言われちゃうんだよ」

「へえ。いつからそんな風に言われてるんだ？」

「わたしが言い出してからかな」

「そうか。孤独を愛するとすみっこはどっちか片方で充分だからな」
軽口で返してはみたが、繁華街から郊外へと向かうこのエリア道には彼ら以外の人影はない。やはりポートを使わずエリア間を移動する人間などほとんどいないのだろう。

広い車道も先ほどからまったく車が通らず、辺りは整然とした生活観の感じられない風景に占められている。乾いた路面の上には風に乗った砂が薄く降り積もり、見る者もない信号機が青緑を示して、遙か向こうにまで続いていた。

なかなか周囲の理解を得られない散策癖を持つアキラは、友人の中では比較的付き合いのいい少女を見やる。

「ミヤはこのまま徒歩で帰るのか？」

「それでもいいけど……あ、やっぱり途中で学校に寄る。生誕祭準備の買い出ししてたんだ」

「ああ、それがあつたか」

六月頭にある「生誕祭」は、地上に十二ある都市全てが総力を挙げて行う大イベントだ。五日間続く祭りの中には彼らの所属する青山北高の学園祭も含まれている。しじゅう人から頼みごとをされるミヤは、学園祭においてもいくつかの役割を掛け持ちしているらしい。アキラは感心の目でクラスメートを眺めた。

「よくやるなあ。そんなばたばたしてて当日まで持つのか？」

「あと六日しかないんだよ！　って、みんなを待たせてるんだった

！ もう行かないと。あ、これあげる」

「はいはい。気をつけてな」

「アキラくんも。最近天候予定が狂うことが多いから気をつけてね」

「天候予定が狂う？ はじめて聞いたな」

「わたしもカイくんに聞いたただけだけど。今までは全部真夜中だったみたいよ」

「へえ」

うさんくさい話だとばかり思っていたが、やはり初等部からの付き合いであるカイは、嘘をつくような人間ではない。彼は将来、空塔管理部に勤めたいと言っているだけあって空塔絡みの情報にも詳しく、とたんに話は真実味を帯びて感じられた。真面目な顔で頷くアキラに、ミヤは駆け出しながら手を振る。

「じゃあね！ あんまり空ばっかり見てると転ぶからね！」

「誰が転ぶか」

そっけなく返すと、ミヤはくすくすと笑った。そのまま走り去っていく小さな背は、あっという間に近くの角を曲がって見えなくなる。おそらく近くのポートへ戻るのだろう。せわしない級友にアキラは苦笑し、別れ際に押しつけられたものを見やった。

「……なんだこれ」

手の中にあるものはおもちゃの杖だ。銀一色で星のついた杖は、十年前ならばアキラも無邪気に喜んだかもしれない。彼はそれを目の上にかざしてみる。

「劇の小道具か何かか？ なんで俺に渡すんだよ」

あげる、と言われた以上、アキラのものなのだろうが、このようなものをもらっても処置に困る。彼は杖を手の中できりと回した。綺麗に貼られた銀紙がそれにもなつてチカチカと空からの光を跳ね返す。

「使い道不明……」

今は人通りがないとは言え、寮近くになれば同じ高校の生徒と遭

遇する可能性は高い。そのような時、子供のおもちゃを手に提げていたなら何を言われるかわからないだろう。アキラはスポーツバッグを開け、教科書の上に銀の杖をつっこんだ。そうして再びバッグを持ち直した時、手の上にぽたりと水滴が落ちる。

「え？」

どこから何かの水が飛び散ったのかと、疑ったのは一瞬だった。空を見上げたアキラは、ぽつぽつと降りだした雨を見て啞然とする。「天候予定と違うだろ……」

霧雨が降りだす十七時まではまだ三十分ほどある。おまけに降ってきているのは、数こそ少ないが大粒の雨だ。アキラはミヤに言われたばかりの忠告を思い出したが、これは予定が狂っているというより設備の故障か何かだろう。我に返った彼は雑誌の入った袋を濡らすまいと胸に抱え込んだ。寮まで走り出そうとした時、けれど緑の空の片隅で、何かが光る。

「ん？」

また看板かと思った。それ以外の心当たりなど思いつかなかった。だが、白く輝く光は、アキラが見上げる真ん中を一向に消えず揺るがず迫ってくる。雨粒を追い越し、墜落する勢いで宙を貫いた。それは落雷よりもまばゆく、後に残る軌跡が白金色の柱となる。――そして落ちてくる真下にはアキラがいた。

逃げた方がいいと思うのだが、体が動かない。アキラは空を仰いだまま、ただ茫然と近づく光を見ていた。彼が衝突を覚悟したのは、光がまさに彼に降りかかる寸前のことだ。全身を白く照らされたアキラは、魅入られたかのようにそれを凝視する。

もし光がそのままぶつかってしまったのなら、事態はもっと面倒なことになっていただろう。

しかし白光は、地上から約三メートル、彼の眼前で音もなく消え去った。代わりに中からはしなやかな黒髪が広がる。小さな白い顔と細い体。たゆたう長い髪の間隙からは淡い緑の服が見えた。アキ

ラは口を大きくあけて、頭上に浮かぶ「その人物」を見つめる。

「は……？」

それは、さかさまに浮く一人の少女だった。すっと通った鼻梁と小さな赤い唇、長い睫毛を持つ瞼は閉じられていて、どのような目であるのかわからない。しかしそれを差し引いても繊細な容貌は芸術品と言っていい美しさだった。年齢はアキラと同じか少し下に見えるが、かわいらしいなどという表現はそぐわない。「綺麗すぎて近づきたい」という印象に加えさらに異様さを覚えるのは、今のこの状況が大きく影響しているのかもしれない。

アキラは無意識のうちに止めていた息を吐き出すと、じろじろと得体の知れない少女を見上げる。

「なんだこれ……幻覚か？」

空から墜落してきた少女。今なお彼の頭上に浮いている彼女は、どう考えても普通の状態ではありえない。アキラは彼女の存在そのものを目の錯覚だと片付け、距離を取りかけた。だがその時、あることに気づく。

「え。濡れてる？」

天候予定から外れて降りだした雨が、少女の黒髪を濡らしている。透明な滴は髪に染みこみ、漂うその先を伝ってぼつりとアキラの顔に落ちた。少しだけ温かく感じるそれを彼は指で拭ってみる。

「へ？」

幻覚が濡れるなどということがありえるのだろうか。

アキラは一瞬ぼかんとしたが、改めて少女を見上げると、そつと右手を上げてみた。ためらいながらも揺れている黒髪へ指をのばす。触れてどうしようと思ったわけではない。ただ確かめてみたかった。そうして広がる髪にぎりぎり指が届くかといったところで、彼が背伸びをしかけた時——少女は不意に両目をあける。黒々とした大きな瞳が、真っ直ぐにアキラを見た。

「あ……」

深い黒。夜の空と同じ色の目。

落ちてきた少女はさかさまのままアキラを注視する。艶のある睫毛が軽く震えた。

雨が降っている。霧雨ではない雨。後にこの時の出会いを思い起こす時、彼はまずその記憶を引き寄せる。

だが少なくとも今この時、アキラは彼女以外の何も見てはいなかった。

2・雨濡れ少女

彼の足元を水滴が音もなく濡らしていく。
お互い見つめあつて静止していた時間は、ほんの数秒であつたろう。

意味のわからぬ邂逅がもたらした硬直は、唐突に彼女の方から解かれた。少女は宙に浮いたまま、まじまじとアキラの全身を眺める。

「あなたは、適応者？」

「は？」

「入つてすぐ光が見えました。あれはあなた？」

言われてアキラは肩にかけていたスポーツバッグを見た。その中に押し込んだおもちゃの杖を思い出す。

「光つて言つたつて……確かに俺かもしれないけど」

「やつぱり。私が見えているのだから、そうなのでしょう？」

「いやちよつと待てつて。全然意味がわからない」

「今はわからなくてもいいです。私、急いでますので」

「待て待て。ちよつと質問させてくれよ」

まず何を問うのかなど決まつている。幻覚かどうか相手に聞いてもしかたない。それよりもアキラの中にはこの時、無視できぬ可能性が湧き上がってきていた。彼はさかさに浮いている少女と、その遙か上にある空を見上げる。

「まさか……虚都から来たなんて、言わないよな？」

——空である鏡面体の向こうには、同じ鏡面を空とするさかさまの都市「虚都」があり、そこにはさかさまの住人が暮らしているという。

誰も空を越えることができないのに、なぜそのような話が広まっているのか。馬鹿馬鹿しいと思いつながらも気になつてしまつアキラの眼前で、少女は数秒考え、そして頷いた。

「ええ。私は空の向こうから来ました」

「やっぱり幻覚か……」

「聞いておいてなんですか、その態度は！」

少女が怒り出すことは予想外であったので、アキラは目を丸くする。彼女は不満げな顔で腕組みすると、ゆっくりと高度を下げてきた。このままではぶつかると判断したアキラは慌てて二歩下がる。

少女は二人の目の高さが同じになったところで止まり、彼を正面から見すえた。

「私と話しているということは、私が見えているのでしょうか？ 幻覚で片付けるとは何事ですか」

「視力と常識だったら視力を疑う」

きっぱり返すと、少女はますますアキラをにらんだ。その表情は生気に満ちており、先程の触れがたい神秘さとはまた印象が異なっ見える。淡い緑のサンドレスを着た彼女は、長い裾を空に向かって揺るがせながら首を傾けた。

「常識を疑うべきでしょう。あなたは空の向こうの存在を知っているのではないですか」

「知ってるっていうか——」

公式記録に書いてあるからみんな知ってるだけだ、と言い返しかけてアキラは言葉を飲み込む。「常識を疑え」という言葉。なぜ自分がよく空を見上げているのか、子供の頃の記憶を思い出しかけた彼は、思考を打ち切ってかぶりを振った。

「幻覚じゃないっていうなら風邪引くぞ」

「風邪？ どうしてです」

広がる髪から水を滴らせつつ、少女は目をまたたかせる。アキラは呆れてその姿を指さした。

「さっきからどんどん濡れてるだろ。っていうか、俺も濡れてるし。」

——帰るか」

雑誌を入れた袋は腕でかばっているが、このままここに居続ければ制服もびしょりと濡れてしまう。明日も学校は休みではないのだ。アキラは幻覚の少女に付き合っている自分、という状況を再認

識して溜息をついた。

「じゃ、俺はこれで」

「待って！」

立ち去りかけたアキラへと鋭い声が飛ぶ。振り返ると、少女は驚いた目で彼を見ていた。

「濡れてるって私が？」

「俺も濡れてるけど。雨降ってるだろ」

「あなたには、私が濡れて見えるんですか？」

くどいほどの念押しにアキラは顔をしかめた。一体なんだというのか、不可解さにわずらわしさが勝る。

「濡れて見える。雨の下にいるんだから当然だろ。今もどんどん濡れてるぞ」

少女はそれを聞いた瞬間、黒い両眼を大きくみはった。取りつくるつたところのない素の表情は不思議な愛らしさがある。アキラの視線はつい彼女へと引き寄せられた。

「……なんだよ」

「あなたにします」

「ん？」

「それだけ素質が高いのなら充分です。本当は私のキースキルからいって、弱い適応者を選んだ方が効果的なのですが、あなたもちゃんと弱っちそうですし」

「おい。幻覚のくせに嫌味か」

「あなたを私の『代行者』とします」

白い右手がアキラの方へと伸ばされる。

開かれた手のひら。そこには薄青く光る何かのコードが浮かんでいた。二十桁を越える数字と幾何学模様で構成されるそれを、彼は啞然として見やる。

少女は小さな手のひらを彼の額に触れさせようとした。

「ちよっ……」

「動かないで」

「断る」

大きく一步下がったアキラに、少女は空振りして態勢を崩した。浮いているため転ぶまではいかなかったが、その分じっとりと彼女はアキラをにらむ。

「どうしてよけるのです!」

「普通よける」

「急いでいるのに……」

唇を噛む少女の目には、あせりが色濃く浮かんでいた。まるで本当に困っているかのような表情に、アキラは若干の罪悪感を覚える。しかし彼が罪悪感を味わっていられたのもそこまでだった。

浮いている少女の向こう、雨の降る空に赤い光が見える。それは先ほど彼女を包んでいた白光と同様、まっすぐ地上に墜落していくところだった。

だが赤い光は、なぜか途中でぐんと進路を変える。そのままアキラたちのいる方へと、恐ろしい速度で向かってきた。

「……あれ、なんだ?」

「え?」

彼の指さす方を振り返った少女は、向かってくる光を見て一瞬絶句したようだった。けれどすぐにアキラの方へと両手を伸ばす。

「逃げて……っ!」

「つて、なんだそりゃ!」

伸ばされた手を掴む。

アキラは引き寄せた少女の体を、さかさまのまま右腕で抱えた。

赤い光はもう間近に迫っている。

車は来ない。彼は車道めがけて跳んだ。

頭の後ろを巨大な何かが通り過ぎていく。ちりちりとした熱が痛みを伴って背を焼いた。

抱えられたままの少女が、彼の腕にしがみつく。

「逃げて! 早く!」

「意味わからんわ!」

何とか転ばず路面に着地した直後、背後で耳をつんざく炸裂音があがった。

周囲が赤い閃光に照らし出され、アキラはさすがにぎよっとする。だがすぐに少女の言葉にしたがって、彼はその場から走り出した。彼女を抱えたまま振り返らずに車道を横断し、そばにあった脇道へと入る。これ以上見通しのいいエリア道にいては、逃げられないかもしれないと思ったのだ。

「って、逃げられないかもって……何だこの状況」

「不吉なことを言わないでください！ 追ってきます！」

何が追ってくるというのか——ともかく身を隠したいと思ったアキラは、一番はじめの角を曲がる。

その時、彼の全身は無形の圧力に総毛だった。

向けられたものは、おそらくただの視線だ。角を曲がった瞬間それを感じ取った。

だがその視線だけで、ぞっと背筋が粟立つほどの戦慄が走ったのだ。

これは追いつかれたらどうなるかわからない。

アキラは混乱する思考を抱えつつ、見えてきた丁字路を曲がる。エリアの境界にあたるこの近辺には無人の倉庫ばかりが建ち並んでいる。誰かに助けを求めるなどということは期待できそうにない。彼はしかし、そのようなことは考えず、ひたすら雨の中を走っていった。

着実に濡れていく制服。けれどそれを冷たいとは思わない。ただ重く張りついてくるのがわずらわしく、少しだけ走りにくかった。アキラは右腕に抱えたままの少女を見る。

胸のすぐ下を抱きこまれている少女は、よく見ると即頭部にがつがつとスポーツバッグがぶつかっている。けれど本人はそれについて、雨と同様まったく気にしていないようだった。

「どうかしましたか！」

「いや……」

つい脱力しそうになったアキラは言葉を濁した。

バッグをぶつけているのは悪い気もするが、教科書の入った通学バッグを投げ捨てる気にはなれない。そこでアキラはふと、左手に持っていたはずの雑誌の袋がないことに気づいた。おそらくは車道に飛び出した時に落としてしまったのだろう。

「あ、くそ。もう最悪だ。せつかく買ったのに」

「何をですか？」

「付録。落としてきちゃった」

高い塀にそってアキラはまた角を曲がる。

先ほど感じた視線は、今は彼らを捉えていないようだ。彼は塀の切れ目に見えてきた通用門が開いたままなのを見つけ、倉庫の敷地内に滑り込んだ。やわらかい土の上を駆け出す。

「誰かいたりしないか……？ 無理か？」

もし人に会えたとしても、何を言っているのかわからない。アキラ自身、今の状況がさっぱり意味不明であるのだ。

倉庫の外周を回っていた彼は、入れるドアがないか、手当たり次第ノブを回してみる。こういった倉庫は中に物品移送用の転移ポートを備えていることが多い。それを使えないかと思ったのだ。

しかし彼の希望もむなしく、鍵のかかっていないドアは一つもないようだった。

息が切れてきたアキラは、雨の降りかからない壁を選んで寄りかかる。

「よし、そろそろ説明しろよ」

アキラの腕から解放された少女は、再び彼の眼前に浮いている。あいかわらずさかさまなその姿は彼に頭痛を誘ったが、申し訳なさそうな顔を見ると、声を荒げて詰問する気にはなれない。

アキラは、額を濡らす雨か汗かわからぬものを手で拭った。

「今の状況を手短かに説明して、切り抜ける案があったら申告希望」

「追ってきているのは私と同じ来訪者……『プレイヤー』です。こちらに来る前に、私たちはそれぞれ各都市に分かれて飛ぶと取り決

めていたのですが、誰かが取り決めに破ったのでしょうか。私が『代行者』を選ぶ前に排除しようとしたようです」

「やっぱり長くてもいいからもうちょっとわかりやすく頼む」

説明を頼んですぐ返ってきたのはありがたいが、何を言われているのかさっぱりわからない。アキラの要請に少女は困り顔になった。

「追う手の目的は、おそらく私です」

「そいつも虚都から来たのか？」

「あなたたちの言葉で言うならば」

「自分の正気を疑いたい」

「常識とはそれほど強固なものなのですか？」

なんと言われても、「上下反転の都市に住む人間」のことなど、まともに考える方が馬鹿馬鹿しいと思われるのだ。空の向こうについての記述はいわば、公式記録の誤植のようなものであり、真剣に考えても意味がない。

だがアキラは目の前で実際浮いている彼女を見て、深い溜息をついた。

「なんで狙われてる？ この状況だと俺も巻き添えなのか？」

名前も知らない相手のことだ。発言の全てを鵜呑みにはできないが、聞くと聞かないのでは聞いておいた方がマシだろう。アキラはバッグを近くにあった小コンテナの上に下ろした。

少女は長い睫毛から水滴をしたたらせつつ、難しい顔になる。

「理由は……はつきりとはわかりません。私たちはそれぞれ目的があつてこちらに来ていますから。ですが、逆に言えば私たちは、お互い競争相手でもあると言つことができます」

「競争相手を蹴落とそうつてか。いい迷惑だな」

「普通の住人であれば、私たちの争いには巻き込まれないはずなのですが」

「ん？」

それは、アキラだけであれば無事で済むということなのだろうか。引っかかる物言いに、彼は落としてきてしまった袋のことを思い出

した。あの時、彼女の言うままに逃げなかったらどうなっていたのか。考えてみようとしたがよくわからない。

少女は雨にけぶる景色を、黒い目を細めて見つめた。

「生物無生物に限らず、私たちは基本、この世界のものを直接傷つけることができません」

「え。そうなのか？」

「ええ。それくらい世界の違いというものは大きいのです。おそらく大多数の人々は私たちを見ることさえできないでしょう」

「俺、見えてるな」

ぽつりとアキラがこぼした感想に、苦笑して見せる少女は掛け値なしに美しい。

しかし彼は不意に、今見えている彼女がやはり自分だけの錯覚なのではないかという疑いに捕らわれた。

他の人間には見ることができない少女。そんな相手が見える理由とは何か。

少女はアキラの表情から疑問を読み取ったように続ける。

「あなたのように、私たちの世界に近い素質を持った人間のことを、私たちは『適応者』と呼びます」

「それ、さつきも聞いたな」

「ええ。適応者には私たちの姿が見える……特にあなたはその傾向が強いみたいです。来訪者である私が、この世界の物質に影響されているように見えた」

「影響されているように？」

体を起こして聞き返そうとしたアキラはしかし、表の通りに近い内堀が赤く照らされたのを見て押し黙った。音を立てないように、そつとバッグを回収する。

「来ましたね」

「まだ全然聞いてないってのに……」

せめて現状の傾向と対策をもう少し確認しておきたい。アキラは赤い光から距離を取ろうと、少女の左手を引いて走り出した。彼女

は呆氣にとられた顔で彼を見る。

「……私を置いていかないのですか？」

「まだ話が終わってないから。一応な」

「なら、私の代行者になってください」

「それはだからなんなんだよ」

「そのままです。私と契約して私の代わりに動く人間のことです」

「とりあえず断る」

反射で少女の要請を切り捨てながら、アキラは内心「もうこれが全部夢だったら面倒くさくないな」と思い始めていた。徒歩で帰っていただけでこのような訳のわからないことになるなら、以後の行動も考え直した方がいいかもしれない。足下を見るとスニーカーがぬかるんだ土を踏んで、すっかり泥だらけになってしまっている。アキラは思わず溜息をついて天を仰いだ。

3・遭遇

まるで子供が風船を引いて駆けるように、さかさまの少女の手を取って走るアキラは、倉庫の裏に出たところで足を止める。見上げた空はいつの間にか群青色になっており、大粒の雨は少しずつ本来の霧雨へと移行しているようだった。

「やりすごせると思うか？」

「わかりません」

「話し合いの余地は」

「交渉ならあるいは」

そう言う少女の表情は、けれど険しいと言っていていいものである。そもそも話し合いが通じる相手ならば、最初から問答無用で攻撃してきたりはしないだろう。

アキラは少女を壁際に寄せ、自分は倉庫の角に隠れて表の様子をうかがった。

先ほど内堀を照らしていた赤い光は見えない。だが楽観的な気分にはなれなかった。神経をとがらす彼の隣で、少女は深い青色の空を見下ろす。

「万が一の場合には、早めの離脱をおすすめします」

「既に万が一になってると思う」

「普通の住人であれば、先ほど言った通り、私たちが何をしても害されるということはないのです。ですがあなたは——私が雨に濡れて見えるほど高い素質を持っている。来訪者である私を、この世界の中に在ると確信的に認識しているのです。それは類稀な意思ではありますが、逆に考えればあなた自身の身を危うくもします」

「なんで」

「あなたにとって、私たちは幻ではなく現実だからです」

少女の細い指がアキラを示す。形のよい爪の先からまた水滴がぽたりと落ちたが、彼女はそれを見もしなかった。アキラはぬかるみ

の中に消える滴を目で追う。

——幻に殴られても痛くはないが、現実殴られれば怪我を負う。つまりはそういうことなのだろう。彼自身の確信が、彼を危険な状態にしているのだ。

「うわ……。俺、なんでそんな無駄な素質が……」

「私にもわかりません。私たちの世界について研究していたとかですか？」

「いまだき小学生の自由研究だって、もうちょっと中身のあることやる」

数年前には虚都をテーマとして書かれた小説や漫画が流行ったりもしたが、アキラ自身そういったものを読んだことはほとんどない。一度だけクラスで回し読みされていた漫画に目を通しただけで、その時の感想としては「作り物くさい」というだけのものだった。

濡れた前髪を手でかきあげた彼は、何かを感じると手振りで少女に黙るよう示す。

赤い光は見えない。しかし、雨音とは異なる水滴の音が跳ねた気がした。

アキラはほとんど霧雨となった周囲を見回す。泥の中に埋もれていた鉄パイプを見つけると、バグを置いて代わりにそれを拾い上げた。誰かが現れたらすぐ動けるようにと、倉庫の角に狙いを定める少女は何か言いたげな表情になったが、先ほどの手振りを受けてか沈黙を保っていた。

水滴の音が聞こえる。

足音はしない。視界は霧雨にけむっている。

アキラは息を殺してじっと待った。緊張でわめき出しそうな思考を抑える。

そうして三十秒ほどが経過した時——その男は、倉庫の影からぬつと姿を現した。

鉄パイプを構えたアキラは、思わず苦い声をあげる。

「げ……こいつもか」

現れた人間は、既に先ほどの赤い光をまとってはいなかったが、それでもなお、見た目からして普通ではなかった。

背後の少女と同様、さかさまに浮いている男。

年は二十代半ばほどだろうか。上下反転している以外は、白いパーカーにジーンズというこちらの世界と大差ない格好だ。短く刈り込んだ頭に、さかさでも落ちていない黒のキャップをかぶっている。人相は、街で見かけたならまず避けて通るだろうというくらい目つきが悪い。男はアキラの腹くらいの高さから、わずらわしい表情で彼をにらんできた。

「適応者か？」

「……さあ」

「ふん。代行者じゃないようだな。下がってろ、住人」

男はもう鉄パイプを構えるアキラから興味を失ったようだった。奥に居る少女へと視線を移す。

「住人をたぶらかして逃走ですか。まったくお嬢さん、あんたも人が悪い」

「何がですか？ それよりあなたの方こそ、取り決めに破ってどういうつもりです」

少女の反問を聞いてアキラは我に返った。

さかさではあるものの、平凡な服装の男が現れたので忘れかけていたが、先ほど赤い光を帯びて二人にぶつかろうとしたのがこの相手なのだ。油断すれば何をされるかわからない。アキラはぞつとするような視線を浴びせられたことを思い出し、警戒を強める。

男は少女の全身をあざわらうかのような目で撫でた。

「あんな取り決め、時間がかかってしかたない。お嬢さん、あんたもそう思うでしょう？ 早く帰りたいとは思いませんか？」

「だからプレイヤー同士直接争おうというのですか。それは当初の意図から外れています」

「おかしいゲームよりもよほどわかりやすいと思いますけどね。——戦って勝ち残った人間が己の目的を果たす。それでいいじゃないで

すか」

ぱちんと指を鳴らした男は、自分が少女をねじ伏せられると疑っていないようだった。目の前にいるアキラを見ようとせせず、その斜め後ろにいる彼女を相手にしている。

じわじわと圧してくるような男の言葉に、少女は毅然とした態度で首を横に振った。

「私たちに与えられた課題は直接の戦闘ではありません。それぞれが取り決められた都市を攻略することこそが肝要でしょう。それに、このようなやり方をしていればいずれあなたの身が危くなる。他のプレイヤーが黙ってはいませんよ」

「他のプレイヤー、ですか」

男は喉を鳴らして笑う。お世辞にも好意的とは言えぬ笑声は、濡れた倉庫の壁にぶつかって響いた。

「他のプレイヤーの誰が、あなたの味方になると思うんです？ お嬢さん、あなたはこの勝負にお情けで参加が許されてるってことを忘れちゃいけない。あんた一人なんですよ、くっだらな私欲でこのゲームに参加しているのはね」

霧雨が世界の音を吸い取っていく。

部外者としてわけもわからぬまま居合わせているアキラは、それでも男の嘲りに胸糞の悪さを覚えた。重く感じてきた鉄パイプを握りなおす。

「オレのことを心配してくれなくなっちゃって大丈夫ですよ。お嬢さん、あんたがここで退場したって誰も惜しまない。——だから、さつさと帰っちまえよ」

男の指が、浮いている少女を指す。

その指先が赤く光ったと、一瞬思ったのは気のせいなのかもしれない。

だがアキラは確かに「見た」思った。

思った瞬間、反射的に鉄パイプを振り下ろす。

半ばパイプの重みに任せての動き。錆びて泥だらけの鉄棒は男の腕

を打ち、その手はあっさりとぬかるみの中へ突っ込んだ。直後、ジュッと物の焼けるような音がする。

——あのまま何もしなければ、焼かれていたのは自分か彼女だったかもしれない。

アキラはとっさの行動に安堵しかけたが、それで終わりではなかった。

男はまったく眼中にいていなかった少年の行動に、いらだちの表情を見せる。

「このクソガキ……。先に殺してやろうか」
「逃げて！」

向けられる視線は、それだけで人を萎縮させる力があつた。

だがその敵意はかえってアキラを突き動かす。彼は半ば防衛本能によって、土に埋まりかけた鉄パイプを振り上げた。

男は泥に汚れた手を引き抜くと鼻で笑う。

「やってみろよ」
「っ、この」

挑発にのって鉄棒を打ち下ろす。

男はそれをよけようもしない。仁王立ちのままアキラを見ているだけだ。

相手が動く予想していたアキラはぎょっとしたが、重みのある鉄パイプを止めることはできない。中途半端な速度で繰り出された攻撃は、そのまま上下反転している男の股間を強打した。

「うわ……っ」

手に跳ね返ってきた衝撃に、思わず呻いてしまったのはアキラの方だ。彼は鉄パイプを取り落とすと少女の隣まで下がった。

一方、男はというとまったく効いている様子がない。にやにや笑いで二人を見ている。

「どうなっただ、っていうか俺が痛い……見てるだけで痛かった。精神的にきた」

「……そうなるのではないかと思いました」

濡れそぼった少女は頭を抱えて溜息をついた。

二人のさかさま人間と共にいるアキラは、いいかげん上下の感覚が狂いそうになってくる。増してくる焦燥感に、彼は頭を振って水滴を飛ばした。

「そうなると思ったなら先に言えって！」

「それが、今ではつきりしたのですが——あなたの確信はあなたにしか通用しないのです。たとえば私は、自分が濡れているように見えません」

「へ？」

アキラは彼女に向かい言われた意味を確認しようと思ったが、男の笑い声がそれをさえぎる。目つきの悪い男は、口元をゆがめて不ぞろいな歯を見せた。

「それで終わりか？」

「……っ！」

のしかかる視線。

アキラは身をひるがえしながら少女の手を取る。

すばやく逃走に転じた彼は、だが相手への牽制も忘れてはいなかった。駆け出しざま足下の泥を男へと跳ね上げる。やわらかくぬかるんでいた土は、期待以上にべったりと男の顔にはりついた。

「クソ！ てめえッ」

響き渡る罵声を見捨てアキラは走る。先に見えてきた倉庫の角を左へ曲がった。雨でやわらかくなった地面に足を取られそうになるも、なんとか態勢を保って前へ跳ぶ。

——このまままっすぐ行けば、通用門から表へ出られる。

だがそれは相手もわかっていることだろう。逆周りで待ち伏せされたら終わりだ。

アキラは通用門へ向かうべきか、別のルートを探すべきか短い間に逡巡する。その時、少女が左前方を指した。

「あそこに」

「窓か」

壁の途中に見える両開きの窓は、だがたしか鍵がかかっていたはずだ。彼は少女の手を離すと、走りながら身を屈める。泥の中に埋もれていた石を拾い上げた。

「警備が来て俺だけ捕まるってのは勘弁してくれよな！」

買った雑誌だけでなく通学用バッグも置いてきてしまったのだ。後で回収できなかったら泣くに泣けない。社会的なペナルティはもつとこめんである。

アキラはそんなことを祈りながら、手の中に握った石をふりかぶった。錠が見える場所めがけて叩きつける。

耳障りな音。一度目でガラスにひびが入った。二度目で亀裂が広がり小さな穴があく。少女はその穴にためらわず細い右手を差し込んだ。錠がはずされると同時に、アキラが窓に手をかける。

「行くぞ」

ちらりと左側を見たが、男の姿は見えない。アキラは窓枠を乗り越え、と暗い倉庫の中に下り立った。続けてさかさまの少女がすりりと入り込んでくる。彼は反射的に彼女の手を取ろうと振り返った。薄暗い中でもよく見える白い手。繊細な彫刻のような少女の手は、傷一つついていない。鍵を開ける際、破片で怪我をしてしまうのではないかと危ぶんでいたアキラは、なめらかな肌に少しだけ安心する。——そんな自分に気づいて苦い顔になった。

「どうかしましたか？」

「……早く目が覚めりゃいいって思ってる」

顔をそらしてぼやくと、少女は目を伏せた。

「ごめんなさい」

消え入りそうな謝罪には、みじんの偽りも感じられない。

アキラは決まりの悪さを覚えると、何も言わずに彼女の手を取って走り出した。

4・コントラクト

倉庫の中は大きく三つの部屋にわかれていた。

まずがらんとした広い部屋が隣り合わせに二つ。そのうちの片方には大きな鉄のコンテナがパズルゲームのように積まれている。それ以外は倉庫内で使うもののなか灯油缶が隅に並べられており、少し離れた場所には煤けた古いストーブが置かれていた。

もう片方の部屋は運搬用のスペースらしく、中央にかなり大きな転移ポート設備が備えつけられている。だが電源が落とされているようで、細い柱で外周を囲まれた作動部に踏み入っても一向に動く気配がない。直径七メートルはある円形のポート床は、暗く沈黙したままだった。

アキラたちは電源を探して、三つ目の部屋である管理室に入る。

倉庫の隅にある小さなこの部屋には窓一つなかった。

「まっくらですね……」

「警報も鳴らないし、廃倉庫なのかもな」

だとしたら、転移ポートでの脱出は絶望的だ。設定が消されているならどこにも移動できない。アキラはそうでないことを祈りつつ、手探りで壁のスイッチを探した。あせりのせいかやたらと手が震える。

少女はそんな彼の様子をじっと見つめた。

「私が出ていけば、彼はあなたまで傷つけないはずです」

「だといいいけどな。ちょっとやばそうなやつだったぞ」

アキラは照明のスイッチらしきものを見つけたが、押しても部屋は明るくならない。やはり電気の供給自体が断たれているのだろう。舌打ちしたい気分でアキラは頭をかいた。

「どうすっかな……」

窓は割れているし、足跡は残っている。見つかるのは時間の問題だ。こうなったらコンテナの影にでも隠れて、相手が探しにきた隙

に逃げるしかない。アキラは引き返そうとして、だが思いきりその場でのけぞった。少女にひっぱられた後ろ髪を押さえる。

「何すんだよ」

「私の代行者になってください。代行者であれば、彼に対抗することもできるはずです」

少女は右手のひらを見せる。暗い中でも浮き上がる青いコードは、少女の手の中でひどく非現実的に光っていた。

アキラは息を飲んで青くゆらめく式を注視する。

「私たちプレイヤーは未契約であるかぎり、この世界の物質と接触はしても、そのことによる影響を受けません。ですから雨に接触しても『濡れた』とは認識しませんし、殴られても痛みを感じない。」

——ただ代行者であれば、その制限を越えることができるのです」

「あいつを殴れるってことか」

「スキルを使うか、素手で直接攻撃するか、でなければいけません」

「きびしいな」

何しろアキラはこれまでの人生で、真剣に殴り合いの喧嘩をしたことなど一度もない。いくら攻撃が効くようになって、素手限定では負ける可能性の方が高いだろう。相手の男はたぶん、人を殴ることに抵抗がない人間だ。ならば鍵となるのは「スキル」とやらの方だが——

「その代行者つてのは、後からやめることはできるわけ？」

断片的に聞いた話からは、彼らが何を目的として争っているのかわからない。

そしてアキラは、わからないまま取り返しのつかない状態になることに、少なくとも抵抗があった。うかつに首を突っ込んで、後から間違いとわかったなら目もあてられない。

緑のサンドレスを着た少女は、暗闇の中で息をつめる。

「それは……できません。手段がないわけではないのですが、条件が厳しいのです」

「やっぱりか」

「でも私は！」

「声大きいって」

アキラはあせって彼女の口をふさごうとしたが、暗闇に目が慣れてきたとは言え、相手のことはおぼろげな輪郭しかわからない。彼女がさかさに浮いているのも重なって、伸ばした手は濡れた額をぺちりと叩いた。少女はそれで怒られたと思ったのか黙りこむ。

気まずい沈黙に、アキラは先ほどまでとは違った意味で逃げ出さなくなった。

「……言ってみるよ」

「なにをですか」

「何しにこっちに來たのかって。私欲で参加してるとか都市攻略とか、なんか物騒なこと言ってただろ。いいから本当のこと言ってみるよ」

居心地の悪さに耐えかねて促したアキラは、あわてて「嘘ついたらわかるからな」とつけたす。もちろんそれは嘘なのだが、釘をささないよりはきつとマシだ。空の向こうから來たというこの少女は、今のところ彼の目には、真面目な性格の持ち主であるように見えた。袖口から滴る水が、ぴしゃりと音を立てる。

錆びた鉄の臭いが埃くささと混ざりあって、子供の時のことを思い出させた。初等部時代に友達同士三人で廃工場に忍び込んだ思い出。あの時たしかミヤは、かたくなについてくることを拒んだのだ。今でこそ人懐こくフットワークの軽い彼女は、昔はひどく融通のきかない性格をしていた。だが「女の子」とは得てしてそういうものなのかもしれないだろう。

だから目の前の少女も、本当のことは教えてくれないのかもしれない。なんとなくアキラはそう思った。

少女は自分の手のひらにあるコードを覗きこむ。

青い光に照らされる顔。夜の光を浴びたような彼女の貌は、綺麗ではあったが、ひどく寂しげであった。長い睫毛の落とす影が濡れ

た額に伸びる。

「プレイヤーの目的は先ほども言ったとおり人それぞれです。ただ基本的には、代行者と契約して与えられたキースキルを譲渡する、というのが準備段階。その後、二人で協力して割り振られた都市を確保することが、全員共通の目標と言えます」

「都市を確保？　ってそれ、征服でもするつもりか」

「そうしようとするプレイヤーも、中にはいるかもしれませんが」

「は……？　本気かよ」

冗談交じりの言葉に聞き逃せない内容を返され、アキラはあんぐりと口をあけた。

呆れるべきか怒るべきかわからない。たとえば自分とこの少女が協力したとして、治安維持部や空塔管理部などの目を出し抜いて第八都市をどうこうできるとは思わない。

だが彼女は少なくとも、真剣にその可能性があると信じているようだった。啞然としているアキラに、強い語調で訴える。

「でも、私は違います！　私は、この世界をどうしようとも思っていないんです！」

「なんだそりゃ」

「今までこのこと何も知らなかったから……。ちゃんと見ておきたくて、私は」

もどかしげに口ごもる彼女は、どう説明すべきか迷っているように見える。

しかしそれは、嘘をつこうとしているというわけではなく、単純にふさわしい言葉が見つからずに困っているようだった。じつと様子をつかがっていたアキラは、黒い瞳が急にうるむのを見てぎよつとする。

「なんだよ」

「……お姉ちゃんが」

「うん？」

「お姉ちゃんが、病気なんです……。昔からずっとそうで……。そ

れで、こつちの世界になら、手立てがあるって聞いて……」

小さくなって消える声に、またぴやりと水滴の音が重なる。

まるで涙の音のようなそれは、しかしアキラの耳に入らない。彼の脳裏にはその時、自分自身のあいまいな記憶が浮かび上がっていた。

脳裏に広がるものは、純白の空だ。

白い光。空塔は見えない。まぶしくて目を開けていられない。

アキラは繋がれた左手を握りしめ、隣の少年へと尋ねる。

「おにいちゃん。どこにいくの？」

「違うところ。——お前も行く？」

「いきたいけど。みんながこまらないかな」

当然の心配に、兄は答えない。

ただ高い空を仰ぐ少年をアキラは眺める。小さな左手にぎゅっと力をこめた。

世界に音はない。そのような記憶はない。

彼はまぶしくてしかたのない空を、兄越しに見上げる。

白い、のつぺりとした空。

そして気がついた時——アキラの兄はもうどこにもいなかった。

「あの？」

コードを持たない方の手が伸ばされる。その手と心配そうな声に、アキラははっと我に返った。ただの夢だと、散々周囲から言われた記憶から意識を引き戻す。

「悪い。ちよつとぼけつとしてた」

今は時間がないのだ。アキラは背後のドアを振り返ったが、まだそこが開けられる気配はない。もっとも相手は足音をさせないのだ

から、この瞬間に嘲笑とともに男が現れてもおかしくはないだろう。その瞬間を想像すると背筋がぞっとする。

アキラは濡れて重くなった制服の上着を脱ぐ。白いカッターシャツの首元もゆるめ、両袖をまくった。たいして鍛えられているわけでもない腕に自分でも苦笑いしてしまう。

「姉貴がいるのか」

「……はい」

「それで、その治療法とかはこっちの医療センターとか行つて聞いてみればいいわけ？」

「え、あ……わかりません」

「俺、研究所とかそういうの知らないからな。もし第八都市でわからなかったら無理だ。まだ十六歳だから出都許可がないんだよ」
通常、他都市に移動する許可が取れるのは十九歳からだ。もし彼女の姉を救う手立てが別都市にあるのだとしたら、アキラが協力者であるかぎり行き詰まりになってしまう。

それを一応断ってみたのだが、少女は微苦笑してかぶりを振った。
「いえ、多分大丈夫です。振り分けられた都市を確保できれば、他都市の権利者と交渉もできますので」

「ふーん？ まあ、じゃあいいか」

わからないことはまだまだ多い。

だからきつとこれは最低限の対応だ。今この場を切り抜けるためだけの決意。

追われて飛び出してしまった車道から、植え込みを越えて元の歩道へと戻るように、外れかけた日常に戻るためには現状を飛び越えなければいけない。

アキラは自分の右手のひらを眺めた。部屋が暗くてよく見えずとも、そこがじつとりと濡れていることは感じ取れる。雨が汗かといったら後者だろう。思考は麻痺していても、強い危機感はいちで息づいている。彼は一度手を強く握り締めた。

汗を拭った程度で何かが払拭できるわけではないが、多少の見栄

は張りたい。アキラは湿った制服の裾で手のひらを拭いた。
そして改めて、浮いている少女に向かって右手を差し出す。

「手」

「あ、はい」

「違う。右手」

「え……」

コードがある側の手を呼ぶと、彼女は両目をまたたかせた。アキラはドアの方をうかがいながら少女を急かす。

「早くしろって。いいかげん追いつかれちゃう」

「でも、いいんですか？」

「他にどうしようもないだろ」

——彼女の目的を聞いて、気が変わったとは言わない。

姉の為に何かをしたいと言う少女に共感を覚えた。けれどそれは人に言う必要もないことだろう。言ってもしかたのないことはあると、この十年でアキラは学んだのだ。だからただうなずく。

「早く」

少女は一度、自分の光る手のひらを見た。黒い瞳に静かな感情が満ちる。

夜の海に似た風。だがそこに映る意思の光は強い。

彼女は小さく頷くと、左手でアキラの手を取った。水中を泳ぐように自分の体を引き寄せる。漂う髪先は闇へと溶け、薄い服の裾がふわりとたなびいた。白い指先がアキラの顔へと伸ばされる。

青く浮かぶ式。アキラは向けられるコードを注視した。少女はその彼を見つめる。

「名前を」

「ん？」

「名前を教えてください」

「瀬戸アキラ」

「セト・アキラ」

復唱された自分の名は、抑揚のない発音とあいまって扉を開く呪

文のように聞こえた。初等部のころ読んだ童話に、そんな話があったことをアキラは思い出す。

ならば彼女の役割は語り部が導き手か。少女の右手が、ついに彼の額に触れる。

「プレイヤーナンバー13、シエラ・ハーディ。コマンド・コントロール」

ぴたりとあてられた手のひらから熱が伝わる。

アキラは両目を閉じる。例のコードが熱源であるのだろう。低温火傷しそうなほどのじんわりとした熱さが、額から脳の中へと忍び込んできた。少女の声が続く。

「ターゲット、セト・アキラ。アナリゼーション……タイプE、レベル1」

少女の声にかすかな驚きが混ざったことにアキラは気がついた。だがその意味まではわからない。触れられた場所がじんじんと熱を持ち、考え事がしづらかった。

彼女は小さく息を吐く。

「コマンド・トランスファー、キースキル『チェンジリング』……セツ」

——脳が焼ける。

そう思ったのはほんの一瞬だった。苦痛を感じる前に熱はさっと消えうせる。呆然とするアキラの頭の中で、ぱちんと何かが爆ぜた気がした。

額から彼女の手がゆっくりと離れる。あとには相変わらず濡れたままの前髪が戻ってきた。小さな手が触れていた部分には、ただ少し温められていた感触が残るだけである。

——これで終わりだろうか。特に何かが変わったようには感じない。

アキラはそう思いながらも、だが彼女の手がはずされたことでそっと目を開けた。すぐ前には少女の顔があり、彼女もまた目を開けると微笑む。

「これであなたが私の代行者です。セト・アキラ」

少しの罪悪感とひとまずの安堵を繕りあわせた微笑。

間近に見えるその顔は美しく、はじめに見た瞬間よりもよほどリアルで、鮮烈だった。

5・チェンジリング

「よし、じゃあスキルってやつの説明頼む。殴り合いとか自信ないからな」

「わかりました。まずあなたのスキルですが――」

少女は口早に説明を始める。その時、けれど彼女は大きく両目を見開いた。

背後から薄い光がさした直後、二人の顔の横を赤い光が走っていく。あまりの唐突さに硬直しかけたアキラだが、体は反射的に動いた。目の前にあった少女の手をつかんで床へと引き下ろす。

「伏せろ！」

次の光条がドアの隙間から迫る。アキラは咄嗟に少女の上に覆いかぶさった。頭のすぐ上を何かが走っていく。それはそのまま奥の壁に着弾して、赤い火花が上がった。アキラは体を跳ね上げると一人ドアへと走る。

「……っの！」

勢いのまま鉄扉を蹴り開ける。

先にいる人物が倉庫の管理人だったらしょうかと一瞬思ったが、管理人ならドアの隙間から光を放ったりしないだろう。アキラの狙いは当たって、ドアは何かにつかり跳ね返ってきた。再び閉まってしまう前に、彼はすばやく外へとすべりでる。

足を止めては危ない。それは半ば直感であつたが、この状況では正しく働いた。アキラのいた場所を赤い閃光が通り過ぎる。彼は固い床を蹴って移動しながら男を振り返った。

あいかわらず上下逆転している男は、何もない空中を一步一步沈みこむようにして歩きながら、アキラを追ってくる。さかさまの右手が上げられ、その指先から赤い光が放たれた。

「ガキが！ ちよろちよろしてんじゃねえ！」

「こええ……」

文字通り顔に泥を塗られた男は、アキラを当面の標的とみなしているようだ。漫画の中でしか見ないチンピラのような相手に、彼は今更ながら己の危機を確認した。

「こんなところで巻き込まれて終わりとか、マジ勘弁だからな」
そうならないためには、とりあえず目の前の男を何とかするしかないだろう。

アキラが駆けるすれすれの背後を、赤光がつらぬいていく。壁や床にあたって火花を散らす光は、しかし何かを破壊するというわけでもない。少女の言うとおり、プレイヤーはこの世界のものを直接破壊することはできないのだろう。——ただしアキラ自身は別だ。男はそれを知ってか知らずか、彼を狙って光を放つ。

「逃げ続けても後がないか」

相手に弾切れがあるというなら別だが、そのようなものを期待しない方がいい。ただでさえ体力の消耗は、逃げ続けているアキラの方が大きいのだ。理想を言えばこのまま大きく距離を取りたいが、逃げすぎて少女の方に標的が移っても困る。

アキラは転移ポートの反対側に回りこんだ。放たれる閃光をポート周囲の柱を盾にして避ける。ばちばちと耳障りな音が起るが、白い円柱には傷一つない。アキラはそのことに安心して一息ついた。手短に状況を整理してみる。

「たしか物を介しての攻撃は効かないんだっけな」

不便なことに、代行者になっても直接攻撃でなければ、さかさまの人間には意味がない。

それは思い切り蹴ったドアがぶつかっただろうにもかかわらず、男が何の反応も見せていないことから明らかだ。アキラが柱の影から様子をつかがっていると、相手は憎々しげに顔を引きつらせながら彼の方に向かってくる。ついに円柱の間からポート内部へと入ってきた男はゆっくりとしたペースで一步一步進んだ。

何もない空中を歩くということは、虚都人にとってもままならない行為なのかもしれない。アキラと契約した少女も、宙を泳ぐよう

にして移動していたのだ。男が素早い動きを取れないのであれば、付け入る隙もあるだろう。

「とりあえず一発殴ってみる、か？」

それで相手が弱ければラッキーだ。このまま逃げ回っているよりは、はるかに前向きである。

アキラは柱を背に近づいてくる男を待った。体の右すれすれを赤い光が走っていく。

「さっさと出てこい！ 穴だらけにするぞ！」

「うへ」

——そんな脅しで出てくるやつはいない。

そう胸中で毒づいたアキラはしかし、次の瞬間ぎよっとして振り返った。倉庫内に、水晶を叩くような澄んだ声が響きわたる。

「やめなさい！」

管理室に残っていたはずの彼女は、開いたままのドアを背に男をにらみつけていた。何の武器も持たない華奢な体を、男は唇を吊り上げて振り返る。

「先に死にたいんですか、お嬢さん」

「やめなさいと言いましたよ」

硬い声は震えてはいなかった。少女は毅然とした態度で男に対する。天井に向かって広がる裾から白い爪先がのぞいて、アキラはその時はじめて彼女が裸足であることに気づいた。

少女は拳を作った右手を上げ、男へ向ける。

「あなたがそういう態度を崩さないのなら、私もあなたへのスキルの直接行使をためらいませんよ、スガ」

——はったりだ。

アキラは彼女の無謀さに啞然となった。握ったままの手の中にもうコードはない。それは彼と契約した時に消えたのだ。だがスガと呼ばれた男はそれを知らない。だからこそ彼女はこのような賭けに出たのだろう。アキラは汗のにじむ手のひらを握り締めた。

スガは体ごと彼女に向き直る。

「やってみたらいいじゃないですか、お嬢さん」

「あなたもただでは済みませんよ」

「ただで済まないのはそっちだけだと思いますけどね。あんたに振られたスキルはオレのものとは違う。住人に譲渡しなきゃ意味がないものだ」

「……私のスキルを知っているの？」

少女の顔に動揺が走る。今までぶしつけな競争者へ対し、なんとか保たれていた気丈さが揺らいだ。スガは陰惨な笑いを浮かべる。男の右手が彼女に向かって上げられた。

「っ、アホかよ！」

柱の影からアキラは飛び出す。赤い光を打ち出そうとする男に向かい、床を蹴った。

男が目だけで彼を一瞥する。

暗い圧力を帯びた視線。

それは刹那、彼の身をすくませた。前に出しかけた足が鈍る。

——恐れを抱いてしまったのは一秒にも満たぬ時間だ。

だが、ほんのわずかな躊躇をあざ笑うように、赤光は少女に向かって放たれる。

大きく見開かれる黒い瞳。少女の体が大きく震えた。

アキラはそれを見て我に返る。

残り三メートル。

さかさまの男までの距離を一気に詰める。スガはまだ、彼女の方を見ていた。

「クソツタレが……っ！」

アキラは走ってきた勢いのまま、男の側頭部を蹴り上げる。

先ほどの攻撃が効かなかったこともあり、スガはアキラのことをさほど警戒していなかったのだらう。嫌な音がして首が傾き、黒のキャップが宙に飛んだ。

アキラはさらに拳を作ると、男の顔めがけてそれを振るう。

鼻を狙って振り下ろした攻撃は、けれどスガが顔をそむけたせい

で、頬をかすつたに留まつた。そのまま体勢を崩しかけたアキラに、男の右手が向けられる。

「死んどけ、ガキ」

「ちょ……っ」

アキラは何とか踏みとどまると、咄嗟に男の右手首を掴んで曲げた。方向を逸らされた閃光が円柱の一つに当たって四散する。

だがそれに安堵する間もなく、アキラの鳩尾には男の左拳が埋まつた。

「ぐ……ごっ」

息が止まる。上体を折つてアキラは衝撃の波をこらえた。頭の中では隙を見せてはいけなないとわかつていたが、体が思うように動かない。

スガは右手をアキラの頭にあてた。

「消える」

——ここまでか、と。

アキラは齒嚙みする。

まるで持っていたものを全て投げ出し、あおむけに寝転がるような気分だ。

大事なものも、そうでないものも、皆ここに置いていく。

そうして唐突に終わってしまうのだらう。ばやけかけた記憶も今度こそ消えてしまう。

怖くはない。ただひたすらむなしい。

そして悔しかった。

「ア、キラっ！」

細い声が彼の名を叫ぶ。

アキラはすぐ近くからその声が聞こえたことに驚愕し、顔を上げた。

見ると、少女が後ろから男に取りついている。彼女は黒い液体に濡れた両手で、スガの顔に爪を立てていた。男は彼女を振り払おうと体を大きく揺する。

「離せ、コラ！ …… っぐッ」

凄みのある怒声にうめき声がわずかに混ざったのは、少女の指がスガの目に入ったからだ。男は彼女の肩をつかむと無理やりに引きはがした。そのまま宙に投げ出されそうになった彼女へとアキラは反射的に手を伸ばす。

「おい！」

少女の名は聞いていない。だがその手にはかろうじて届いた。アキラは彼女を引き寄せつつ、その場から逃げ出す。背後から狙撃されるかとも思ったが、赤い光は追ってこなかった。少女の爪だけでなく黒い液体が目に入ったのかもしれない。苦痛があった舌打ちがかすかに聞こえる。

二人は見通しのいい場所から、コンテナの詰まれた隣のスペースへと入った。すぐには見つからないだろう入り組んだ積荷の裏へと回る。そこで足を止めたアキラは、ようやく振り返ると手を引いていた少女の様子を確認した。

「無事か？」

「はい」

スガが放った閃光は、彼女に致命傷を与えてはいなかったらしい。よく見るとむき出しの白い左腕が、肘の少し上から黒い液体で汚れていた。彼女の両手についているのも同じ液体だろう。アキラは眉をしかめる。

「どうしたんだ、それ」

「多分、血です」

「は？」

「避けたつもりなんですが、かすってしまいました」

言いながら傷口を押さえる少女に、彼は言葉を失いかけたが、すぐに現状を思い出した。

「何とかなったら手当てしてやるからな。——スキルの使い方教えてくれ」

「わかりました」

殴り合いでは勝てないということは、期せずして証明されてしまった。

ならば残る手段はもうスキルを使うしかない。

アキラはそう思いながら、ちらりと先ほどの彼女の狼狽を思い出した。いくぶん顔色の悪くなった少女は、しかし気弱になっている様子もなく説明し始める。

「私に与えられたスキル……あなたのスキルは『チェンジリング』という特殊なものです。これはスガの言った通り、代行者、つまりこの世界の住人でなければ使えないスキルで、直接の攻撃や防御はできません」

「なんか面倒そうだな」

「その代わり使い道は多いですし、うまくいけば逆転も可能になります。——いいですか、『チェンジリング』は、使用者に属する物質や性質を、短時間対象のものと入れ替えることができるんです」

「……全然わかんね」

「たとえば、あなたの腕力と相手の腕力を入れ替えるとか」

「え、そんなことができるのか？」

それが可能だとしたら話はだいぶ変わってくる。不利を有利に覆せるスキル。たしかに使いようによっては逆転も難しくない。アキラは声を潜めたままであったが、手の届きそうな打開策を前に、意気込んで続きを問うた。

「どうやって入れ替えるんだ？」

「宣言で入れ替えます。あなたが『自分のこれと相手のあれを入れ替える』と宣言するのです」

「それだけ？」

「それだけです。が、むしろ宣言によって固められる意志の指向性の方が重要と思ってください。言っただけで確固としたイメージが

伴わない場合は入れ替えできませんし、入れ替える物や属性の差異が大きいほど持続時間が短くなります。おそらく、あなたと相手の体の位置を入れ替えようなどと思っても、スキルが初期状態の今では十分の一秒も難しいでしょう」

「使いどころが問題か」

「初期状態ですと一度使うとしばらく使えなくなりますから、よく考えてください」

「一回勝負とかプレッシャーすぎんだろ。追試くらい用意しろよ」

おそらく相手のスキルはあの赤い閃光なのだろうが、汎用性が違うとは言え、今の状況では差がありすぎる。アキラはかつてないほど必死に思考をめぐらせた。

「さっきの腕力を取り替えるってやつだったら、どれくらい持続する？」

「二十秒……いえ、十五秒でしょうか」

「短い……」

「特殊なスキルですから。傾向としては物質的な交換ほど短くなります」

「って言われてもな」

仮に腕力を変えて攻撃したとして、はたして十秒で勝負をつけることができるのだろうか。入れ替わるのは力だけなのだ。避けられってしまったら意味がない。

アキラは小刻みに震えている自分の両手に目を落とす。先ほど殴り殴られた時は必死でそれどころではなかったが、こうして少し離れると、自分がいかに喧嘩に不慣れであるのかわかる。怯えているというつもりはないが、体が勝手に震えて止まらないのだ。

自分を見続けていてもしかたないと自嘲気味になったアキラは、あらためて倉庫内を見回した。その視線が隅に並べられたあるものを捉える。

「……これ、どこまでやっていいんだ？」

「え？」

「いや、なんでもない」

少女の血を見て気になってしまったが、アキラたちは手加減などを考えていられる状況ではない。少なくともスガにはまったくその気がなかった。あの男相手に甘い考えを持てば、それは自分たちの身に跳ね返ってくるだけだろう。

アキラは短い間に腹をくくると少女に尋ねる。

「たとえば、こういう入れ替えだったら何秒持つ？」

そういつて説明すると、彼女は目をまたたかせた。アキラの提案が意外だったのか少し考え込み、だが答を出す。

「おそらく、三十秒」

「充分だな」

「ですが、それをどうやって——」

「一つ思いついた。けどそれより先に」

さかさまの少女をアキラは見やる。同じ目の高さ。だが別の世界に属する来訪者と代行者の二人は、ランプの絵札のように天地を異にしている。アキラは怪訝そうな表情の少女に、まじめくさった目で告げた。

「名前教えてくれ。けっこう不便なんだよ」

6・血と泥

霧雨が降り注いでいるせいか、外からの音は何も聞こえない。その代わり倉庫内に響き渡るのは、聞いたばかりの彼女の名前だ。

「シェラ・ハーディイイ！」

コンテナの裏に身を潜めたままのアキラは、スガの剣幕に首をすくめた。

「できるならこのまま逃げて二度と会わないってのを希望したい」

「無理でしょう。同じ都市にいる限り、いずれは遭遇します。向こうに代行者がいない今のうちに手を打った方がいいです」

「俺は心の準備が欲しかったよ」

石橋を叩いて渡るといっただけではないが、何でも勢いで行動できるような性格ではない。契約についてもしつかり説明を聞いてから決めたかったとは思うが、そうしていてもやはり同じ結果になるのかもしれない。アキラは、少女の真剣な横顔を視界の隅にみとめる。二人は近づいてくる気配に耳を澄ませ、タイミングを計った。足音がない代わりに、罵声とコンテナを蹴る鈍い音がこだまする。

「出てこい、クソが！ シェラ！ ここで逃げたって、てめえに逃げ場なんてねえぞ！ 他のプレイヤーはてめえを邪魔に思ってるぜ！ だからスキルが割れてるんだろがよ！」

鉄骨が組まれた天井に、赤い火花が散る。

その光を眼下に見下ろしながら、だがシェラはもう動揺を見せない。彼女は両腕の中に抱えたものへと視線を移す。

「うまくいくでしょうか」

「そんなのわかるか」

成功するかどうかなど、アキラの方が聞きたいくらいだ。下敷きサイズの薄い鉄板を手にした彼は、なかば自分に言い聞かせるようにして言を重ねる。

「だめだったらすぐ次だ。いつまでも同じところでこたわってても

しかたないだろ。みんなそうやってるし、いつかはチャンスが巡ってくる」

シエラはそれを聞いて、何か物言いたげな目でアキラを見た。だが結局は長い睫毛を伏せて頷く。それを了承の意と見て、アキラ自身も覚悟を決めた。

「この街ごと潰してやろうか！ シエラ！ お前の親父がどんな顔するのか見物だぜ！」

狂犬を思わせる叫びは、悪意にまみれた醜悪なものだ。

だがそれは、今に始まったものではない。アキラは鉄板を持ち直す少女に合図する。シエラは頷いて移動を始めた。また震えそうになる手にアキラは力を込める。

「気をつけて、アキラ」

「そっちな」

彼女の言葉を背に、アキラはコンテナの影から歩き出す。

広い部屋の真ん中にいる男までは直線でハメートルほど。アキラは低い声で呼びかけた。

「おい」

「ああ？」

コンテナを蹴っていたスガは、ゆっくりとした動作で振り返った。左目を細めたままなのはシエラによって傷つけられたからだろう。

黒いキャップを元通りかぶった男は、左手で首を押さえている。

「テメエから死にに来たか、代行者」

「実は俺もいまいち状況がわかってないんだけどな」

「今さら謝っても手遅れだ。オレが空塔を制圧したらこの都市はまっさきに潰してやる」

「……は？」

その宣言が単なる冗談ではないことは、男の傾いた目を見れば明らかだ。アキラは思わず息を飲む。

——この男は、街の象徴たる空塔を制圧し、第八都市自体をも潰すという。

突然空の向こうからやって来て、何もかもを蹂躪してやるというのだ。

さかさまの闖入者一人が都市を相手に、いったい何ができるというのか。短絡的すぎて意味がわからない。正気かどうか不明だ。だがそれら全ての困惑をよそにおいても、向けられる悪意だけは本物だった。

アキラは息を止める。

じりじりと頭の中が熱くなる。苛立ちが湧きあがり、それはすぐに憤りとなった。アキラはぽつりと呟く。

「……わかった」

「何か言ったか？」

「やってやる、つつつてんだよ！」

埃のつもる床の上を、アキラはスガに向かって駆け出す。男は乾いた笑いを見せると右手を上げた。光る指先。それを見たアキラは大きく横に跳んで閃光を避ける。スガはさらに少年を追って腕を振るうと、光を打ち出した。

「逃げるばかりか？ あ？」

挑発の声にアキラは答えない。彼はスガを中心として弧を描くように走った。途中、積まれていたコンテナの裏に入り光をさえぎる。飛び散る火花が鮮やかに倉庫内を照らし、ぱちぱちと音を立てて消えた。

「これ、凶悪な花火だよな」

アキラはうすら寒さを覚えながらも、そのままそこに身を潜めるようなことはしない。すぐにまた男の視界へと飛び出した。スガの攻撃に捕まらぬよう走る。

——相手の動きは鈍い。

虚都人は空中を機敏に移動できないのだ。だが、その有利も接近しすぎれば無になる。アキラは鳩尾に食らった一撃のことを忘れていなかった。近づく代わりにスボンのポケットから薄いスパナを取り出す。

「うまくいけよ……」

アキラは倉庫の隅で拾ったそれを、振りかぶるとスガに向かって投じた。スパナはくるくると縦に回転しながら飛ぶ。間を置かずアキラはその後を追って、自分も走り出した。

「は？ やけになったか？」

スガは嘲笑を浮かべて赤光を放つ。スパナを狙ったのだろうそれはしかし、空中に赤い火を弾けさせただけだった。飛来する金属は勢いを止めぬままスガの脇腹に命中する。男はわずらわしげにそれを払った。

「バカか、効かねえよ」

「知ってるっての！」

スパナを投げたのは単に接近するための時間稼ぎだ。そしてスガが向かってくる攻撃に対してどう動くか見たかった。

スガまで残り二メートル。アキラは右に跳んで次の閃光を避ける。そのまま半時計回りに走ると、すぐには転回できぬ男の後ろへと回り込んだ。首をひねって振り向こうとするスガの視界外から、後頭部を素早く蹴りつける。

「デメエ！」

「前向いてろ！」

相手が俊敏に動けず、閃光に頼りきっているなら、たんに正面から挑まなければいい。アキラは後ろに向けられようとする右腕を思いきり蹴り上げる。

「……ぐ……っ」

衝撃が肩に響いたのか、男は苦痛の声を上げた。アキラはもう一度スガの頭を蹴ろうとして——だがびくりと動きを止める。

焼け付く痛みが左耳に走る。

バランスを崩してアキラはよろめいた。赤い光が背後のコンテナにぶつかって爆ぜる。

声は出ない。ただ光がかすめていった耳がひどく熱い。触れずともそこが血濡れているのがわかった。

指だけを曲げ、閃光を撃った男が振り返る。

「クソ、外したか」

こめかみを打ち抜くつもりだったと言わんばかりの舌打ちに、アキラは数歩後ずさった。

喉の奥がカラカラと乾いて痛い。不思議なことに、激痛を訴える左耳よりも渴きの方がずっと気になった。心臓の鼓動が早くなりすぎて、全てがやけに遠く見える。

スガは宙を踏んでアキラを笑った。

「いまさら怖気づいたか。住人ごときが調子に乗ってるんじゃないぞ」

「……怖気づいてるわけじゃない」

「は？ 強がりか？」

「巻き添え食らわないように、って思ってたんだよ」

アキラの言葉と同時に、倉庫の天井から臭いのある液体が降り注ぐ。

それは真下にいたスガの両足を濡らし、服に染み込んで顔にまで滴った。

「なんだ？」

スガは顔をしかめて液体の降ってくる眼下を見下ろす。それを狙っていたように、空になった灯油缶が投げ捨てられた。くすんだ銀色の灯油缶は男の足にあたり、激しい音を立てて床に転がる。

アキラが男の注意を引きつけている隙に天井を移動していたシェラは、持っていた灯油を全てかけてしまうと緊張のまなざしで二人を見上げた。

その視線を受けてアキラは床を蹴る。彼は濡れて見えるスガに向かい、距離を詰めた。

シェラを見下ろしていた男は、彼に気づいて右手を上げる。

「バカか。意味ねえよ」

「言われなくても！」

濡れているように見えるのは、アキラの目にだけだ。

来訪者の彼らは、自分が濡れていると認識しない。ただ「液体と接している」と感じるだけだ。そしてそこからのなんの影響も受けない。

だがアキラはそうとわかった上で、正面からスガへと肉薄する。拳を振りかぶれば届く距離。男は当然のように赤光を放った。

鮮烈な敵意の光を、アキラは至近から鉄板で受ける。

飛び散る火花。その飛沫が灯油のたまるキャップのつばへとかかった。

アキラは息を飲んで起こる変化を待つ。

けれど彼の期待もむなしく、火花は消えて何も起こらなかった。

「クソ、だめか」

「火でもつけようってか？ この程度でつくわけねえだろ」

「たしかに」

言いながらズボンのポケットに手を入れる。

スパナが入っていたさらに奥、目的のものをつかんだアキラは、それを素早く取り出した。同時に振りかぶられる拳を左手の鉄板で受ける。その濡れた袖口へと、汚れたライターを近づけた。カチリと音がして、オレンジ色の火が男の袖へと移る。

アキラはそれを確認して飛び退くと、小さなライターを手の中で振った。

「発火装置が壊れてるストーブで助かった。俺、ライターなんて持ち歩いてないからな」

引火した火はゆっくりとゆらめきながら袖をのぼり、スガの白いパーカーを燃やし始める。

しかし男はなんら焦ることなく、自身の様子を眺めた。

「それで？ 火なら効くと思ったか？」

炎に包まれつつある男。アキラはその動きに注意しながら、スガ自身の目に今の状況がどう見えているのか気になった。だがそれは、みるみる体中に舌を伸ばす火を、男が消し止めようとしなかったことも明らかだろう。

アキラは耳の激痛を他人事のように感じながら、呼吸を整える。そしてスガを指さし宣言した。

「俺の確信が生む五感と、あんたの五感を入れ替える」

スキルの使用。相対者へと向かう意志。

脳の奥がかつと熱くなる。軽いめまいがアキラを襲った。

しかしそのめまいも、続く男の絶叫を前にかき消される。

アキラの五感によつて火だるまを味わうことになったスガは、不恰好な人形のように宙をのたうった。

「ぐあああああああ！」

アキラの目にその姿は、まるで滑稽な遊びのように映る。

セロファンで作られたような平たい炎が、スガの全身に貼り付けられ、ゆらゆらと震えて見えるのだ。

シエラの言葉を借りるなら、おそらく未契約の虚都人にのみそのように見えているのだろう。天井付近に浮いたままの彼女は青ざめた顔で、もかくスガを凝視していた。

アキラは入れ替わった五感への驚きから覚めると、スガに向かって駆け出す。

——入れ替えはもって三十秒だ。その間に勝負を決めねばならない。

彼は袖をまくった腕を振り上げ、暴れるスガに狙いを定めた。

「お前が！ 帰れよ！」

勢いのまま全体重をかけて、アキラは拳を叩き込む。

固く握った拳はセロファンにしか見えぬ炎を越え、男の鼻を割り砕いた。黒い血が飛び散り、スガが濁った悲鳴をあげる。アキラはそこで手を休めることなく、再び拳を振り上げた。何かにとりつかれたようにスガを殴り続ける。

「——アキラ！」

頭の中がじんと熱い。

シエラの叫びがやけに遠く聞こえる。

ただひたすらに、拳を振るった時間。

その終わりにスガは、パキンと乾いた音をたて、その場から消えうせた。

冷え冷えとした静寂が戻ってくる。標的を失ったアキラは、茫然と何もない空間を見つめた。

炎も、灰のひとつかけらもそこには残っていない。

ただ男を殴り続けた手には黒い血がこびりつき、彼の両腕は焼けて皮がひきつれるように痛んでいた。床には空の灯油缶と、小さな赤い石が転がっている。

「……終わっただのか？」

「ええ」

ゆっくりと下りてきたシエラが、手を伸ばしてその石を拾い上げた。彼女は、いびつなビー玉に似た石をアキラの前に示す。

「スキル石を置いての消失……これはつまり、彼がプレイヤーから下り、元の世界に転送されたということです。もう二度とスガはこちらの世界には来られない。——あなたの勝ちです」

「俺の、勝ち」

勝利の言葉は、今までの平凡な人生からはどこか浮き立って聞こえる。アキラは火傷を負った手で、血の流れる左耳を押さえた。先ほどまでただ熱く脈打っていただけのそこは、今はじんと痛みが増してきている。

「なんつーか、夢だとしたら痛いな……結構後味悪いし」

「すみません」

顔を曇らせて謝る彼女は、最初の頃の強引さがみじんも残っていなかった。戦闘が起きるなど予想外のことだったのだろう。消沈した姿はずぶぬれであることとあいまって、ひどく頼りなく見える。アキラはそんなシエラの様子に小さく息をついた。

頭の中を支配していた憤りと高揚はすでに消え、後には吐き気にも似た気だるさが残るだけだ。スガの異常さにあてられて、自分もおかしくなっていたのかもしれない。アキラはわきあがる眩暈を悟

られぬよう軽い口調で返した。

「あー、まあ、俺じゃなくて、俺たちの勝ちだろ」

「え……」

「よし、バッグ回収して帰るぞ。雑誌も残ってたらラッキーなんだけどな」

もつとも雨のせいで荷物はぐちゃぐちゃになっているだろうし、彼自身もぼろぼろである。寮に戻ったら友人たちに原因を聞かれるだろう。アキラは適当な言い訳を考えながら歩き出す。

シエラがその後をもたもとと追ってきた。

「私も行っていいんですか？」

「他に行くところあるってなら好きにしろよ」

「行きますっ！」

あわてての返答に、彼は気の抜ける思いを味わう。体が少しだけ軽くなった気がして、宙に浮く少女を振り返った。

「じゃ、帰ってから詳しい話聞くから」

「はい……よろしくお願いします」

今はまず、怪我の手当てと濡れた服の着替えが必要だ。それから先のことはその後に考えればいい。

アキラは虚脱した体を引きずって空倉庫を後にする。

彼の歩いた後には、血と泥が点々と重なりあい、いびつな線を描いていた。

7・帰宅

虚都人であるシェラは、もともと素質のある人間でなければ視認することができない。

それに加えてアキラと契約した今では、彼女の姿はもう、他のプレイヤーや代行者でなければ見ることはできないのだという。

そのことをアキラは彼女に聞いて知ってはいたのだが、實際目の当たりにすると妙なものだ。会社帰りの勤め人も、犬の散歩をする中学生も、宙に浮いているシェラのことなど見ようともしない。時折訝しげに振り返る人間もいるが、それはシェラではなく彼女に呼びかけるアキラを不審に思っているのだらう。見つかつて騒ぎになるのではないかと、緊張していたアキラは、結局誰に見咎められることもなく寮の自室に戻ってくることができた。

乾いたバスタオルを取り出した彼は、それを天井のシェラに投げる。

「適当にそのへん座ってて。着替えてくる」

「あ、はい」

少女はぺたりと天井に座ると、狭い室内を見回した。

六畳一間の部屋は、散らかっているというわけではないが、まったくすっきりはしていない。それはアキラの趣味の影響で、ワンルーム内のあちこちに食玩や付録の模型が飾られているためだろう。

部屋にあるものはシンプルなベッドと机、備え付けの本棚とクロ―ゼットだけで、寮の他の部屋と変わりがない。ただし窓枠や本棚の一角は、ミニチュアビル群が所狭しと占領しており、ある意味圧巻の眺めだった。アキラが数年かけて集めたそれらは、どれも非常に精巧なものばかりで、十分な広さがあれば大規模なジオラマが作れるほどだ。

頭からバスタオルにくるまっていたシェラは、アキラが洗面所から戻ってくると、机の隅に置かれた小さな公園を指さす。

「こういうの好きなんですか？」

「うん。よくできてるだろ」

濡れた制服からTシャツに着替えたアキラは、ベッドに腰かけると備え付けの救急箱から治療シートを取り出した。簡単に血を流してきた耳と両腕にそれらを貼っていく。鏡で見たところ、耳も多少外側がえぐりとられているくらいで、シートを貼っておけば一晩で治るだろう。

アキラは天井に向かって手招きした。

「シエラも腕怪我してるだろ。貼っとけよ」

「湿布？ それ貼るとどうなるんですか？」

「治る」

「え？」

「そっちにはこういうのらないのか」

外傷はよほど大怪我でなければ治療シートでじゅうぶんまにあう。完治までにかかる時間はまちまちだが、鎮痛効果もあるのでさほど気にならない。

シエラは不思議そうな表情で説明を聞いていたが、アキラが再度手招くと天井から下りてきた。ハンカチを巻いただけの傷口を出そうとして、だが口を押さえると大きくしゃみをする。白い頬ははじめに見た時より、若干青ざめていた。

「ひよっとして寒い？」

「う……はい」

「ちょ、それ早く言えって」

自分が濡れているように見えない、という言葉のせいで忘れていたが、アキラと契約した今はシエラも五感が変わったのだろう。よく気をつけて見れば縮こまってカタカタと震えている。濡れた服は華奢な体にべったりと張り付いたままで、彼女にタオルだけを渡していたアキラは、いささかあせて立ち上がった。

「とりあえず防水だからシート貼るぞ」

「はい」

「あと、そこ狭いけどユニットバスになってるから。入っとけ」

「お風呂、ですか……」

「嫌ならいいけど。風邪引いたら困るだろ。服は俺の適当に渡すから」

ベッドの下の引き出しを開けて着替えになるものを探そうとしたアキラは、遅れて彼女が困惑する理由に気づいた。さかさまの少女を見上げる。

「まさか、上下逆だと溺れたり？」

「かも、しません」

「じゃあ、そこはシャワー使うとか、何とか」

それでも色々大変なのかもしれないが、体調を崩すよりはましだ。アキラは使っていないスウェットの上下と新しいタオルをまとめてシエラに渡した。少女は複雑な表情でそれらを抱えると、宙を漂いドアの向こうに消える。

彼女を見送ったアキラは、濡れてしまったバッグから中身を取り出そうとして――だがふと現状のおかしさに気づいた。

「あれ……なんだこの状況」

――寮の自室にかなりの美少女連れ込んでいる。

しかもその相手にシャワーを使わせて、自分の服を着替えとして渡しているのだ。

これは色々削ぎ落として考えれば、非常に胸躍るシチュエーションなのかもしれない。

だがそう思っただけで考えてみても、アキラの中には妙な落ち着かなさが沸くだけであり、特に嬉しいとは思えなかった。その理由はと言えば、やはり彼女の見た目にあるだろう。

「さかさに浮いてるってな。それだけで違う生き物って感じ」

単に浮いているだけならともかく、上下反転しているという事実は少女の美貌を相殺するに充分な不審点であるようだ。ずっと見ていると自分の感覚が危なくなってくる気さえする。

アキラはバッグの中から教科書を救出すると、それを机の上に重

ねた。買った雑誌も幸い車道に残っており、少し濡れてはいたが付録に問題はない。透明のビニールに包まれた第八都市空塔の模型を、アキラは丁寧に取り出す。

白くすらりとした空塔は、それだけで美しい。

第八都市に生きる者のほとんどは、多かれ少なかれこの白い塔に誇りと憧憬を抱いていると言われるが、それは決して誇大な話ではない。アキラもまた例外ではなく、彼は満足感を抱いて人差し指ほどの塔模型をじっと見つめた。

その時ふとどこまでも白い空が、ぼやけた記憶をともなって脳裏をよぎる。

「姉貴のために、か」

あの異様な状況においてアキラが契約を決意したのは、言ってみればその動機に押されたからだ。シエラの言葉に嘘がないと感じたから引き受けた。

だが結局そういうアキラは、まだ自分の過去について納得しきれていないのだろう。彼は振り返って窓の外を眺めた。黄昏を終えた鏡面は、群青色から黒へと変じつつある。けれど暗くなっていく世界の中でただ一つ、高くそびえたつ白い塔が浮き立って見えた。

空面制御塔——通称空塔と呼ばれる建造物。

ここ第八都市にある空塔は、白く細い円柱の形をしており、その壁面には一ヶ月先までの天候予定が表示されている。

もつともアキラの部屋からでは遠すぎて、天候予定まではさすがに見えない。ただ空塔は青白いライトに照らされ、きらめくビルの向こうに静謐な空気をまとって佇んでいた。アキラはしばらく空塔を見つめていたが、肌寒さに気づくとブラインドを下ろす。

「そっういや虚都の方にも空塔ってあるのか？」

「ありません」

「ないんだ」

反射的に答えたアキラは、ぎょっとして振り返る。見上げると天井には、いつ帰ってきたのかだばつくスウェットを上だけ着たシエ

ラが座っていた。濡れた髪を器用にバスタオルでまとめている彼女は、ちゃんと温まってきたらしく白い頬がうつすら上気している。並んで揃えられている細い素足について視線をやったアキラは、あわてて目をそらした。

「なんで下履かないんだよ」

「長くて引きずってしまっんです。髪ってどうやって乾かすんですか？」

「普通にドライヤー」

引き出しからドライヤーを取り出したアキラはそれを天井に渡そうとしたが、コードの長さがどうしても足りない。

そのことを察したシェラは自分で下りてきた。ベッドに座る彼と同じ目の高さで宙に立つ少女は、もたもたと慣れない手つきで髪を乾かし始める。スウェットの下から覗く小さな膝頭を見ないように、アキラは手元でふやけてしまった雑誌を開いた。そこには十二で一つの円となる全都市の完成模型写真が掲載されている。

少女の澄んだ声がドライヤーの音に重なって聞こえた。

「空塔はこちらの世界特有のものです。私のいた方……虚都にはありませんよ」

「じゃあ空を支えているのはこっち側なのか」

二つの世界で共有しているという鏡面体についてそう言うと、シェラは微笑した。

「こちらでは空と空塔は切り離せない存在のようですね」

「切り離したらやばいだろ。鏡面体が落ちてきたらどうするんだ」

「でも、たった十二本でこれだけのドームを支えているというのも、不思議な話だと思いませんか？」

「そうかな。別に考えたことなかった」

空塔のテクノロジーについて、一般にはほとんどが伏せられている。

だが、それらを知らなくとも生きていくことはできるのだ。この地上に生きる人間たちが「虚都」について何も知らないように。

「向こうではみんなそうやって浮いているわけ？」

「たいして考えもせず口に出した疑問に、シェラはくすくすと笑い出した。」

「いいえ。こちらと同じように歩いてますよ。飛んだり浮いたりはできません。今、こうなっているのは私たち来訪者の存在属性が、元の世界のもののままだからですね」

「ふーん。よくわからないな」

「たぶん、街や文化自体はそれほど変わりがないです。私たちの方が進んでいるところもありますが、こちらにしかないものもあります」

「なるほど。まったく交流ないのに変な感じだな」

アキラは、腰まである長い黒髪に一生懸命ドライヤーをあてている少女を見上げる。

他の人間には見えないという彼女は、まるで幽霊のようなものだろう。虚都人がこちらに来ると、みなこうなってしまうのだろうか。だとしたら、今まで虚都について何も知られていないのも頷ける。

アキラはまだまだ時間がかかりそうなシェラの様子を見て、「ご飯買ってくる」と部屋を後にした。寮の一階に下り、小さな売店で食べ物を買い込む。自分のためにカップラーメンとおにぎりを選んだ彼は、契約相手である少女の食事に悩んだ。

「パンとかにしとけば食べられるか……？ ぼろぼろ落とされても困るしな。あとはストローも買って、と」

「なに、子供でも遊びに来てるの？」

「うおっ」

突然背後からのぞきこまれたアキラは、思わずその場でのけぞった。見るとそこにはよく知った友人の姿がある。

帰ってきたばかりなのか制服姿のカイは、驚くアキラに目を丸くした。

「なんだよ。こっちが驚くよ。ってか、耳どうしたの？」

「や、悪い。急に話しかけられたから……。耳は、ちょっとその、ぶつけたんだ」

つい驚いてしどろもどろになってしまったが、よく考えてみればシエラは誰にも見えないのだからあわてる必要もない。アキラはそう自分を落ち着かせると話題をそらした。

「こんな遅くまで学校にいたのか？ お前も生誕祭準備とか？」

「違うよ。空塔を見に行ってたんだよ。アキラは降られなかった？ 予定外の雨」

「……ああ」

言われてみれば、そんなこともあった。

続く出来事が強烈すぎて忘れかけていたのだが、確かにあの雨のせいで必要以上に濡れてしまったのだ。そもそもその話を最初に教えてくれたミヤも「カイクんに聞いた」と言っていたのだから、この友人は前から変化に敏感でいたのだろう。

アキラよりもずっと優等生で知られるカイは、珍しく興奮ぎみにまくしたてた。

「実は前にもあったんだよ。全部真夜中だったんだけどさ。どんどん回数が増えてるなって思ったら、今日あれだろ？ もうおれ、空塔まで行ってきたさ」

「わざわざ行ったのか！」

「ポート三つ経由しただけだし、すぐだよ。そうしたら天候予定の表示が全部消えててさ、他にも集まってきた人間けっこういたけど、ちよつとした騒ぎになってたよ」

「なんか発表とかは出てたわけ？」

「何も。システムトラブルが起きてるんじゃないかって噂だけど」

空塔マニアとして知られるカイは、肩をすくめて見せた。その手に新品のメモリースティックが握られているのは、大方今日空塔に行った際、撮影しすぎて古いメモリがいっぱいになってしまったなどの理由だろう。二人は無人レジに並ぶと学生証で清算する。学校施設内での買い物は、こうして学生証があれば全て事足りるので便

利だ。

もつとも学生証での決算は個人口座のデータと直結しているので、残高を割ってしまえば自動的に使えなくなる。アキラなどは毎月の支給金額を上回って使うことはないが、クラスメートの中には、常に口座にぎりぎりの金しか残っていないという人間も珍しくない。

売店を出たアキラに、隣を行くカイは声を落として続けた。

「実はこれ、未確認情報なんだけどさ。この天候異常って、どうやら全都市で起きてるらしいんだよ」

「全都市で？ そりゃ思ったよりおおごとだな」

各都市の天候は、それぞれの空塔によって制御されている。鏡面体である空は全てがつながったドーム型になっているが、実際の操作は内部でわかれているのだ。

その全てで異常が起きているのだとしたら、事態はかなり複雑だ。空塔管理部は今ごろ大あわてでいるのかもしれない。アキラは、空や空塔がどのようなメカニズムで動いているのか詳しく知らないため、他人事のように「大変そうだ」という感想を持つに終わった。

カイは廊下の前後を確かめると、さらに小声になる。

「それでさ、実は昨日の夜中、空塔に光が灯ったって話があるんだ」「光？」

「そう。深夜二時過ぎに空塔の最上層近くに青白い光が現れたっていう……。映像には残ってないし、見たっていう証言があるだけなんだけど、何人か同じことを言ってる。それでやっぱりこれも、全部の都市で起きてるって噂があるらしいんだ」

「へえ……なんか変な話になってきたな」

どちらかというと、都市伝説や怪談に近いのではないかという話だ。

空塔には基本的に窓がない。そのため最上層近くで本当に光が灯って見えたのだとしたら、それは塔の外側に光があったということだろう。そのような上空にいったい何があるというのか、アキラは大きく首をひねる。

空塔の話や生誕祭の話をしながら三階まで戻って来た二人は、アキラの部屋の前で別れた。カイは笑って手を上げる。

「じゃ、またなんかおもしろい話があったら教えるよ」

「よろしく」

「アキラもなんか変わったことに気づいたら教えてよ。よく空見てるんだしさ」

友人の言葉に、まさか虚都人が降ってきたとは返せなかった。

8・シギル・ゲーム

天井に座るシエラは、メロンパンを食べながらアキラの話を聞いていたが、一段落つくと頷いた。

「それは、こちらが原因です」

「それってどれが？」

「空塔が光った件についてです」

「へ……まじで？」

アキラがペットボトルにストローを入れて差し出すと、少女はゆつくりと下りてくる。乾かされた長い髪は一つに編まれ、まるで猫の尻尾のように天井に向かってゆらゆらと揺れていた。

彼女はかじりかけのパンをアキラに預けると、両手でペットボトルを受け取る。顔の前にそれを抱え、ストローを使って喉を湿すシエラは、無重力空間を泳ぐ人間を連想させた。

借り物のスウェットは袖も長いのか、袖口は何重かに折られていたが、さらさらとした布地のためすぐに落ちてきてしまう。それを何度もまくり直すシエラは、さかさであることを除けば普通の不器用な少女のように見えた。

ペットボトルを机に置いた彼女は、今はブラインドの下りている窓を指す。

「空塔の発光は、『シギル』が塔に置かれたためでしょう」

「シギルってなに」

「私たちの今回の目標です」

シエラはそこで言葉を切ると、指を伸ばして空塔のミニチュアをつついた。黒々とした瞳が真摯な光を帯びてアキラを見つめる。

「——遅くなつてしまいましたが、お話します。私がなぜ虚都からこちらに来たのか、そして私をふくめたプレイヤーたちが、どのような勝負をしているのかを」

「勝負……」

その言葉が非常に物騒な意味合いを持つことは、先の出来事から明らかだ。

辛勝ではあったが既に出会い頭の一勝を得ているアキラは、己が置かれた状況を知るためにも彼女の話に集中する。

シエラは黒い双眸を伏せ、物憂げな微笑を浮かべた。

「さきほど私、虚都には空塔がないって言いましたよね」

「ああ」

「それは事実なのですが、代わりに虚都には空塔の動きを操作できるシステムがあるのです」

「……え？」

少女の言葉は、アキラを衝撃で凍りつかせるに十分な威力を持っていた。

——空塔は、管理部以外の何者も立ち入ることはできない。

それは公的なアナウンスとして出されているわけではないが、まぎれもない事実だ。

空塔には、いかなる立場の人間であろうとも、管理部以外の者に入場許可が下りることはない。また管理部に所属するためには、最難関と謳われる試験に合格しなければならず、その倍率は千倍にも及ぶと言われているのだ。

誰からも優秀であると認められた人間でさえ時に落とされる管理部試験は、全ての都市において最も狭き門として知られている。

そしてそれは裏を返せば、都市の象徴であり核でもある空塔に、たやすく関わる者がいてはならないということだろう。空塔は鏡面の色を変えるだけでなく都市の天候をコントロールする装置でもあるのだ。資格を持たない人間にそれを触らせることなどあってはならない。

都市住人にとって空塔は、いわば不可侵の聖域とも言える場所だ。厳重に制限されたその領域を侵犯するようなシエラの話に、アキラは激しく顔をしかめた。

「操作できるってどういうこと？」

「そんな顔をしないでください。誰しもができるわけではありませんせんから」

シエラは少し困ったような顔になると、アキラの正面まで漂ってきた。

繊細な造作を持った貌。間近で見ると睫毛がひどく長い。大きな瞳に自分の顔が映っているのを見つけて、彼は無意識のうちに息を飲んだ。額に触れてきた手の感触がよみがえる。

「アキラ？　どうかしました？」

「……別に」

アキラは手の中に持っていたメロンパンを彼女に押しつけた。シエラは素直にそれを受け取ると、再び浮き上がり天井に立つ。部屋の明かりの前に彼女が立ったため、アキラの周囲はわずかにかげつた。

「というわけで空塔を操作するシステムはあるのですが、それは管理者の意向で長く使われないうままだったのです。ですが、その管理者が管理から離れることになりました……以後システムをどうするか、話を聞きつけて集まった人間たちの間で揉め事になりましたのです」

「ひよつとしてそれで、勝負で決めようとかいう話になった？」

「はい」

「なんだそれ……ふざけてんのか」

アキラの声に苛立ちがこもると、彼女はさつと顔をこわばらせた。だがシエラはそこでうつむくことなく、彼を見上げて続ける。

「こちらの世界で勝負を行うよう提案したのは、現在の管理者です。システムを以後誰がどのように扱うにしても、最低限の能力がなければ話にならないということ……」

「その結果が昼のアレか」

スガとの衝突を思い出し、アキラは嫌な顔になる。彼らの話から察するに、来訪者は他にもまだまだいるのだろ。その全とあのような戦闘をしなくてはならないのかと思うと、なかなか気が重い。

だが、勝手な話に腹も立った。

しかしシェラは複雑そうな表情でかぶりを振る。

「それなのですが、勝負の内容には本来、プレイヤー同士の戦闘は含まれていないのです」

「ん？ どういうこと？」

「具体的にこの勝負は、各空塔の最上層に置かれた石、シギルというのですが、その石を代行者が取り、プレイヤーである来訪者が空塔頂上の台座に置くことでゴールとなります」

「空塔の最上層？ って入れるわけねーだろそれ……。どうすんだよ」

「ですから、私たちには一つだけ攻略のためのスキルが与えられています。それを上手く使って最上層に二人で到達することこそが、この勝負の趣旨なのです」

「まるでゲームだな」

怒りを通り越して呆れが勝ったアキラは、軽い脱力感に襲われる。だがたしかにそれが本当の話であるなら、プレイヤー同士の戦闘はよけいな要素だろう。シェラは自分たちプレイヤーについて「それぞれ別の都市に飛ぶよう取り決めた」と言っていたのだ。空塔全てにシギルが置かれている以上、彼らの目的は割り振られた都市のシギルであって、他のプレイヤーではない。

そこまで考えたアキラは、しかし一つの問題に気づいた。

「でもそれだと誰か一人が勝つてことにはならないんじゃないか？ シギルは十二個あるわけだろ」

「ええ。勝負の期間は一ヶ月とされていますが、もちろん全員がその間にゴールする可能性もあります。ですが、それについて勝負を提案した管理者は、『シギルを取れた者たちで決めろ』と」

「勝負にしといて丸投げかよ」

「あの人は何を考えているのか、実は私にもよくわからないのです」
逆光になっているシェラの顔は、微笑んではいるのだがそれ以上の感情が読めない。ただアキラの目にはその時、黒い瞳がゆるやか

な孤独と後悔を宿しているように見えた。机の上の小さな空塔が、あいまいな影を公園のミニチュアに投げかけている。

「結局、そういった状況ですので、プレイヤー間で事前に話し合いを持ちました。結果無事ゴールできた者たちの協議によってその後の管理を決めることになり……もしそこで決裂したとしても、自分が確保した都市については権利が主張できることになったのです」
「そりゃなんつーか……こっちとしては、腹立つ上にすっきりしない話だな」

自分たちの知らないところで都市干渉の権利をやり取りされるという話は、どう落ち着いて考えても業腹である。

しかも空塔最上層への侵入は、まず重大な犯罪行為とみなされるのだ。

代行者となってそれだけの危険を冒して得られるものが、自分の契約者を話し合いのテーブルにつかせるだけ、というのは割に合わないのではないか。アキラはそう考えて眉をよせたが、自分個人の問題に限って言うなら、昼のような戦闘が最後の一人になるまで続くよりは、まだましかもしれない。

シエラは両手でメロンパンを持ったまま苦笑する。

「システムをどうするかは難しい問題ですから。勝負で全てを決めてしまうと後々問題が大きくなるかもしれません。今回のやり方は迂遠に思えますが、妥当な線と言えましょう」

「まあ、言われてみれば。スガみたいなやつに一人勝ちされても困るしな」

とは言え、あの男の性格では素直に協力する代行者もいないだろう。

そう考えるとこの勝負は、自都市を任せてもいい人物かどうか、住人が来訪者を見極めるという性格も兼ね備えているのだ。

うずくような耳の痛みに、アキラは倉庫での記憶を反芻する。

シエラを罵倒し、第八都市を潰してやると言った男。まるでガラス細工が壊れるような音を立てて消え去った彼は、勝負から脱落し

たという話だが、これで全てが終わりというわけでもない。少なくとも自都市を守るためには、「都市に干渉しない」としているシエラに、シギルを確保させなければならぬのだ。加えてもっと大事なことからして、彼女の姉の治療法を探すという目的もある。これについては明日データベースにアクセスして、あてのありそうなところを調べてみなければならぬだろう。

やるべきことについて考えこんでいたアキラは、急に目の前がかげったことで視線をあげた。見るとすぐそこに少女の顔がある。大きな目が一度まばたきをして、じっとアキラを見つめた。

「ちよっ……近い！　なんだよ！」

「す、すみません。傷が痛むのかと思って」

「全然違うし」

アキラの顔を覗きこんでいたシエラは、彼が手を払うとあわてて離れた。かんちがいが恥ずかしかったのかわずかに顔を赤らめる。

怒られる子供のように白い膝を折って空中に正座した彼女は、まだメロンパンを両手で大事に持っていた。

どことなく気が抜けてしまうその姿に、アキラはメロンパンを指す。

「とりあえず食べとけよ。続きは後でいいから」

「これ、おいしいです」

「よかったな」

「おいしいって、変な感じですよ」

「普段何食ってたんだよ」

さかさまではあるが行儀よくパンを食べる少女は、クルミをかじるリスに似ている。

アキラはその姿に溜息を一つつくと、ベッドの上へ疲れた体を横たえた。

「これがおかしな夢だったらいいな……」

「いいえ、夢ではないです」

シエラの声は、体の中に染み入って不思議な郷愁を呼び起こす。

その晩アキラはひさしぶりに、白い空を見上げる夢を見た。

9・思い出

白。

どこまでも白い空は、それ以上何もない壁のようにも、あるいは無限に広がる茫洋のようにも思える。

ああむけに横たわるアキラは、他に何も見ていない。目を閉じても白い光が瞼の裏にまで忍び込んできた。

息を止める。

そして吐き出してみる。

そこに意味はない。ただ必要があるように思えたただけだ。アキラは強張る指を握ってみる。

兄はいない。それはわかっている。

わかっているからこそ、ここでこうして白い空を見上げているのだろう。

まるで失われた思い出を取り戻そうとするかのように、アキラは空を仰ぐ。希望をこめて前へと手を伸ばす。

彼は目を閉じた。知らぬ男の声が響く。

「――とははたして、なんであると思う？」

遠く聞こえる問い。その疑問に答える言葉を、彼は持っていない。探しているのは別のものだ。だからアキラはただ「わからない」と呟く。

あいまいな過去の記憶。白い空は次の瞬間、急速に彼の上から遠ざかった。

ブラインドの隙間から淡い光がすべりこむ。

窓越しに伝わる冷氣とともに降りそいでくる朝の陽は、アキラをゆっくり眠りの中から引き起こした。身を縮めてベッドで横にな

つていた彼は、薄目を開けると手足の肌寒さを自覚する。

「あれ、布団……」

蹴って落としたのかと手で探ったが、伸ばした指は空振るだけだ。あきらめて仰向けになったアキラは、定まらない目で天井を眺めた。――そして沈黙する。

丸めて放り投げたかのような白い布団。それは不思議なことに、真上の天井に張り付いて落ちてこない。怪訝に思ってよく見ると、細い腕と足がぎゅっと布団を押さえこんでいる。太股まであらわになっっているしなやかな足を、アキラは意味のわからぬものを見るように、まじまじと眺めた。意識が覚醒すると同時にそれがなんであるのか理解して跳ね起きる。

「――って、おい！」

「ふぁ……？」

布団の中から現れた黒い髪。目をこすりながら体を起こしたシェラは、両手で白い布団を抱きしめた。とろんとした瞼はいとけなく、昨日の真摯をまったく感じさせない。

無防備に浮いている姿は愛らしいのかもしれないが、非現実的でいまいまいしいこともたしかだ。アキラは寝起きの少女から視線をそらしつつ、自分がかけていたバスタオルを投げる。

「起きろって。俺、学校がある」

「あ……私も行かせてください……」

のろのろと動き出すシェラは、おりてきて布団をたたもうとしている。こういう仕組みかはわからないが、彼女の持ったものは彼女自身と同様、上に向かってゆるやかな重力がかかるらしいのだ。

だから布団を抱いて寝れば天井に落ち着くし、アキラが貸した服の裾もめくれあがることはない。けれどそれも、本人の寝相がいまいちでは何もならないだろう。アキラは落ち着かなさとともに教科書を通学バッグに押し込んだ。

「今日、買い物も行くから」

「何を買うのですか？」

「お前が使うもの。色々いるだろ」

「ああ……布団をお借りしてしまいましたし……」

「先に服を気にしろ」

まだ寝ぼけているのか、ふらふらとしているシェラは、目を離せば布団と一緒に天井へ落ちていきそうである。

アキラはそれを見捨てて乾いた制服を手にとった。

「洗面所で着替えてくるから。お前もちゃんと着替えとけよ」

「はい」

子供相手ではないのだから、いちいち面倒は見えていられない。

彼女を放置して鏡の前に立ったアキラは、顔を洗おうとして耳に貼ったシートに気づいた。手に貼ったものとあわせて剥がしてみると、無事完治している。こびりついていた血は濡らしたタオルで拭って落とした。

「よし、これでいいか」

制服もなんとか乾いたことだし、昨日の影響は残っていないと見ていいだろう。

だが一晩でリカバリーがきくとしても、面倒な目にあわないにこしたことはない。万が一のことがあつては困るし、普通でいたいのなら普通なりの生き方というものがあるのだ。

そのことをよく知るアキラは、前髪を上げて鏡で額を確認した。

「とはいっても、もう遅いんだよね……」

少女の白い手が触れた場所には、彼にしか見えぬ数字がうつすらと青く焼きついている。

——シェラのプレイヤーナンバーを表す13。

そう昨晚説明を受けたアキラは、だがふと眉を寄せた。

「十三？ 都市は十二だろ。いったい全部で何人いるんだ？」

もし都市の数よりプレイヤー数の方が多いなら、勝負は早いもの勝ちになるか、下手をしたらまた戦闘だ。のんびり構えていられる余裕はない。

部屋に戻ってそのことを確認するアキラに、着替えを終えたシェ

ラは苦笑した。

「今回の来訪者は全部で十二人ですよ。私が末席です」

「あれ？ 順番に番号振られてるんじゃないのか」

「二番から順番ですね。スガはたしか六番でした」

「一番は欠番なのか？」

「ええ」

たいした意味もない問いに、裸足で天井に立っていた少女は微笑する。その様子はどこか薄い壁を感じさせ、アキラは無意識のうちに、それ以上問うことをやめた。代わりに別の質問を口にする。

「そっぴや姉貴のために探してる治療法って、あてがあるのか？」

今日あたりデータベース覗こうと思ってるんだけど」

「……ああ、そうですね」

どのような病気の治療法を探しているのか、それさえもわからないのでは探しようがない。シエラは少し首を傾げたが、すぐに聞きなれない病名をあげた。日本語ではない響きを持つそれは、さすがに心当たりが微塵もない。怪訝な顔になったアキラに、少女は微笑した。

「大丈夫です。データベースの操作は私がやりますから」

「できる？」

「できます。割と得意です」

そう言うシエラの声音には、幾許か自嘲が漂って聞こえる。黒い瞳も今は不透明な膜がかかったように、感情が読めなくなっていた。アキラが軽く眉を上げると、彼女はそれに気づいてか長い睫毛を伏せる。

「すみません。無理ばかりを言っただけ」

「いやそれはもうあきらめてるけどさ。なんかあるなら言えよ」

——なりゆきとは言え、自分たちはパートナーになったのだ。なにか心配事があるのなら言っただけいい。

そう思っただけのアキラの言葉を、しかしシエラは「教えられてないことがあつたら困る」と受け取つたらしい。「すみません」と頭を

下げた。

「元の世界では私、データの取り扱いを専門にしてたんです。ので、調べ物などは自分でできます」

「ならいいけど、なんでそんな顔するんだよ」

「いえ……少し、自分のことを思い出しまして」

シエラはそこで言葉を切る。

少しの逡巡が宿る目。少女は何かを考えるように一度唇を噛むと、上目遣いにアキラを見た。

「攻略には関係ないんですけど、いいですか？」

苦味を感じさせる問いに、彼は頷く。少女は口元だけを造り物のように歪ませた。

「私は、こういってはなんですが、わりと早熟な子供だったのです。幸運と言っているのかどうか、早くから周囲に才能を認められ、研究の場を与えられました」

「専門にしてたってやつ？」

「ええ。私は分野こそ違いますが、父も研究者でしたから。環境には恵まれていたのです。論文が認められ、正式に研究者の身分を得たのは十歳の頃でした」

「うわ。それってすげえんじゃないの」

空中にさかさで浮いているこの少女は、虚都ではかなりの才媛なのかもしれない。

けれどシエラは、アキラの感嘆に悲しげな目でかぶりを振っただけだった。

「あまり誉められた話ではないのです。私は自分の能力が認められたというのに甘えて、家に帰ることもほとんどしなかったのですから……。姉の具合がよくないとは知っていたのです。ですが、私は研究所に詰めたまま、父や姉と向き合うことをずっと避け続けていた……。姉がどのような暮らしをしていたのか、まったく見ようともしていなかったのです」

後悔のにじむ響き。くすんだ声は床の上に落ちていく。

シエラは、自分の小さな右手のひらを見た。

「……そんな私がいまさらとは、思うのですけど」

大きなため息を吐き出して、そうして困ったように笑う少女は、アキラの目に、まるで泣き出す寸前の子供のように見えた。

朝の冷えた空気。窓からの光が棧に置かれたミニチュアを照らし、薄い影を作る。

シエラは重くしてしまった雰囲気を感じてか、ぎこちなく微笑みなおした。

「姉のことを理由に参加を決意した私が、他のプレイヤーから私欲で来たと謗られるのも、無理はないでしょう。ですが、だからといって勝負をおろそかにするつもりはありません」

長い睫毛が揺れ、黒い瞳がまっすぐにアキラを見つめる。

本来はプレイヤー間で戦闘をするような勝負ではなかったというこのゲームに、偶然が重なったとはいえアキラを巻き込んでしまったのはシエラだ。彼女はシグルを確保してこの都市を守ること、彼の協力に応えたいと思っているのかもしれない。

アキラは彼女の気負いに気を取り直すと、軽く手を振って返す。

「そりや確保できればこつちもありがたいけど、姉さんの方を第一にしているからな。変な遠慮しないで何かあったら言えよ」

制服の前を止めると、アキラは床に置いてあったバッグを拾い上げる。壁の時計を見ると、いつもならばもう寮を出ている時間だ。

今日は転移ポートを使わねば遅刻してしまうだろう。

「よし、そろそろ行くぞ」

ドアノブに手をかけたアキラは、ついてこないシエラを振り返る。

「どうしたんだよ」

「いえ……すみません……」

「早く来いって。学校に遅れる」

急かすために手を伸ばすと、シエラはあわててその手を取った。細い体が宙を泳いでアキラの後を追う。廊下に出ると、小さな声が彼の耳を打った。

「あの……どうして親切にしてくれるんですか？ 私、無理ばかり言ってるのに」

「あー」

——理由については、いつか聞かれる気もした。

アキラは過去の記憶に風化しきらない感情を覚える。よみがえる白い空の記憶。しかし彼は感情を表に出すことはせず、さらりと答えた。

「俺もさ、昔、兄貴がいたんだ」

「お兄さん、ですか？」

「今はいないけどな」

アキラはそこで話を打ち切ると、部屋のドアを後ろ手に閉めた。

生誕祭を五日後に控えた校内は、どこかしこもあわただしい空気に支配されていた。全都市をあげてのお祭りであるため、多くの学校が今日からは午前中の授業だけで終わる。アキラの高校もその例外ではなく、午後はまるまる準備時間とされていた。

昼食を売店で買い出したアキラは、中庭の隅にあるベンチでパンの袋を開ける。普段は教室か学食で食べるのだが、今日それをしてはシエラが昼食を食べられない。

何が食べたいかと聞かれ、「昨日と同じパン」と答えた少女は、緑色のメロンパンをもらって驚きの顔になった。

「色が違います!」

「メロンエクスでも入ってるんだろ」

「昨日のは入ってないのですか? メロンのパンなのにな?」

「メロンパンは、メロンが入ってるからメロンパンってわけじゃないの」

いい加減な説明にシエラは首をかしげたが、メロンパンの誘惑に負けられない。さかさまに浮きながら嬉しそうにそれをかじり始めた。淡い緑色のサンドレスが風になびいて揺れている。

アキラは彼女の分のペットボトルにストローをさして置くと、自分のヤキソバパンを食べ出した。ふと視線を上げ——ぎよっと硬直する。正面校舎の窓ガラスにシエラの姿が映っているのだ。

「シエラ……窓に映ってるけど」

「他の人には見えていないと思います。声も聞こえませんが、あなたが一人でぶつぶつ言っているだけです」

「なんという不審者。誰のせいだ」

「思考コントロールに自信があるなら他の手段もありますが……。
筆談にしますか？」

「めんど……」

さいわい時期が時期であるため、中庭をせわしなく行き来する人間は多いが、アキラの行動に目を留める者はいない。四方を校舎に囲まれたここは、生誕祭準備に沸く校内において、ちょっとした空隙になっていた。

アキラはメロンパンを食べる少女と、そのさらに上空を見上げる。今日の鏡面は薄い紫色だ。澄んで広がる空の向こうは何も見えない。飲み物を取りに下りてきた少女を、アキラは横目で見やる。

「それ、メロンパンだけが浮いて見えるってわけじゃないだろうな」「どうなのでしょう。服とか私が身につけたものは見えなくなると思いますが、パンもそうなのかな……。試してみないとわからないです」

「試して見えてたらやばいし」

もっとも、今まで中庭を十数人が行き来していて、パンが浮いていることに驚いた様子の者はいなかったのだ。これは見えないものと思っただけなのかもしれない。

「うーん、何かに利用できないか？」

「手品とかにですか？ いいかもしれませんね」

「かくし芸をやる予定はない」

しばらく真剣に悩んでみたが、有効な使い道が思いつかない。

思考を放棄したアキラは、食べ終わったパンの包み紙を手の中で丸めた。近くに見えるゴミ箱へ投げようとした時、聞きなれた声がかかる。

「アキラくん、こんなところにいた！」

「げ……」

——よりによって一番見つかりたくない相手に見つかってしまった。

中庭の入り口から走ってきたミヤは、アキラの前まで来ると、腰

に両手をあて仁王立ちになる。

「今日からそろそろ働いてもらうからね！ こっそり帰っちゃだめだよ！」

「いや俺、色々用事が……」

「用事って何？」

「医療データ検索したり、空塔にのぼったり」

「わざとらしい嘘つかないの！」

一刀両断されてアキラは閉口する。本当に嘘であったならいいのだが、現実はどうもいらない。かと言って素直にミヤの言うことを聞いている、夜まで解放はされないだろう。

どう言いつくろって逃げ出そうか、視線を泳がせていたアキラは、だがミヤの頭上に気づいて啞然とする。そこにはパンを食べ終わったシエラが、興味津々の表情で彼のクラスメートを覗きこんでいた。白い手をミヤの額に伸ばそうとする少女に、アキラはあわてて腰を浮かす。

「ちょ、シエ」

「どうしたの？」

シエラが見えないミヤは怪訝そうな顔になった。そうしている間にさかさまの少女はぺたぺたとミヤの頭や肩を触っていく。立ち上がったアキラは口をぱくぱくと動かした。

「アキラくん、なんか変だよ」

「あー、うん」

「とにかく、今日は買出しにつきあってもらうから。食べ終わったら教室に来てね」

ミヤは小走りに校舎の中へと戻っていった。ふわふわと揺れる二つの髪を、シエラはなぜか名残惜しそうに見送る。級友の姿が見えなくなると、アキラは気が抜けてベンチに座り込んだ。

「こっちがあせるだろ。何やってんだよ」

「見えないのだから構わないかと思いました。彼女はあなたとどういう関係なのですか？」

「友達みたいなもん」

「あいまいですね」

「昔からよく同じクラスになってるから。腐れ縁って言った方が正しいかも」

「なるほど？」

シエラは完全に納得したようには見えなかったが、何かを咀嚼するようにしきりに頷いた。膝を抱えて宙に浮いている少女は、すつきりとしなない表情で空を見下ろす。

「シエラ？」

「いえ、なんでもないので。それより、これからの予定は彼女のお手伝いですか？」

「あー、ちよつとはやらないとまずいしな。ちようどいいから一緒にこっちの買出しもしちまおう。現金出してくる」

校外での買出しは、学生証での決済がきかない。不自由ではあるが現金を持っていなければどうしようもないのだ。アキラの個人口座にはそれほど大金が入っているわけでもないが、普段の金遣いが荒いわけでもない。多少なら融通がきくだろう。

アキラは肩にシエラを捕まらせ、校内設置の口座端末へと向かった。機敏に動けない彼女は、こうしてつれていなければすぐに迷子になってしまう。色々と物珍しいのか、校舎内を見回している彼女は、授業中もアキラの教科書をめくりたがってしかたなかった。

周囲に人がいない時を見計らって、アキラは背後の少女に問う。

「ずいぶん気になってるみたいだけど、虚都の学校ってこっちと違うのか？」

「どうでしょう。やはりあちこち違うとは思いますが、私自身学校に行ったことがないので、よくわからないのです」

「ああ、そうなのか。家庭教師つけてたとか？」

アキラは振り返って聞いたが、前からベニヤ板を持って男子生徒二人が駆けてくるのに気づくと、不審に思われないよう前を向きなおした。廊下の角を曲がってひらけた場所に出ると、さらに人は増

えシエラとの会話はできなくなる。

事務所窓口や各種端末、掲示板などが集まっている情報ロビー兼カフェテラスは、いつもより三割増で生徒が多く騒がしい。あちこちのテーブルで打ち合わせが行われているらしく、相談の声が重なってまるで潮騒のようだ。

ガラス張りの天井からは薄紫の空が見え、テラスには明るい光が降りそそいでいる。

あちこちから漂うコーヒーのよい香り。慣れ親しんだ日常の光景をアキラは眺めた。彼の肩に捕まるシエラが、そつと手を離し高い天井へと降りていく。彼女はそのままテラスの上を歩き回り始めた。「何やってんだ、あいつ……」

シエラの行動理由は大体いつもわからないが、どうせ単なる好奇心なのだろう。

アキラはロビーの隅で口座端末の列に並びながら、壁にかかる電光掲示板を見上げた。今日の天候予定は十八時から霧雨。だが昨日の雨があつてはみな、用心しているに違いない。アキラは自分が傘を持ってきていないことを思い出す。

「ま、生誕祭の買い出しもあるし、ポート移動か」

ミヤには悪いが、あまり生誕祭の準備に時間を取られていたくない。医療データを調べなければならぬのだし、可能なら空塔も下見しておいた方がいいだろう。

アキラが頭の中でそんな予定を組み立てている間に、口座端末の順番が回ってくる。

彼は学生証を取り出し、端末に差し入れようとした。その時、顔の横から白い手が伸びてくる。反射的に体を引きかけたアキラは、しかしすぐにそれがシエラの手であることに気づいた。彼女は薄い透明なカードを端末に向けて示す。

「これ、あなたのカード入れた後に入れてください」
「は？」

「いいから」

再度言われてそれ以上押し問答するわけにもいかない。アキラは軽く後ろの列を振り返ったが、一番前に並んでいた女子に冷たい目でにらまれてしまった。「俺のせいじゃない」と言いたい気分を飲み込み、アキラは学生証を端末に差し込む。続いてシエラから受け取ったカードもそこに追加した。

ガラスでできているような透明なカードが、ひんやりとした感触を残して吸い込まれていく。アキラは端末が壊れてしまわないかと気が気ではなかったが、現れた画面は普段通りのものだった。いつものように残高照会を押した彼は、引き出し金額を指定しようとしてぎよっとする。

「なんだこれ……！」

「使ってください」

平然としたシエラの声は、アキラの動揺を抑えはしなかった。七桁を越す残高に彼は啞然とする。一瞬の間をおいて驚きから覚めると、声をひそめてシエラに確認した。

「端末に不正干渉したのか？」

「違いますよ。プレイ資金です。経費兼、代行者への報酬、といったところでしょっか」

「まじか」

初めて見る額の大金。アキラの頭の中を、買えなかった模型の限定品がよぎっていった。

だがそうして夢想到に浸りかけた彼の髪を、シエラがひっぱる。

「うしろの人、怒ってます」

「あ」

皆が殺気立っているこの時期に、いつまでも端末でまごついていては非難の目を浴びざるをえない。アキラは急いで、普段は持ち歩かないほどの大金を引き出すと、それをカードとともにポケットにねじこんだ。列に並んでいた者たちの冷たい視線を受けつつその場を離れる。

二人はテラスから外に出ると、校舎裏の渡り廊下を選んで歩き出した。雨よけの屋根だけがある殺風景な通路は、さいわい誰の姿もない。

「まったく……最初に言つとけよ。驚くだろ」

「すみません。忘れかけていました」

「別にいいけどな。——ちようどいいから欲しいもの考えとけよ」

「え？ でもこれは経費とあなたへの報酬ですよ」

「あんな大金もらうほどのことじゃないだろ。シエラの金だ」

報酬をもらえることはありがたいし、欲しいものがないわけではないが、落ち着いて考えてみればやはり、あれは彼女とその目的のために使うものだろう。

アキラは大きく息を吐き出して彼女を見上げる。彼の肩に捕まった少女は、大きな黒い目をこぼれおちそうなほどに瞠っていた。不思議なものを見るような視線に、彼は「なんだよ」と返す。

シエラはその声で我に返ったのか、ゆっくりとまばたきした。

「私は特に……あ、メロンパン。あれをまた食べたいです」

「着替えとか靴だろ、そこは……」

最低でも夜寝る服だけでいいから買ってもらいたい。

微妙にかみ合わない会話を交わす二人の上空で、淡い紫の空はゆるやかにその色を変えつつあった。

学生服の少年について校舎の中に消えていった少女。

その姿を奥の校舎の屋上から「見上げていた」二人の男女は、彼女の姿が見えなくなるとおのおの息を洩らした。女は失笑を見せ、男は溜息をつく。

「——スガも大口を叩いたわりにさっさと脱落しただなんて。何のために粹を一つ与えてやったと思っているのかしら」

「そう言つてやるな。油断もあつたんだろっ」

灰色のスーツを着た若い男は、やわらかい口調で隣の女をたしなめた。女は高いヒールを何も無い空中にたたきつける。

「油断したつて相手は単なる小娘だわ。おまけにとても邪魔な……。だからこそスガを回したつていうのに、まったく」

「もともとあの男の役目は競争相手にぶつける捨て石だ。敗北はしたが大勢に影響はない」

「シエラ・ハーディが残つていいるというのが問題なのよ。あの娘が権利を得れば、それだけで全部がくつがえされかねないわ」

体の曲線にそう黒服姿の女は、高い襟のすぐ横で唇をゆがめた。肩の高さで切りそろえられた金髪がさらさらと音をたてる。足首まで届く長いスカートの裾が、持ち主の苛立ちを表すかのように空に向かつて揺れた。

無人の屋上に佇むさかさまの二人は、少しの間沈黙を共有する。

その姿を見る者は誰もいない。遠く聞こえてくる生徒たちの喧騒が、風に乗って流れていく。

女はうんざりとした表情になった。

「今、ここで潰してしまえばいいじゃない」

「代行者もなしにか？ スガと同じ轍を踏むことになるかもしれない」

「二人がかりであれば違うでしょう。それに、私のスキルなら代行者などなくとも、この世界に干渉できるわ」

自信に満ちた態度は、それなりの裏づけを得てのものである。

しかし男は、それを聞いてもかぶりを振った。

「今はこれ以上動かない方がいい。代行者を介さない戦闘など、本来のゲームの趣旨とは異なる行いだ。スガ一人ならともかく私たちまでもがそれをしては、他のプレイヤーの不審を買う」

全部で十二人だった今回の来訪者は、利害の一致を見て協力しあっている者もいれば、お互い牽制しあっている者もいる。ここでやりすぎて敵を作れば、後に響いてくることは想像にかたくない。

そう釘をさす男に、だが女は皮肉げな目を向けた。

「シェラ・ハーディに脱落してほしいと思っっているのは、皆同じかと思っっていたわ。だからスキルが洩らされて――」

「そうとは限らない。彼女の才能は有用だ。さすがあのハーディ博士の娘というだけはある。このゲームが終わった後も繋がりをもちたいと思う人間はいるだろう」

「ここではただの邪魔者よ」

譲る気のない女は長身の男をにらみあげる。

ビジネスマン風の男は、無表情でかぶりを振った。

「ともかく、私たちも自分のシギルを確保しなければならない。そのためにはまず代行者を選ばなければ。シェラ・ハーディについては代行者を選んだ後でもいいだろう」

「後回しにしてさっさとシギルを確保されたらどうするの？ 空塔をのぼることくらい、有用な才能を持つあの娘なら、スキルを使わずとも可能ではなくて？」

揚げ足を取ったの反論に、男は軽く眉を動かす。だが事実の指摘に、彼はそれ以上顔色を変えることはしなかった。ただ「そうかもしれない」と返しただけである。

女は芝居がかった仕草で細い両肩をすくめた。

「なら、代行者を使えばあの娘を排除してもいいのかしら？」

歌うような軽い声音。彼女は男の返事も待たず、ふわりと屋上から離れた。鉄柵を蹴って校舎の向こうへと消える。

後に残るものは白々しい静寂だけだ。男は一人になると再び溜息をつく。

「気持ちにはわからなくもないが……。シェラ・ハーディはもともと正統なイレギュラーだ。権利を奪えるならそれに越したことはない」
おまけにこの都市の中であれば、彼女への攻撃は許容されるのだ。それがゲームの本来の趣旨ではなかつと、可能である以上、許可されたことだとみなして構わないだろう。

ランダムに割り振られたはずのスキルも、彼女が得たスキルだけ

はなんであつたのか、情報が伝わってきている。その情報の出所を知る男は、自身の中にまた一つの推測をも持っていた。

「後継者の娘に、直接攻撃ができない特殊スキルか。まるで襲ってくれといわんばかりだな。——あるいはそれが狙いか？」

男は足下に広がる造り物の空を眺める。

薄緑色に染まっていく鏡面体。

そこからこぼれた雨は男の眼前を音もなくかすめ、乾いたコンクリートへとしたたった。

11・買い物と調べ物

「マジで重い……」

「これで最後だよ。ありがとう！」

ずっしりと大量の色紙を入れた袋二つを、アキラは配送カウンタの上に置く。隣ではミヤが学生証を出して配送手続きを取っていた。これで明日の朝には荷物は配送ポートを経て教室へと届けられるはずだ。

アキラは重い荷物を学校まで持ちかえらずに済んで、ほっと息をつく。

「だいたいなんで今ごろプログラム用の紙なんて買い出すんだよ」

「学校に頼んでただけど、発注ミスがあっただって。明日印刷して裁断すれば間に合うよ」

「そりゃそうだろうけどな」

アキラたちのクラスは生誕祭の初日に簡単な劇をやることになっている。

当日舞台袖でタイムキーパーを務めるだけのアキラとは違い、ミヤは小道具や衣装準備の係と、さらには自身も役を持っていたはずだ。精力的すぎる少女を彼は呆れた目で見やった。

「それで、他には買うものはないのか？」

「あ、ちよつとある！ 私用なだけどつきあってくれる？」

「ものにより」

配送センターの出口まで来たアキラは、伸びをするように両腕を大きくあげた。その手を宙に浮いていたシェラが取る。二人が用事を済ませている間、ふわふわと辺りを見て回っていた少女は、アキラの手を伝って肩につかまった。「ありがとう」と小さくささやかれて彼は苦笑する。

「で、私用って何？」

「衣装に使う黒いブラウスが欲しいんだ。ちょっとお店見てみようと思うんだけど」

「うわ……」

ミヤの服の買い物など、普段であれば絶対付き合いたくない。いくつもの店を落ち着かなく移動し、結局は何も買わないということさえあるのだ。

ただでさえ店内に居場所がないというのに、そのような買い物に付き合うのはごめんだ。

——いつもならそう言って断るところだが、今日はアキラにも用事があった。

「ま、ちようどいいか」

「なにが？」

「俺も買いたいものがあるってこと」

ミヤと一緒にあれば、少女の服を買ってもそう不自然ではないだろう。

二人は多くのテナントが入っているショッピングセンターへと足を踏み入れた。フットワークの軽い幼馴染は、エスカレーターを下りるなり、たちまち正面の店へと走って行ってしまふ。

その後をアキラはうんざりとした顔で追った。肩につかまったままのシェラが、困惑顔で覗きこんでくる。

「あの、本当にいいのです。私のものなんて」

「俺が気になるんだよ。適当に買うから、他に欲しいものがあつたら言えよ」

店に入ると、ミヤは既にシャツを何枚か手に取り見比べている。

「あ、アキラくん、これとこれ、どっちがいいと思う？」

「どっちも一緒だろ」

「襟が違ふの！」

憤然とした主張に呼応して茶色の髪が揺れた。くるくると表情の変わる顔。怒ったと思った少女は、すぐに表情を崩して笑う。

「ま、アキラくんにいいって言われても、あてにならないからいいんだけど」

「なら聞くなっつーの」

店内には淡い色彩の雑貨や服が、白木作りの棚に乗せられ並んでいる。場違い感をひしひしと味わうアキラは、さりげなく他の客たちから顔をそむけつつ、壁際の棚に歩み寄った。

ちょうどそこには、ルームウェアのセットが置いてある。淡い水色とピンクの二種あるそれを、アキラはスリッパまでついていることを確認してから指さした。

「どっち？」

「……青い方で」

「了解」

上から降ってくる声に応えて、アキラはルームウェアを手にとった。まだブラウスを手に、悩んでいるミヤのところへ戻る。

「あれ、アキラくん、それどうするの？」

「買う」

「え？」

「あとちよつと相談。ミヤが何泊か旅行に行くって時、持っていくものを全部選んでくれ」

「ええ？　なんで？」

「後でお礼にソフトクリームおごってやる」

「やるやる」

甘いもの好きなミヤは、それでやる気になったらしい。持っていたブラウスを置くと、店の力コを持ってきて色々入れ始めた。服から小物にいたるまで、みるみるうちに増えていく中身を、アキラは理解できぬものを見る目で眺める。

「女って……まあいいか。助かった」

勢いが怖くもあるが、いちいち遠慮がちなシエラに確認するよりよほど確実だ。アキラは友人にその作業を任せると、他の人間には見えない少女を探して辺りを見回した。

見るとシエラは、店の隅に積まれた白いブタのぬいぐるみに手を伸ばしている。タオル地でできているらしいそれを抱き取るうとして、自分が持つては消えて見えることに気づいたのだろう。あわてて手を離れた。

「何やってんだ……」

「アキラくん、着替えて何日分くらい？」

「適当。いつまでかは決まってるけど、洗濯もできるから」

「じゃあ三、四日分にしとくよ」

「ほい」

軽い返事をして振り返ると、カゴは二つ目になっていた。一つ目は既に服と小物であふれかえって、床の上に置かれている。

「なんつか……すげえ」

「これでも減らしてるんだからね！……でもこれ、何に使うの？ わたしを旅行につれてってくれるとか？」

「そんなわけあるか、ばーか」

百歩ゆずって何人かで旅行に行くことがあるとしても、ミヤの分の金をアキラが出すことはありえない。「なんだ、ざんねん」と笑う少女を、彼は白い目で見た。

「だいたい、旅行に行きたいならクラスで言えよ。お前が言い出せばみんな乗るだろ」

「そうかもしれないけど。でもそれだとアキラくんは来ないでしょう？」

「ま、そうかもな」

「それじゃ意味がないから」

目を閉じて笑うミヤは、その時まるで知らない少女のように見えた。茶色がかった髪が店の照明を受けて金に光る。笑みを刻む口元は、いつもと違ってどこか少し寂しげだった。

普段と違う友人の様子に、アキラは自分でもよくわからぬ不安を覚える。

しかしすぐに彼女は、見慣れた笑顔に戻ると、二つのカゴをアキ

ラに押しつけた。

「はい、これでオッケーだよ！」

「サックス。助かった。で、ブラウスは決まったのか？」

「あ、忘れてた……」

手ぶらになったミヤは、先ほど悩んでいた二枚のブラウスを手に取る。一足先に会計へと向かうアキラは、首だけで彼女の方を振り返った。

「右手に持ってるやつの方が似合う」

「え、本当？ てきとうに言っただけ？」

「何年付き合いがあると思ってんだよ。それくらいわかるって」

アキラは店の隅に寄ると、白いブタのぬいぐるみをカゴの中に放り込む。その頭をさっきから撫でていたシエラは、目を丸くした。

「ア、アキラ」

「これくらいなら俺が買ってやるよ」

大した理由があるわけではない。ただシエラが人目を気にしてぬいぐるみを手に取れずにいたのを見て、買ってしまえばいいと思うただけだ。

シエラは白い頬に赤みを宿して微笑む。

「……ありがとう」

「ほいほい」

山のように商品をつめたカゴをアキラがカウンターに置くと、店員はすぐに営業用の笑顔でレジを打ち始めた。ブラウスを決めたらしいミヤが後ろから覗きこんでくる。

「で、結局それ、何につかうの？」

「俺の知り合いが調べ物しにこっち来るから、それ用に」

「知り合い？ 調べ物？」

「ああ。姉貴の病気について調べてるんだって」

シエラの事情について勝手に他人に言っただけのものかどうか。アキラは一瞬迷って、さわりのなさそうなところまでを口にした。天井に浮いているシエラは、申し訳なさそうな目で彼らを見る。

「なんかよくわかんないけど、アキラくんってやさしいよね」

「そんなわけないっつの。ただちよつとそいつの気持ちはわかるから、手伝おうってだけ」

シエラが聞いているところで思ってもみない評価をされ、アキラはぶつきらばうに返した。気まずさをまぎらわすために、紙袋を受け取るとさつさとレジの前からどく。ミヤは「お姉さんかあ」と響きを噛み締めるように呟いた。

その声が、急に平坦なものになる。

「けどアキラくん、兄弟いなかったよね」

——ひさしぶりに聞くその言葉は、アキラの心にずしりと重い石を投げ込む。

誰に訴えても信じてもらえなかった記憶。行き場のない焦燥が、彼の中で頭をもたげた。

すぐ上に浮いているシエラが睜目する。

「アキラ……」

「昔、そういう夢を見たんだ。兄貴がいなくなる夢」

夢ではないと思っていた。今でもそう思っている。

さかさまの少女へと向けた言葉に、ミヤは揺るぎなく笑った。

「でも、それは夢だよ」

きつぱりとした現実。彼女の断言に返せるものは何もない。

アキラは「ああ」とだけ頷いて、店を出た。

買い物を終えミヤと別れたアキラは、その足で近くの情報センターへと向かった。

東中央図書館に併設されているこのセンターは、第八都市にある全ての施設の情報にアクセスすることができる。その代わり使用には身分証明書が必要であり、その身分によって閲覧可能なデータが決められるというシステムだ。アキラは高校生であるため、アクセ

スできるデータは第三級までのものと限られている。

彼は入ってすぐの受付端末に向かうと、個室ブースを二時間借りた。料金を払って、発行されたカードキーを受け取る。普通学生は、無料のカウンター端末を借りるものだが、今回はシエラに操作させるのだ。個室でないと都合が悪い。

「ま、プレイ資金は死ぬほどもらってるしな。あれだけあつたら一年くらい個室借りられるぞ」

「そんなにはいらなです」

「プレイ期間終わっちゃうもんな」

ホール状のがらんとしたセンター内は、むき出しのコンクリート壁のせいか、冷たい空気が漂っている。アキラは、なんとはなしに高い天井を見上げた。銀色の太いワイヤーが張り巡らされている中央には、巨大な幾何学オブジェが吊り下げられている。

彼の肩に掴まるシエラは、オブジェを興味ありげな目で見ていたが、さすがに自重しているようだ。上に降りて触りに行くような真似はしなかった。

アキラたちは、大学生たちが数人調べ物をしているカウンターエリアを過ぎて、個室エリアへと入る。薄い壁でしきられた各個室には天井がないが、それで何が困るということもない。指示された二畳ほどのブースに入ると、彼は情報端末が備え付けられたデスクを指し示した。

「使い方わかるか？」

「はい。お借りします」

「なんか困ったら言えよ。俺、ここで課題やってるから」

アキラは椅子だけをブースの隅に引き寄せると、そこに座った。一方シエラは高度を微調整しながら端末の前に陣取り、カードキーを差し込む。一人でちゃんと操作できるのか、アキラは不安に思っ
て盗み見たが、少女はさかさであることに四苦八苦しなからも、自分の指でパネルを操作していった。その真剣な横顔にしばらく見入っていたアキラは、我に返るとバッグから教科書を取り出す。

それからの二時間、シエラは一言も口をきかなかった。

彼女は端末から目を離さず、ひたすら情報を引き出すことに没頭しているよう見えた。その集中力は怖いほどで、アキラが一度、乾いた音を立てて教科書を落とした時も、シエラはまったく身じろぎをしなかった。

さかさまの少女はただパネルを操作しては、ひたすら画面に見入っていた。そうしている二時間は長かったようにも、あつという間だったようにも思える。

アキラは時間が来るまで、何も言わなかった。ただ定期的に彼女の様子を窺っては、待っていただけだ。端末に何が表示されているかは角度的に見えない。だがそれを覗き込むことははばかられた。触れてはいけないような気がしていたのだ。

——画面に向かうシエラは、時おり涙ぐんでいるように見えたのだから。

アキラはあと五分というところで、ようやく少女に声をかける。

「そろそろ時間だけどいいか？」

「あ、はい」

振り返ったシエラは、泣いてはいなかった。そのことにほっとしつつ、アキラは立ち上がる。

「それで、どんな感じだった？　どっか医療センターとか行ってみる？」

「そうですね……。制限解除して調べたので、大体知りたいことはわかったのですが」

「ならよかった、って制限解除？」

「大丈夫です。ログは改竄してあります。あなたはこの二時間、模倣年鑑を調べていたことになっていきますから」

「模型年鑑……そんなあったのか」

虚都では研究者だという彼女の能力は、伊達ではないらしい。脱力してしゃがみこんでしまったアキラは気を取り直すと、浮かんできた少女の手からカードキーを受け取った。

12・塔を仰ぐ

転移ポートを三つ経由して空塔前に到着した時、群青色の空からは既に霧雨が降りそそぎ始めていた。

様々な色の照明が輝き、明度の落ちた街をきらびやかに彩る。空塔エリアを囲むフェンスの外にはオフィスビルも多く、会社帰りの人々が足早にポートへと向かっていた。

シエラを伴ったアキラは、近くのビルの軒下からそびえ立つ空塔を見上げる。

白い円柱状の塔の直径は、一階部分が約六十メートル。上の階層になるほど次第に細くなっている。だが少なくとも遠目からは、目立って先細りしているようには見えなかった。

鏡面まで伸びている白い塔は、天を支える柱そのものである。

「これでシギルがあるのは最上層っていうんだから……」

果てしない上空を仰いでアキラは嘆息した。

継ぎ目の見えない塔壁の中ほどには、青く光る文字で天候予定表がびっしりと表示されている。そこにはしかし、最近の異常天候についてのアナウンスはない。シギルが置かれた時に見えたという光についても、何も触れられていなかった。

霧雨ばかりが並ぶ予定表から視線を下ろしたアキラは、高いフェンスとその切れ目にある鉄門を眺める。エリアの東西に二つあるこの門は通常閉ざされており、車で機材などを搬入出する時以外には開けられない。

空塔内に勤務する関係者は、どうやら徒歩で隣の通用門を使って出入りしているようだ。警備員が常駐している通用門を確認して、アキラは苦い顔になった。

「あんなだぞ。どうやって入るんだよ」

「厳しそうですね」

「そりゃ、空塔警備は厳重で有名だからな。中に入れてもあちこちで生体ID認証がある。おまけに上層階に行くほど入れる人間は減ってくるって仕組みだからな」

カイからの受け売りを伝えたと、胸にブタのぬいぐるみを抱いたシエラは首を傾げる。

「それってでも、個人IDをデータベースに登録して、それと照合してるってことですよ？ おおざっぱに言えば」

「さあ……」

知らないから答えられないアキラは視線を逸らした。シエラは薄汚れたビルの軒に立って、フェンスの向こうを眺めている。小さな足には、今は黒いサンダルが履かされていた。

「空塔のシステムに侵入できる端末ってどこかにないですか？」

「知らない。ってか何するつもりだよ」

「ちよっと中を見てみようかと思ひまして」

「犯罪だつての」

「侵入が既に犯罪なのでしょう？」

痛いところを突かれてアキラは押し黙った。穩便にことを運ぶということが不可能な現状、どういったやり方をすれば一番マシなのかしみじみと考える。

「とりあえず今日は下見だからな。カイにでも相談してみて、それからってことで」

「はい。スキルもあなたは、もう少し使って慣れていた方がいいですしね」

「あーそうだな」

チェンジリングのスキルは、スガとの一戦に一度使用したきりである。今後の勝負にこれをどう使っていくかは決まっていらないが、習熟しておくに越したことはないだろう。

雨に濡れてネオンを反射する路面を、アキラはじっと眺める。

「シエラさ、初期状態だとほとんど持続時間がないって言ったよな。それってつまり、訓練とかすればもっと持続させることもできるわけ？」

もしそうなのだとしたら積極的にスキル習熟にも時間を割いていきたい。

そう考えるアキラに、シエラは複雑そうな顔を見せた。

「結論から言ってしまうと、スキル自体を訓練によって強化することとは可能です。もともとスキルとはこの勝負のために虚都で作られた後付けの能力ですから。私たちに知ることはできませんが、習熟度は蓄積されて数値化されているはずですよ」

「隠しパラメータがあるってことか」

シエラはブタを抱く両腕に力を込めて頷く。

「ただその数値とは、単純にスキルの使用時間や回数に比例しているのです。そしてこの勝負は一ヶ月という期限が区切られていますから……。私見ですが、スキルの訓練をしても期間内ですと、飛躍的な変化までは得られないと思います。持続時間などは少しずつ伸びるでしょうが……」

「っていうことは、やっぱり俺が使いこなせるかどうか」

「ええ」

慣れと集中——得なければならぬのはその二つだ。

そしてチェンジリングに関して言えば、「どう使うか」の発想と機転も必要になってくる。

アキラは、考える必要のあまりなさそうだったスガのスキルを、一瞬うらやましく思った。

「他のスキルってたとえばどんなのがあるんだ？」

「それは……わからないのです。すみません」

「あーまあ、しょうがない。聞いてみただけ」

昨日の一件があるだけに、つい意識がプレイヤー対戦にいつてしまいが、シギルを取るだけであれば他のスキルの情報など不要だろう。アキラは紙袋を持った手でこめかみをかいた。

「代行者がシギルを取って、プレイヤーがそれを台座に置く、か。二人とも最上層に行かなきゃいけないってのが味噌だよな」

「私一人なら見咎められずに入れそうですね」

「シエラ、俺を持って空に上がったりでできないか？」

「……私の腕力ではちよつと」

重力がさかさまに働くシエラに頼って、外壁を上れないかとも考えたが、どうやら不可能らしい。そもそもそれで上がったとしても窓がなければ中には入れないのだ。

アキラはその後もしばらく考えていたが、有効な手段は思いつかなかった。すっかり辺りも暗くなってしまった時間、彼は荷物を持ち直す。

「帰ってスキルの練習しながら考えてみるか」

雨宿りしていた軒下を離れ、アキラは屋根のあるアーケード街へと向かった。

赤いレンガで舗装されたアーケードは多くの店が建ち並び、学生や仕事帰りの大人たちで賑わっている。霧雨の降る中をくぐり、屋根の下へと駆けこんだアキラは、前髪についた滴を手で払った。

「弁当買ってくぞ」

「はい」

シエラがいるからにはどこかで食べていくという選択肢はない。彼女の状態でも食べられるものを考えながら、アキラは人波にそって歩いていく。街では生誕祭が近いいためか、専用の飾り付けをしている店も多く見られた。一年でもっとも都市が賑わう季節。だがそれを過ぎても、来月末はもう年の瀬だ。その頃には飾りつけも一新されるだろう。

あちこちの店から聞こえるBGM。その中に混じって、聞き覚えのある曲が聞こえてくる。澄んで張りのある女性ボーカルは、いまや都市に住む人間の全員が知っているだろう。

透明でありながら独特の引力を持つ歌声を聞き、シエラは顔を上

げた。アキラの肩につかまっていた少女は、どこからその歌が流れてくるのか顔をめぐらす。

「この歌って——」

「ああ、ニーナか」

それは今もつとも有名な歌手の名だ。

神秘的な曲に水晶と讃えられる声、さらには抜群の歌唱力で不動の地位を得ていた彼女。

その訃報が一週間ほど前に流れた時、十二都市は呆然とした衝撃に覆われた。

それは決しておおげさな比喻ではなく、彼女は知らぬ者のいない歌い手として何年もの間活動してきていたのだ。

二十二歳の誕生日がもうすぐだったという若いニーナの身に何があったか、憶測も多く飛んだが、事務所は発表で「急な病で」と伝えてきただけである。そのような様子などまったく見られなかったと、ファンたちは涙をしばりつくしたが、一週間経っても悲しみの波はいっこうに収まる様子を見せない。むしろここ数日の報道によって、彼女の名はますます広まっているようだった。

「——そんなわけで、多分十二都市で今一番の有名人だな」

「そうなのですか」

シエラは喧騒の中から、曲を聞き分けようとしているらしい。黒い瞳が人ごみで親を探す迷子のように動いた。アキラは他の通行人の邪魔にならないよう道のはじを歩きつつ、遠ざかる歌声の続きを頭の中でなぞる。

「最近ほどの番組もその話ばかりだからな。俺も結構詳しくなった」

「アキラは彼女の曲を持っているのですか？」

「部屋に帰れば一枚ある」

正確にはそれはミヤの持ち物で、ずっと返すのを忘れていただけなのだが、あることには変わりがない。帰ったら探してみようと思ったアキラは、けれどシエラが名残惜しそうに振り返ったのを見て

頭をかいた。通学バッグに手をつ突っ込むと、内ポケットからほとんど使っていない音楽プレイヤーを取り出す。

「たしかイヤホンもあつたはず……」

「アキラ？」

「俺も最近の聴きたいから買つてやるよ」

近くの音楽ショップに立ち寄ると、アキラは配信端末と自分のプレイヤーを接続し、ニーナの曲をいくつか購入する。それをそのままシエラに渡すと、彼女はおずおずとプレイヤーを受け取った。

「使い方わかる？」

「……たぶん大丈夫だと思います」

やたらときこちない手つきに彼は不安を覚えたが、イヤホンを片耳だけに挿したシエラは必死に操作キーを押している。首から下げられたプレイヤーが上に向かって揺れ、本来の持ち主であるアキラを不思議な気分にした。

やがて無事曲が流れ出したのか、シエラの顔はほころぶ。アキラは自分もほっと肩を下ろし、けれどそんな自分に気づいて舌打ちしなくなった。

「なんだってんだよ、まったく」

——他の人間には見えないということ。そしてさかさまであるということ。

それらのせいで、時々シエラがまるで何もできない子供のように思えてしまう。その度ごとに自分が世話を焼かなければと、つい手を貸してしまうのだが、相手は本当の子供ではない。甘やかしすぎにならないよう気をつけた方がいいだろう。

少女はそんな彼の内心も知らず、目を閉じて曲に聴き入っている。微笑を浮かべたその横顔は穏やかで美しく、なぜか少し淋しそうだった。単に白い照明が彼女の顔に深い陰影を作っているから、そう見えるのかもしれない。だが目の錯覚だとしても、彼女のそんな顔を見ると胸が痛んだ。

アキラは大きな紙袋を持ち直す。

霧雨のせいか人の多いアーケードは、まるでじつとりとした感傷が沈殿しているようだった。

13・白い夢

アキラは小さな弁当屋を見つけると、二人分の食事を買い込む。店の時計を確認すると、二十時になるうかという時間だった。寮の門限にはまだ一時間ほど猶予がある。

転移ポートに向けて彼が雑踏の中を歩き出した時、ずっと曲を聴いていたシエラが、ぽつりと口を開いた。

「あの、あなたのお友達が言っていたこと、聞いていいですか？」
「どれだよ」

友達と言っても、今日一日で話をした人間は一人ではない。小声で聞き返す彼に、シエラは言いにくそうに続けた。

「あなたのお兄さんのことです」

「ああ……」

ミヤとの会話について言われているのだと理解したアキラは苦笑する。

小さい頃は何度も誰かに訴えたことを、高校生になった今どう説明すれば客観的に伝わるのか。彼は考えながら大きく息をついた。

「俺には兄貴がいたって、朝言ったよな」

「ええ」

「でもさ、なんて言えばいいのかな、兄貴のことはみんな、俺の夢だっけ言うんだ」

「夢、ですか？」

「そう。実際記録とか見ても、俺に兄弟はいないことになってるし……よく考えてみればありえない」

そのことについて、わかりやすく語ることは難しい。

ただアキラには、ある時までたしかに兄がいたのだ。少なくとも

彼はそう信じていた。

「仲いいっていうか、普通の兄弟だったと思う。俺はいつも兄貴のあとをついてまわっててさ、兄貴の方もしぶりながら面倒見てくれた。——でもある日、兄貴は一人でどっかにでかけてって……それきり帰ってこなかったんだ」

「どこかに？」

「違うところに行く、って言ってた。……俺も実は誘われたけど断った。なんか勝手にどこか行っちゃまずい気がしてさ。で、それきり兄貴は帰ってこなかった」

兄との最後の記憶は、その時した会話だ。二人で手を取って白い空を見上げていた記憶。子供の頃は現実だと確信していたそれも、今は少しずつ輪郭がぼやけていつている気がする。アキラはそれを仕方がないと思いつつ、だがまだ感情を消化しきれていなかった。「何日待っても帰ってこないから、俺、そのことを初等部の先生に相談したんだよ。そうしたら『お兄さんなんていないでしょう』って言われてさ。めっちゃくちゃびくりした」

「いなかったって……最初からってことですか？」

「そう。夢でも見たんだろうって言われたよ」

当時六歳だったアキラは、それを聞いてひどく呆然とした。

教師が嘘をついているのだと思い、ミヤをはじめとして友達にも兄のことを尋ねて回ったのだ。だが返ってくる答は全て同じだった。「実際、俺は兄貴の名前も知らなかったんだ。お兄ちゃんって呼んでたしな。その上、公的記録にも残ってないとなると、本当にそれが夢か現実かわからなくなった。もしかしたら兄貴がいない方が夢なのかもって思って、子供ながらにむちゃくちゃ悩んだ」

アーケードを行きかう雑踏の中には、大学生くらいの男もちらほらと見受けられる。

その中にあるいはいなくなった兄がいるのかもしれない。だが、探そうにもアキラは兄の顔さえよく覚えていなかった。ただ「いた」という記憶が焼きついているだけである。

曖昧な過去。いまだ忘れることのできない欠片を思い出せば、そこには苦味も伴われる。

沈黙しかけたアキラに、ガラスを思わせるシェラの声が問うた。
「それで、アキラはやっぱりお兄さんのことは夢だったって思っているのですか？」

「いや……」

——諦めが悪いと、言われるのかもしれない。

だが、そう簡単には割り切れぬほどに、兄の存在はアキラにとってリアルだった。あつたはずの記憶が時を追うとともに薄れていくとも、抱く印象には変わりがない。

「俺はさ、兄貴の記憶ってひょっとして前の記憶じゃないかと思ってるんだ。俺が俺になる前の記憶」

「……前世、ということですか？」

「んー。そう言っちゃうとうさんくさいし、他人に言ったりはしないけどな」

こうしてシェラに話しているのも、彼女が虚都から来た人間で、非常識の塊のような存在であるからだろう。ミヤなどに話せばきつと真剣に心配されてしまう。ただでさえ彼女はこの話になると態度を硬化させるのだ。

アキラは振り返ってシェラを見上げた。

「ま、馬鹿げてるだらうけどさ。もし本当にそうだとしたら、兄貴はきつと今もどこかで元気にしてる。……少なくとも、俺はそう信じてる。そりゃ、会うことはできないけどな」

そして自分がそうであるからこそ、姉のためにやって来たシェラの手助けをしてやりたいと思う。

割り切れないものを抱いて苦笑いをするアキラを、少女は物言いたげな目で見つめた。

「アキラ、それは……」

「うん？」

シェラの瞳はためらうように彼の上を左右する。小さな唇が何か

を言おうと開きかけた時、だが前方から男の怒声が聞こえてきた。

「なんだ？」

声はどうやらアーケードの出口の方から響いてくる。

アキラは騒ぎの原因を確かめようと足を速めた。彼より高い位置にいるシエラが、数秒早くそれを見つけて目を細める。

「喧嘩みたいですね」

シャッターの閉まった店の前で、大学生くらいの男女が三人揉みあっている。どうやら酔っ払った男子学生二人が口論をしているらしく、仲裁しようとする女の「やめなよ！」という声が、ドーム状の屋根に響いた。

「うわ、こんな時間から酔って喧嘩かよ」

剣呑な空気に、アキラは人の波の中から様子をうかがう。他に行き交う人々も騒ぎを気にしてはいるものの、関わりあいになりたくないのか立ち止まる者はいない。

ついに二人がお互いの胸倉をつかみあうまでになると、シエラは困惑顔になった。

「警察を呼べばいいのでしょうか」

「めんど……あ、そうだ。これちよつと試してみるか」

「試す？」

白ブタを抱いたシエラは首をかしげたが、アキラはそれには構わず、一触即発の二人へと向き直った。荷物を持っていない方の手を上げる。

「あいつの視界と、俺の視界を入れ替える」

男子学生二人のうち、拳を振り上げた片方を指しての宣告。

スキルの発動により頭の中が熱くなりかけた時を狙って、アキラはその場で一回転した。

右足を軸にしての回転。しかし視界に映ったものは、見知らぬ若い男の赤ら顔である。視界と現実との齟齬に顔をしかめつつ、アキラがもう一度回転すると、近くで女の悲鳴が上がった。その原因を見た彼は、自分の口元を押さえる。遅れて本来の視界が戻って来た。

「アキラ、すごいことしますね」

「これ、俺も気持ち悪いわ……」

チェンジリングのスキルによって、自分のものではない回る視界を見させられた大学生は、殴ろうとした相手の服に思いきり吐いている。その吐き気がうつってしまったアキラは、口を押さえたまま足早にその場を離れた。シエラが両足で宙をかいて追ってくる。

「思いついたからやってみただけだけど、できるもんだな」

「あ、でもたしかにこれなら——」

「うん」

降りそそぐ霧雨の向こう、暗い夜の中には淡い光をまとった白い塔がそびえている。アキラは夜目にも美しい空塔を見上げた。

「これ使って警備を切り抜けられる、か？」

シギルがあるという空塔最上層。

そこはまだ、二人の手の届かない夜の闇に埋もれている。

とぼしい光を落とす街灯の下で、女の白い腕はなまめかしく映えていた。

上から下へと伸びる右腕。肩から先しかないその手の中には、男の喉が握られている。黒く塗られた爪がぎりぎり皮膚に食い込み、彼の呼吸を圧した。

宙に吊り上げられた男は足をばたつかせてもがく。彼は必死で謎の腕から逃れようとその手をかきむしったが、磨かれた陶器を思わせる指はびくともしない。むしろいつそう爪が喉に突き刺さる。

何もない暗闇からひややかな女の声が降ってきた。

「これもはずれ」

落胆の言葉とともに、加えられる力が増す。

ぐちゃりと肉の潰れる音に、骨の折れる不快な音が続いた。細か

く痙攣する男の体は、無造作に路上へと投げ捨てられる。そこには既に数人の動かぬ体が積み重なっていた。

壊れた人形たちの山を連想させるいびつな光景。その上を女の白い腕だけが自由にさまよっている。小さな溜息が、何もない空中からこぼれた。

「タイプBばかりじゃない。適応者なんてほとんどいやしない……。代行者を見つけるのがこんなに面倒だなんて聞いてなかったわ」

——来訪者を「見る」ことができるのは、適応者と呼ばれるごくひと握りの者たちだけだ。その適応者は虚都の基準により「タイプD」と「タイプE」の二つに大別できる。

ルール説明によれば、この二種に「タイプC」を加えた三種類の人間だけが契約可能であるそうなのだが、実際にこちらに下りてみると、いるのはほとんどが「タイプA」か「タイプB」ばかりだった。このようなところから勝負が始まっているとは思ってもみなかった女は、つのつていく苛立ちに歯軋りをする。

その時、近くの角を曲がって一人の若い男が現れた。

「へ……？」

呆然としたつぶやきは、光の中に積み重なる人間を見てのものだろう。数秒の間その場に立ち尽くしていた男は、我に返ったのか一歩後ずさった。その視線が、街灯のすぐそばを捉える。

「あ……れ」

宙に浮いている女。

肩までの金髪以外は夜に溶けこんでいる黒衣の彼女は、見るからに普通ではない。獲物を選定するようにじっと彼を見ているその顔は、鋭利さを感じさせる美貌ではあったが、何よりも上下さかさまだった。

右腕の肩から先がない女。その代わり空中を、切り離された白い腕が飛び回っている。

あまりのことに目をそらせない彼を見て、女はにいつと笑った。
「私が見えるのね？」

——ついに適応者を見つけた。
女は高らかに笑い声を上げると、逃げ出そうとする男めがけて、
高いヒールで街灯を蹴った。

14・呼び出し

たいして広くもない教室内には、大道具を作る金槌の音が鳴り響いている。

生誕祭で披露する創作劇の準備は、四日後の本番を前にすっかり佳境に入っていた。制服の上着を脱いだだけの格好で、アキラは看板の作成に向かっている。

ペンキ缶を片手に持った彼の頭上では、昨日買った服に着替えたシェラが、物珍しげに教室内を見回していた。黒いブラウスと生成り色のシフォンスカートは、上下反転していることを除けば彼女を普通の少女のように見せている。

アキラはペンキ缶を揺らしつつ、隣で同じ作業をしているカイを見やった。

「ってわけなんだけど、知ってる？」

「空塔の端末なんて、外には繋がってないよ。あたりまえだろ」

「だよな……」

呆れたような声での答は、なかば予想していた通りのものだ。天井に座って作業を見ていたシェラも、お手上げとでもいうように小さく両手をあげて見せた。

軍手越しにハケを動かすカイは、ていねいに看板のふちを塗っていく。

「どうしたんだよ急に。空塔はセキュリティ上、どこからも切り離されてるよ」

「いや、そうじゃないかとは思っただけださ」

「なんでそんなこと聞くわけ？」

カイの疑問は追及というほどのものではなかったが、本当のこと

を言えないからといって無視するわけにもいかない。アキラはとっさに言い訳を考えた。

「あー、ちよつと、そう、自分で模型を作ろうかと思ってさ」

「模型？ アキラが？」

「そうなんだよ。それで、えーと、空塔のことをもつとよく知ろうと思って。できるだけリアルに作りたいたいんだ」

自分でも苦しい言い訳だと思ったのだが、アキラのミニチュア収集癖を知っているカイはそれで納得してくれたらしい。しゃがみこんで下の方を塗りつつ頷いた。

「なんだ。だったらおれが持つてる資料コピーしてあげるよ。一、二階フロアだけでも中の写真も撮ってあるし」

「写真？ 自分で撮ったのか？」

「そうだけど」

「そ、それ、どうやって中に入った！」

空塔に普通の高校生が入ることなど不可能だ。

それはもう常識だと思っていたアキラは、思わぬ話にハケを持つたまま両手でカイの肩をつかんだ。友人の予想外な行動に、カイは口をぱくぱくとさせる。

「どうやって……並んでだけど」

「並べば入れるのか？ そういうものだったのか！」

「普通の日には入れないって」

「は？」

いまいち飲み込めないアキラに対し、カイは「ほら」黒板に書かれた文字を指さす。そこにはミヤの字ででかかと「生誕祭まであと四日！」と書かれていた。

「あんまり一般には知られてないみたいだけどさ、生誕祭中には空塔の中を見学できるんだよ。もちろん上まではあがれないけど」

「……まじで？」

「まじで」

それは願ってもみない好機だ。アキラは真上にいるはずのシエラ

を探して見上げる。

彼女も聞いていたのだろう。すぐ横にまで下りてきていたシエラは、アキラの手元を見て大きな目を瞠った。

「あ、ペンキ……」

「へ？」

カイの肩を掴んでいる手。その手に一緒に握られているハケから、赤いペンキが垂れてくる。とりりと手を伝ったペンキは止める間もなくカイの肩とアキラの袖口を汚し——次の瞬間教室内には、二人の叫びが重なって響いた。

「犠牲は大きかったが、重要な情報が手に入ったな」

「払わなくていい犠牲だった気もするのですが」

「やかましい」

頼まれたボンドやテープなどを購買で買いこんだ帰り道、ジャージに着替えたアキラはシエラと二人で校内の廊下を歩いていて。

ペンキで汚れた二人のシャツは、ミヤがその場で洗いに走ってくれたが、まだ乾いてはいない。カイも今ごろジャージ姿で作業の続きをしているだろう。

アキラのすぐ上を漂うシエラは、今日も片耳にイヤホンを挿している。昨日帰ってから部屋にあったディスクの分も、音楽プレイヤーに取り込んでやったのだが、彼女はよほどニーナの歌が気に入ったらしい。寝る時以外はプレイヤーを手放そうとはしなかった。

出会ってからまだ三日、つかみ所のない少女をアキラは見上げる。「それにしても絶好のタイミングだな。生誕祭に空塔見学があるなんて知らなかった。ひょっとして、そっちの勝負もこれに時期をあわせたのか？」

アキラの疑問は、たいして含むところのない単なる思いつきだ。だがそれを耳にしたシエラは、彼が初めて見る表情を浮かべる。僅かに歪んだ、苦しげな貌。小さな唇の両端が自嘲ぎみに上がり、

そこに影が落ちた。

「時期をあわせたわけじゃありません。単なる……偶然です」
「そっか」

アキラは彼女の変化に気づいたが、気づかないふりをして頷いた。よくはわからなかったが、そこに触れるべきではないように思えたのだ。彼はビニール袋を手元で振る。

「けど、生誕祭に決行つてすると、四日後になっちゃうけど大丈夫か？ 早くクリアした方が権限強くなるとかあるんじゃないか？」
「たぶん平気だと思います。他の来訪者は、代行者を見つけるまでにもっと時間がかかるでしょうから」

「そうなのか？」

——シエラなどは、落ちてきてすぐ見つけた自分と契約したのだ。他の来訪者もたいして時間をかけていないのではないか。

そう思ったのが顔に出たのか、少女はアキラを見てくすりと笑った。

「私は、多少狙ったとは言え、単なる幸運です」

「幸運？」

「言っただけじゃないですか。あなたは高い素質があるって」

先ほどのかげりなど微塵もうかがわせない笑顔。悪戯っぽさを含んで片目を閉じるシエラに、アキラは自分の視力の強さを思い出す。
「そっぴやそうだったけ」

とは言っても、自分では他者との感覚の違いなどわからない。

アキラは試しに手で右目を塞いでみた。片方だけになった視界の隅に、少女の黒髪がふわふわと揺れて見える。

「でも、シエラも俺を選んだのは偶然なんだろう？ 視力なんて契約した後はそんな役も立たないし、適当に選べば時間はかからないんじゃないか？」

「適当に選びたくとも、私たちが来訪者が見える人間の割合というものは、全体の一割にも満たないのですよ」

「え、そんな少ないのか？」

「ええ」

一割以下と言え、一クラスに三人いるかいなかだ。今までずっと普通で目立たない生き方をしてきたアキラは、自分が思わぬ位置に立っていたことに啞然とする。

そんな彼の顔を、上からシエラが覗き込んできた。白い手が伸ばされ、両側から彼の頬を包みこむ。

「その一割の中でアキラはさらに強い感覚を持っている……あなたは、自分で思うよりずっと特別なのです」

囁きかける言葉。水晶を思わせる澄んだ声は、身を引きかけたアキラを留める。

そのまま深く染み入ってくる響きに、ナンバーの焼きつけられた額が熱く疼いた。触れられている場所に、ぞっとするような痺れが走る。

足もとの覚束なさ。アキラは目の前の少女に飲まれて、黒い瞳を見返した。

「……俺は、普通がいい、んだけど」

「そうですね」

かろうじて声を搾り出すと、シエラは笑って手を離す。とたんアキラの周囲にはいつもの現実が戻り、体が浮き上がっていつてしまふような錯覚が消え去った。アキラは確かめるように廊下の白い床を軽く蹴る。

「狙ったって何？」

「え？」

「さっき言ってただろ。代行者を見つけるのに、多少狙ったって」

「ああ……」

納得の声を上げるシエラは、少しだけ高度を下げた。右手を大きく開くと、幼児のお遊戯のようにひらひらと振る。

「あなたあの時、光を出していたでしょう？」

「光？　って、ああ、杖か」

そう言われてみればあの時、ミヤに渡されたおもちゃの杖を空に

かざしてみていたのだ。先端につけられた銀色の星が、空からの光を反射していたことを覚えている。

アキラはそこまで思い出すと、少女を見下ろした。

「それだけ？」

「それだけです。ああいう変わったことをやるのは適応者が多いですから」

「そんなの誰だってやるだろ……ミヤとか特にやりそうだ」

「彼女はやらないと思いますよ。あ、あなたに感化されてたらわかりませんが」

「俺に原因を押しつけるな」

アキラからすると、ミヤの方がずっとフットワークの軽い性格をしているのだ。アキラが苦い顔でにらむと、少女はまたふわりと天井へ戻っていった。

手が離れても残る熱。それを熱いと思う理由は、彼自身よくわからない。

きつとたいしたことでもないのだろう。もとの五感が強いから——きつとそんな理由だ。

そうしているうちに教室の前まで戻ってきたアキラを、廊下に出ていたミヤが出迎える。

「おそいよ！」

「悪い悪い」

差し出された手に、アキラは白いビニール袋を渡す。ミヤは「ありがと！」と笑ってそれを受け取った。彼女は中を覗きこんでレシートを取り出す。

「あとで決算申請するから……って、黄色のビニールテープは？」

「あ、忘れた」

色々頼まれたのとメモを取らなかったのとで、漏れがでてしまったらしい。アキラがあっけらかんと答えると、買い物を頼んでいたミヤは頬をふくませた。

「もー！ アキラくんに頼んだわたしが悪いんだけど！」

「よくわかってるな。ごめん」

「次はメモ作って渡すからね！ 今はわたしが買ってくる！」

言いながら彼女はアキラの脇をすりぬける。その時、教室のスピーカーから呼び出しの放送が流れた。ぴんぽんぱんと間の抜けた音の後に、機械的な音声が続く。

「――呼び出しの連絡です」

教師や生徒を呼び出すその放送は、生誕祭準備期間中にしばしば流れるものだ。教室内のざわめきが少しだけ落ち着く。アキラはそれに構わず中に入ろうとした。

「校内で作業中の、シェラ・ハーディさん。シェラ・ハーディさん。お客様がいらしています」

「……は？」

アキラは反射的にスピーカーを仰ぎ見たが、呼び出しは幻聴ではないようだ。「第二校舎昇降口まで来てください」という締めくくりに、浮いていたシェラと顔を見合わせる。

「同名の別人なんてことは……」

「ないでしょうね」

このタイミングで、姓まで一緒ということはまずあり得ない。そもそもそんな名前の人間がいたなら、今まで一度くらい話を聞いていてもおかしくないはずだ。アキラは声を潜めて問う。

「ってこれ、まさか他のプレイヤーか？」

「おそらく」

「敵？」

「わかりません」

味方であるなら会いに来る意味がわからない。そもそも姉のために参加した彼女は、プレイヤーの中でも異端児的な存在なのだ。その彼女を名指ししてきた人物の狙いはいか、アキラはよくない予感に息を飲む。

「……無視するか」

「そうできたらいいのですが」

「まずいか？」

独り言を繰り返しているせいか、近くにいた女子生徒が振り返った。

「ミヤのこと？ 一緒に行つてあげればいいじゃん」

「え、いや」

「どうせ色々買い出すんだから、荷物持ちくらいしなさいよ」

「あー、俺今ちよつと……」

ミヤの姿は既に見えない。行動の早い彼女は、さつさと購買に行つてしまつたのだらう。

そして彼女を追うには、呼び出されている第二校舎昇降口を通らなければならぬのだ。

アキラの煮え切らない態度に、級友の少女はかえつて目をつりあげた。

「いいから早く行きなさいっての！」

蹴り出されそうな剣幕で、彼はぐいぐいと廊下に押し出される。

背後で大きな音を立ててドアが閉められると、アキラはげっそりとした顔で振り返つた。

「まったくなんなんだよ……。シエラ、挟まれなかったか？」

「なんとか」

アキラが追い出されるのにあわててついてきたシエラは、ドアの合わせ目から髪先をそつと引き抜いた。

「彼女の買い物を手伝いに行きますか？」

「それするとたぶん、呼び出した人間とはちあわせになるって」

「ですが相手は、私たちがこの学校にいるということまで突き止めています。このまま放課後まで待ち伏せされるかもしれません」

「あー」

どうして学校が割れたかはわからないが、少なくとも相手はシエラのことを知っているのだ。ここで無視して、後から不意を突かれでもしたら困る。せめて相手の顔を見ておくことくらいは必要だろ

う。アキラは自分の肩につかまっている少女を見上げた。

「シェラ、ちょっとこの辺にいろよ。俺が行って見てくる」

「え？ でも」

「お前と一緒にいたら俺が代行者だってバレバレ」

重力が逆に働いている少女は、遠目からでもそうとわかる状態なのだ。アキラ一人と比べて見つかりやすさは桁違いである。しかし当然の指摘にもかかわらず、シェラはすぐには頷かなかった。小さな両手がアキラの肩をぎゅっとつかむ。

「あなたの顔も割れていたらどうするんです」

「大丈夫だって。俺、特徴がなくてどこにでもいる顔ってよく言われるし」

「そういう問題じゃないですし、そうは思いません！」

「ちょ……っ」

耳元で急に叫ばれ、アキラはのけぞった。傍目からは彼が一人で妙な動きをしているように見えただろう。なんとか体勢を立て直し、少女にむかって手を振る。

「とにかくこの辺にいろよ。ちょっと見てくるだけだから」

「アキラ」

彼女はまだ引き止めたそうな表情をしたが、表面上は素直に天井へ下りた。昇降口方面へと向かうアキラに忠告の声をかける。

「額のナンバーを見られないようにしてください。他のプレイヤーがいても気づかないふりをして。それさえなければあなたは、普通の人間と見分けがつかないはずです」

「ああ」

手を上げて返事をしつつ、アキラは足早に廊下を歩き出した。

生誕祭準備の騒がしさは、廊下にまで溢れている。

シエラと別れたアキラは、途中両腕いっぱい荷物を持った生徒や、エプロン姿の女子生徒とすれちがった。前から歩いてくる三人の話が耳に入る。

「……でさ、第三住宅エリアで今日の朝、十人くらい人が倒れてるのが見つかったらしいんだよ」

「え、どういうこと？ 事故とか怪我とか？」

「いやー、原因は不明らしい。しかも全員手遅れだったってさ。ガス漏れか何かじゃないかって聞いた」

「オレはみんな首絞められてたって聞いたけど」

「ええ？ それ本当？」

「それがさ、近所に住んでるやつが、昨日の夜、窓から『手だけの幽霊』を見たって」

眉唾と思える会話に気を引かれ、アキラはつい聞き耳を立ててしまった。だがすぐに意識をもとの問題へと引き戻す。呼び出された昇降口に直接向かうのではなく、どこか上からまず確認しようと、途中の階段をのぼった。

アキラの教室は二階にあるが、三階は全てが特別教室だ。特に美術室は昇降口の真上にあるため、ベランダに出れば下の様子をうかがうことができる。

彼は美術室に入ると、中の部員たちに断ってベランダに出た。展示の準備をしていたらしい一年生が、きょとんとした目で彼を見送る。

錆びついたピンク色の鉄柵。足下のコンクリートは風雨にさらさ

れひびわれている。一人が通るのにやっとの狭いベランダを、アキラは地上を確認しながら歩いていった。昇降口の真上に来たところで、上半身を乗り出して下を覗きこむ。

「どいつがそうなんだ……？」

行き交う人間はみな、学校の生徒ばかりだ。おかしな格好の人間も混ざっているが、それは生誕祭の衣裳かなにかだろう。

——しばらく探してはみたが、客人らしき人物などどこにも見当たらない。

これは死角である校舎の中にいるのだろうか。あきらめて身を引きかけたアキラは、しかしその時、私服の若い男が昇降口から出てくるのを見つけた。周囲の高校生たちより二、三歳だけ年上に見える男は、おどおどと辺りを見回している。三階からもその表情が引きつって青ざめているのがわかった。男は怪我をしているのか、右腕をかばうように服の上から押さえている。

見るからに不審な人間だが、その周りにプレイヤーらしき姿は見えない。アキラは念のため男の顔をよく見ようと目をこらした。

「もうちょつと上向け、上」

黒いジャケットにジーンズ姿の男は、前髪が長いせいか顔がよくわからない。

せめて額が見えれば、代行者かどうか確定できるのだ。アキラは念のため自分の額を押さえると、塗装の剥げた柵に寄りかかり目を細めた。問題の男へ意識を集中する。

ちょうどその時、購買のある隣校舎から昇降口へ、見覚えのある少女が走ってきた。

「って、あれ。もう帰ってきたのか」

両手に白いビニール袋を持ったミヤは、小走りに校舎へと向かってくる。

彼女が怪しい男の前を通り過ぎようとする時、アキラは我知らず緊張に息をつめた。

何かされるのではないかという、わずかな不安。——しかしミヤは、何事もなく男の前を行過ぎる。

「なんだ……」

ほつと肩を下ろしたアキラは、その瞬間たしかに気を抜いた。息をつく彼の顔に影がさす。

空の色が変わったのだろうか、目だけで上を見たアキラは、思わずその場で腰を抜かしそうになった。叫び声をあげかけて、なんとかそれを飲み込む。

人の手。

何もない空中に浮いているそれは、間違いなく人間の腕だ。大きなや太さからいって大人の男の右手であろう。それはまるでおぼつかずに、ふらふらと左右にさまよっていた。

白昼夢としか思えない不気味な姿。しかし漂っていた腕は何かに気づいたのか、少しずつアキラへと近づいてくる。その動きを視界の隅でみとめつつ、彼は思考をフル回転させた。

——これは、おそらくスキルだ。

どういうものであるかはわからないが、その可能性は限りなく高い。ならば今すべきことは、この手が見えていないかのようにふるまうことだ。アキラは強張りそうになる表情をさりげなく変え、気分転換に出てきた人間のようによそおう。深呼吸をし、落ち着いた足取りでドアへと戻った。

揺れていた手が空中で静止する。

うまく切り抜けた——そう思った時、頭のすぐうしろで女のなまめかしい声が囁いた。

「見つけた」

「……っ！」

開けたドアの向こうへとつさに転がり込む。

もんどりうって戻ってきたアキラを、数人いた美術部員が啞然として見やった。

けれどすぐに、女子生徒の一人がアキラの背後を見て悲鳴を上げ

る。

「う、腕が！」

「え？」

両手を床について起き上がるアキラが見たものは、恐怖の表情で後ずさる部員たちだ。

「まさか、見えてるのか？」

「そうね」

声は開け放したままのドアの前から聞こえた。

そこに浮いている黒スーツの女は、片手に男の腕をつかんだまま、さかさまの笑みを浮かべている。肩までの高さに切り揃えられた金髪。青い目の整った容姿は、しかしどこか残忍な匂いが感じられ、好意的な印象を持つことはできなかった。

女はからかうような目をアキラに流す。

「だから見えているものを見えないふりするなんて、代行者じゃないわよね？」

「……クソ」

スキルにどのようなものがあるのか、知らなかったことを後悔し、もしかたない。まさか普通の人間に見えるものがあるとは思わなかったのだ。

アキラは遅ればせながら、ここに来るまでに聞いた噂話のことを思い出した。

「ひよっとして、手だけの幽霊ってお前のことか」

「木偶どもにはそんな風に見えるらしいわね」

女はあからさまな嘲笑を見せて、アキラの頭越しに美術部員たちを眺める。彼らは、ある者は困惑を、ある者は恐怖をあらわにして、宙に浮かぶ腕を見つめていた。

細められた女の目は、嗜虐者の愉悦を湛えて教室の中を舐めまわす。しかし女はふっと表情を変え、優しい微笑になると、アキラに問うた。

「シエラ・ハーディは？」

「見りゃわかんたろうよ」

シエラは今ごろ二階の廊下で待っているはずだ。アキラは彼女と合流するのがいいのか、それとも庇った方がいいのか迷った。空中をさまよう腕を警戒して、二、三步距離を取る。

異様な空気に包まれる美術室。最初の悲鳴も、生誕祭準備の喧騒にまぎれてしまったのか、誰も様子を見に来ない。悲鳴をあげた女子本人は、アキラが目に見えぬ何かと会話しはじめたせいで、逃げる機を失ってしまったようだ。廊下へと出る戸に手をかけながら固まっている。

黒衣の女は軽く首を傾けた。花卉に似て立てられた大きな襟に、肩までの金髪が触れる。

「なら呼んできなさい。彼女に話があるわ」
「話？」

警戒を隠さないアキラに女はにつこりと微笑みかける。

華のある美人がそうして笑うさまは、先ほどの嘲笑を見ていなければ友好的なものに思えたかもしれない。だがアキラは、廊下で聞いたばかりの話を忘れてはいなかった。

「あのさ、昨日の夜、人の首を絞めた？」

その問いに、女は薄い微笑を見せたままだ。

仮面を思わせる表情。アキラは確信を強める。

「シエラを呼んでどうする？」

「少し話し合いをしたいと思っているだけよ」

「前にもスガってやつが来たけど、あんたも同じか？」

「私はスガほど愚かではないつもりだけど？」

——敵だ。

アキラは七割の直感でそう断じる。残りの三割は、この女とスガに繋がりがあることがわかったためだ。女はおそらくスガのやったことを知っていて、それを否定していない。ただやり方が稚拙であったと言っているのだ。

アキラは背後で凍りついている美術部員に向けて、追い払うように手を振る。

「ちよつと悪いけど外出ててくれ。他の人間には黙っててほしい。

……あー、単に生誕祭の劇がらみだから」

「劇？ その浮いてる腕が？」

「そう。ちよつとした仕掛けなんだけど、なんかおかしくなっちゃまったみたいで。ばれると怒られるんだ。すぐなんとかするから」

自分でも苦しい言い訳だと思ったが、部員たちも異様な雰囲気、「関わりたくない」と思ったらしい。彼らは一度顔を見合わせると、不審げにアキラを振り返りながらも廊下へと出て行く。

ドアの閉まる音がして教室に静寂が戻ると、アキラはひとまず安心した。

これで騒ぎにでもなつてシエラが様子を見にきては困る。少なくともアキラは、一人でいるうちに女の出方をもう少し確認しておきたかった。

二人きりになった美術室内で、意識を女へと戻したアキラは、いつのまにか浮いている腕がないことに気づく。さりげなく左右を見回す彼に、女はくすくすと笑った。

「何を探しているの？」

「シエラになんの話だよ」

質問に質問で返してくる無礼を女はとがめない。彼女はただ楽しそうに、彼の敵意を受け止めた。

「簡単な話よ。今回のゲーム、彼女に下りてもらおうと思っているだけ」

「はあ？　なんでそんなことする必要があるんだよ。シギルを取れたって話し合いに参加できるっただけだろ。シエラの意見に反対ってならその時すればいい。ってか、こんなところ来てないで自分のシギル取りいけよ」

アキラは女までの距離を測る。上履きの底が木の床をこすり軽い音を立てた。強張りそうになる右手を、一度開いて握る。

スガの時には火をつけたうえ、おもいきり相手を殴ったが、さすがに女相手ですこまではやりにくい。まず無理な話だろうが、アキラは彼女が嫌味を聞き入れて、自分の振り分け都市に帰ってくれないだろうかと期待した。

しかし女は淡い期待に反して、唇の片端をいびつに上げる。

「彼女だけは特別。テーブルにつく権利さえ与えたくないわ」

「私情で参加したから？」

「違う。知らないの？——彼女はこのゲームを提唱したハーディ博士の娘なのよ」

16・後継者

——シェラが、ゲーム提唱者の、娘であると。

今まで知らなかったその情報は、アキラに軽い混乱をもたらした。張りつめていた気がたわむ。

「娘って、え？　つまり、システム管理者の——」

「そうよ。だから少しの権利もあつては困る。万が一にでもシェラ・ハーディが権限をまるまる相続してしまつては、私たちがこのゲームに参加したこと自体、無意味になるわ」

芝居がかつて広げられた両腕は、アキラに感銘を与えるものでは少しもなかった。女がさかさまであるように、その言葉も水面に映った虚像のごとく揺らめいて感じる。

「彼女は根本的に他のプレイヤーとは意識が違うわ。父親の苦勞を知っておきながら、ずっとここに関わろうとはしなかったのだから、そんな人間に何を任せられるというの？　今更後継者面なんて、虫がよすぎるんじゃないくて？」

優美な問いかけにはしかし、あてつけるような棘がたつぷりとまぶされていた。黒く小さな悪意の棘は、アキラの内心をちくちくと刺激する。

「……シェラは自分を後継者だなんて思つてなかった」

「そうかしら？　彼女はそうでも博士は違つかもしれないわ。もしかしたら他のプレイヤーなど単なる当て馬で、このゲーム自体、最初から娘のためのものという可能性もあるでしょう？」

「それは……」

シェラの父親ということは、彼女の姉の父でもあるということだ。病弱な姉の治療法を探してやってきたシェラ。彼女の父が以前か

ら空塔操作のシステムに関わっていたのだとしたら、なぜもつと早く娘のために手を打とうとしなかったのか。

アキラはわきおこってくる疑問に捕らわれかけ……だがすぐ我に返った。

——シエラが何者であろうとも、彼女を選んだのは自分だ。

そこに嘘はない。疑いようもない。このようなところで戯言に踊らされては、相手の思う壺だろう。

アキラは、揺るがないよう自身の気を引き締めなおす。目の前の女に意識を集中し、困惑を思考から追い出した。深く息を吐いた彼の脳裏に、シエラの悲しそうな微笑がよぎる。

空々しい静寂がその場に満ちる。お互いの腹を探り合いながらの会話は、波打つことはあってもまじわらない平行線のままだ。アキラは譲る気のない目で女をにらんだ。

彼女は小さく溜息をつくと、音もなく天井に下りる。

「ならこうしましょう。——私に協力してくれるのなら、この都市については保障してあげる」

「保障？」

「このままでいいと言っているのよ」

高圧的な条件のつきつけを、女は喜ばれるものと信じて疑っていないようだ。ただごくごく自然に彼を下に見ている。

アキラは沸き起こってくる感情の熱さに、かえって思考は冷えていくのを自覚した。

「……スガは第八都市を潰してやるって言ってたよ」

「私はあの男ほど愚かではないと言ったはずよ」

「でも同種だ。知り合いなんだろう？　っていうか今の言い方が納得できない。上から目線で保障してやるとか言って、じゃあ他の都市はどうするつもりなんだよ」

シエラは、「この世界をどうしようとも思っていない」と言った。それはアキラにとって協力するに足る意志で、だがスガや目の前の

女はおそらく違う。彼らはこちらの世界について、都市も人間もどうでもいいものと思っているのだ。そうでなければ都市を潰すと宣言したり、人の首を絞めたりはしない。

アキラは手の届かない高さに立っている女を見上げる。不吉な黒衣の女は何も答えず、青い瞳を細めて笑んでいた。

「シエラは下りない。俺はあんたには協力しない」

「なぜ？ 彼女はあなたに嘘をついているのかもしれないわ」

「だとしても、シエラは俺たちを軽んじないんだよ！」

姉のために来たと言っていた少女。物珍しげに、嬉しそうに、そして少し淋しそうに街の風景を見る彼女は、きっと根本的に彼らとは違う。だからこそ彼らがシエラを排斥したいというのなら、決してそれに屈してはならない。

自分の肩にこの都市の存亡がかかっているのかもしれないという事実は、天井に立つ女を目前にした今でもまったく現実味がない。これが妄想で済むのなら、その方がいいと断言できる。

だが残念ながら、これは夢でも妄想でもないのだ。アキラは女への苛立ちを原動力としてその場に踏み止まった。

もし女が未契約のプレイヤーであるならば、スガと同じく道具を介しての攻撃は効かない。代行者がいるかどうかは物で殴ってみれば判明するだろうが、周囲には女に届くような長さのものは見当たらなかった。

ならばスキルをどう使うか。それが鍵だ。考えなければ突破口はない。なにしろアキラに与えられたスキルは――

「チェンジリング。今回振られたスキルの中でもっとも特殊かつ無力なものね」

「……げ」

「別に心を読むわけではないわ。単にあなたの表情がわかりやすいのよ。ただね」

女の舌がちろりと唇を舐めた。

「――代行者を殺しても意味はないの」

背筋が凍った。

スガの時とは違う、しなる鞭のような冷やかさ。邪魔だという敵意を隠していない声音はひどく優雅で、その分ぞつとした。

アキラはベランダへのドアを確認する。

宙に浮く腕はまだ戻ってきていない。あれがたぶん女のスキルで武器だ。首を絞められた人間がいるという話もその証拠だろう。アキラは自分の喉を手で押さえる。

「なにが無意味なんだ？」

「代行者が死ねば、スキルコードはプレイヤーに戻るわ。もちろんその分のロスはあとで成績に反映されるだろうけど、シェラ・ハーディが権利を喪失するわけじゃない」

「……よくわかんないけど、そこまで聞いてシェラを呼ぶ馬鹿はいないだろ」

むしろ代行者もなく一人でいるのは女の方だ。ここで彼女を下すことができれば、それが一番だ。アキラはスキルを行使するために右手を上げて女を指す。

だが肝心の宣言をする前に、女は天井を蹴ってベランダへのドアの前に立った。開いたままのドアに足をかけ、はじめと同じ嘲笑を見せる。

「夜まで待つてあげるわ。シェラ・ハーディと一緒に、エリア十三の廃ビルまで来なさい」

「おばけビルに？」

高校生の間では割合有名な、現在取り壊し工事中のビルの通称をあげると、女は首肯した。

「素直に来れば、お前が大事にしている人形はちゃんと返してあげる」

「人形って」

そんなものは一つも持っていないはずだ。虚を突かれたアキラが心当たりを考えようとした隙に、女の姿は外へと消えた。

アキラはあわててベランダへと飛び出す。すばやく空を仰いだが、

そこにはすでに薄い緑色の空が広がっているだけだった。

「なんなんだよ。人形？」

自室にコレクションしているミニチュアやジオラマの中に、そういえばごくごく小さい人形がいくつか含まれていたかもしれない。だがそのことだとしたら、壊されても悔しくはあるが、背に腹は変えられないだろう。

アキラはあたりに注意を払いながら、もう一度昇降口の前を覗きこむ。

先ほどまでそこにいた、怪しい男はもうどこにも見えなかった。

廊下にいた美術部員たちは、アキラの下手な言い訳にかならずしも納得したわけではなさそうだった。

だが非常に忙しい時期でもあるため、「もう終わったから。なんでもない」と念をおせば、それ以上は拘泥できなかったのだろう。おのおの展示準備へと戻っていく。

しかし、彼らへのごまかしが通用するのも、「手だけの幽霊」について話が広まるまでのことかもしれない。二階へと階段を下りるアキラは、予想したくない未来に頭痛を覚えた。

「そんな噂とセットで目立つとかマジかんべんだっての」

もしもそのようなことになったなら、今まで彼が立っていた平穏で平凡なポジションもむざんに崩れさってしまう。霊感人間などと言われだしたら目もあてられない。

不穏な想像をしつつアキラが元の階に戻ると、シエラは教室前の廊下でおとなしく待っていた。落ち着かなげに窓に寄りかかっていた少女は、彼の姿を見るなり宙を泳いでくる。

「アキラ！」

叫ぶ彼女にまず手をあげて応えようと、アキラは声をひそめた。

「他のプレイヤーを見つけた」

「ああ……」

「それで俺も見つかった」

「え？」

一瞬きよとしたシエラは、だがみるみるうちに青ざめた。心配そうにアキラの全身を見回す。

「大丈夫だったのですか？」

「とりあえずは。軽く決裂して脅されたけどな。人形が惜しければシエラをつれておばけビルまで来いって」

「人形？ って……」

「俺のミニチュア壊されてたら怒るぞ」

冗談めかして言ってはみたが、シエラ表情は晴れない。

アキラが続けて女の特徴を口にしかけた時、教室の戸が軽い音をたてて向こうから開いた。ついさっき彼を追い立てた女子が、アキラに気づくと眉をよせてにらんでくる。

「なんで一人なのよ。テープは？」

「ミヤが持ってきただろ」

「まだ帰ってきてないってば。先に帰ってくるならテープ持ってきてよね、もう」

「は？」

——ミヤはずっと前に校舎に入っていったはずだ。

あれからアキラが謎の女と話していた時間も考えると、いくらなんでも戻っていないはずがない。彼の背筋は本人が意識するより先にすっと冷えた。

「……どこかで寄り道でもしてるんだろ、きつと」

「なにそれ。じゃあ早く受け取ってきてよ。テープいるんだから」

「わかったよ」

感情のない声で言い捨てて、アキラはきびすを返す。彼の肩にシエラが急いでつかまった。

「アキラ。その人形って……」

「違う。俺は上から見てただけだ。ミヤとはなんの話もしてない。あいつはちゃんとこっちの校舎に入っていったんだ」

——だから、あの女に自分とミヤとのつながりなどわかるはずもない。

そう思いながらも、不安をぬぐえないのはなぜなのか。

階段を下り、昇降口まできたアキラは周囲を見回す。しかしそこにミヤの姿は見えない。あの若い男もいない。準備に奔走する生徒たちが行き来しているだけだ。

活気づいている校舎内。唾を飲み込む口内はからからと乾いていた。アキラは他の教室を覗きながら、幼馴染の姿を探して戻りはじめる。右肩につかまるシエラが左右を必死に見回した。

アキラは混乱しかけた記憶をたどる。

「……あの女は、きつと上から探してたんだ。昇降口を確認するやつがいるかどうか……」

そうして金髪の女はアキラを見つけた。ベランダから乗り出して怪しい男を見張る彼は、空から見ればじゅうぶんに目立って怪しかっただろう。けれどアキラが反応したのは怪しい男に対してだけではない。帰ってきたミヤを見た時もまたそうだったのだ。

アキラは階段をのぼり、全ての教室を見て回る。顔色も悪く険しい表情の彼を、すれ違う生徒たちは驚いた目で見やった。だがそれにかまわずアキラは次の教室を覗く。

彼女はいいない。探しても見つからない。

アキラは重い足取りでクラスの前に立った。

思えば宙を漂うあの腕は途中から消えたままだった。そして男もまた、最後に見たときにはいなくなっていたのだ。可能性を疑いはじめれば、途端に不穏な要素が思考を駆けめぐる。焼きついたナンバーがうずく気がして、アキラは前髪の上から右手で額を押さえた。「まさか、そんなわけないだろ」

ミヤは人間だ。人形ではない。アキラはそう断言できる。

「ここ学校の中だぞ。そんな馬鹿な話あるかよ……」

肩をつかむシエラの指に、きつく力がこめられる。

突然ふりかかってきた理解不能な事態。

気を抜いたアキラを嘲笑うかのように、ミヤは夕方すぎになって
も戻ってこなかった。

おぼけビルとの通称で呼ばれる廃ビルは、数年の放置の後、最近解体工事がはじめられたばかりである。高い建物に挟まれた敷地は、そのため今はぐると工事用の塀が囲んでおり、建物自体は灰色のネットでくるまれている。

シェラとともにその白塀の前に立ったアキラは、黒いシルエットのビルを見上げる。

空はすでに夜の領域をしめす群青色だ。街中を照らす無数の明かりも、二人のところまではわずかししか届かない。塀の向こうに見えるクレーンが、青白い街灯の光を反射して重い存在感を放っていた。「どこから入りますか？」

「工事の人間が使う出入り口があるだろ」

今日の分の解体作業はもう終わっているらしく、中からは何の音も聞こえてこない。いったん寮に帰り、動きやすい黒の上下に着替えてきたアキラは、塀にそって外周を歩き始めた。

彼にならってTシャツとレギンスに着替えたシェラが、一つに編んだ髪を揺らして塀の中を仰ぎ見る。

「シェラ。あまり上にいくな。ビルから狙われるかもしれない」

「はい」

もともと建設途中に何かの事情で工事が中断されたそこは、途中の階からは鉄とコンクリートの柱が組まれているだけで、壁がない吹き抜け状態のままだ。真っ暗に見えるビルのどこにあの女がいるのかはわからないが、用心しなければ向こうからの目視はたやすいだろう。

シェラは体育座りをするようにして膝をかかえると、アキラの肩につかまる。

「マテイルド・ウジエは手段を選ばない人間です。切れ者ではあるのですが、感情的で自分の利益を何よりも重視します」

「かなり性格悪そうだった」

問題の女についてアキラがその特徴を教えたところ、彼女はやはりシエラとは顔見知りの人間であった。

マテイルド・ウジエという名の女は、華やかな容姿と有能な手腕で知られているそうなのだが、以前から一皮めくれば黒い噂もつきまとうていたらしい。

事実今回も人質を取るという手段を取った彼女に、アキラは激しい苛立ちを覚える。

「こつちも遠慮しないでしばき倒してやる」

「私もそのつもりでいます」

塀の中に小さな通用ドアを見つけたアキラは、ドアノブに手を伸ばした。不思議なことにロックはかかっておらず、カチャリと音がしてドアは内側に開かれる。敷地内に照明はついていなかったが、街灯からのとぼしい明かりで、砕かれたコンクリートの山が見てとれた。

「それにしても、あの腕のスキルはなんなんだろうな。他のやつらにも見えてたみたいけど」

「……あなたが見たのは、男の腕だったんですよね？」

「たぶんな。筋肉とかはあんまりなかったけど」

それに関してはアキラも人のことは言えない。スガとやりあった後、筋肉痛にならなかったことがせめてもの救いだろう。

彼は、コンクリートの山のそばを抜けると、建物内に入るため手近なネットをくぐる。シエラの手を引いて華奢な体を引き込むと、考えこんでいたらしい彼女は顔をあげた。

「おそらくそれは、使用者の腕を武器として変換するスキルです」

「使用者の腕を？」

「昇降口前にいた男は片腕をかばっていたのでしょうか？ その時本当に男に腕があったか見ましたか？」

「え？」

言われて考えてみれば、袖口から覗いているはずの手までは見えなかった。アキラは気味の悪さに口元を押さえる。

「いやでも、腕の部分はちゃんと膨らんだ、と思う」

「服の中に詰め物をしてあったのでしよう。他の人間にも見えたということは、この世界の物質として構成されているからだと思います」

「ってことは、あいつが代行者で決まりか」

「ええ。きっと」

「どういう神経であんな女の代行者やってるんだよ」

人を人とも思わぬマティルドは、どのような甘言を用いて代行者と契約したのか。理解できないとかぶりを振るアキラに、シェラは苦い息をついた。

「これは可能性の問題ですが…… 契約はかならずしも両者の同意が必要なのではないのです。相手の体に触れ、コマンドが終わるまでの間、動かなければ契約は完了します」

「へ。それでいいのか」

「ええ」

意外な話にあキラは思わず口元を押さえた。

たしかに思い出してみれば、会ったばかりのシェラは、なんの断りもなしに額に触れてこようとしたのだ。

だがその後スガが現れてからずっと、彼女はどこかしら遠慮がちであった。おそらくシェラは、代行者をプレイヤー間の戦闘に巻き込みたくはないのだろう。今も表情を曇らせたままの彼女に気づくと、アキラは軽く手を振ってみせる。

「気にすんなよ。俺は少なくとも説明聞いて納得してるしさ。相手の男もそうかもしれない」

「ですが……」

「そうじゃないならラッキーってことだろ。あの女に納得づくで従ってるんじゃないなら、向こうの代行者はこっちの味方になるかも

しない」

シエラを安心させようときっぱり言っていると、少女は一瞬目をみはり、そして微笑んだ。花がほころぶような笑顔に、不意をつかれたアキラは絶句する。心臓の跳ねる音が聞こえた気がした。

「あー……と、とにかく、気をつけていこう」

「ええ。ミヤさんを無事に取り戻して、マティルドの権利を剥奪します」

幼馴染の名を聞いた彼はすつと表情を消す。

あれから大勢に聞いて回ったところ、どうやらミヤは訪ねてきた男に何かを話しかけられ、二人で校舎の外へ出ていったらしい。

男がどのように彼女を言いくるめたかはわからないが、お人好しで人の頼みを断れないミヤだ。さして相手を疑うこともなくついていたのだらう。そうして彼女はいつも人の中心でいつも笑っていたのだ。

アキラはにじみ出そうな感情を抑え、わざと明るい声で言った。

「まったく、小学生だってもうちょつと疑り深いっつーの」

「私は、彼女のそういったところは長所なのだと思います」

まるでミヤをよく知っているようなフォローの言葉に、アキラは苦笑するに留める。

彼は持つてきたペンライトを取り出すと、それで暗いビル内を照らした。瓦礫と埃だらけのがらんとしたフロア内。奥に上へのぼる階段が見える。アキラは慎重に気配を探りながら、階段に向かって歩きだした。シエラの指が彼の服をひっぱる。

「トークをいれます。いいですね？」

「ああ」

マティルドとの一件を話した際に教えられた「トーク」とは、プレイヤーと代行者の間で使えるテレパシーのようなものらしい。離れていても、口に出さずとも、相手とやりとりができる力。おそらくそれを使ってマティルドは、男にミヤのことを教えていたのだ。

トークについて聞いたアキラは、なぜ今までそれを使おうとしな

かったのかシエラに尋ねたが、対する彼女の答は困ったようなものであった。というのもどうやらトークを使っていると、伝えるつもりのない思考も相手に届いてしまったりするらしい。そういったことに慣れていない彼へ、シエラは今まで配慮してくれていたのだから。

しかし今回は細かいことを気にしていられる場合ではない。自らトークを使いたいと提案したアキラは、おかしな雑念が伝わってしまわないよう改めて気を引き締める。後ろから少女の繊細な両手が伸びてきて、彼の耳の後ろに触れた。

ぞつとするような感触。やわらかい温度にアキラは息を止める。透き通る声が宣言した。

「コマンド・トーク……オン。タイム、10800SEC」

一万八百秒、三時間の制限。それは彼らが事前に話し合って決めた時間だ。この間にマテイルドたちを倒し、ミヤを連れて戻る。

失敗は許されない。今回の衝突には自分たちやミヤだけではなく、大局的には都市の存亡そのものがかかっているのだ。

（聞こえますか、アキラ）

「ああ。つて、こっちからも喋らないで通じるのか。難しいな」

（すぐに慣れます）

アキラはペンライトをシエラに渡す。自分は服の中から伸縮式の警棒を取り出し、それを伸ばした。途中の店で買ってきた警棒は、軽くはあるがかなりの強度があるらしい。アキラは二、三度素振りをして感触を確かめる。

（いけそうですか？）

「たぶんな」

フロア奥にたどりつき、階段の一段目に足をかけたアキラは、わずかな物音も聞きもらさぬよう口を閉ざした。彼はそうして強い意思を持って、一言だけシエラに送る。

（——俺は、お前を信じてる）

そう伝える彼は、今回のゲームについて彼女と交わした会話を思

い出していた。

「シエラが管理者の娘って本当か？」

それは寮に戻った際、アキラがまっさきにシエラへと確認したことでだ。

聞かない方がいいだろうかとも思ったが、これを確かめないままでは、後々自分たちの協力関係に障ってくる気がする。実際シエラの目的である姉の治療法について、アキラは現状、じゅうぶんな成果が得られたのかどうか、まったく把握できていないのだ。

もちろんシエラは、データベースを調べて「知りたいことはわかった」と言った。本来一般人には完全に解除されることなどない制限をはずしたのだから、都市に属する研究所のデータもある程度は覗けたのだろう。だからこそ当面の課題が空塔攻略にシフトしたのだと、アキラも思っていた。

だが、そのように簡単に治療法がつかめるなら——シエラの父親はなぜもっと早く、こちらの世界に来て、娘のために治療法を調べようとしなかったのか。

この疑問を残したままでは、マティルドに集中できない気がする。部屋の天井に立つシエラは、アキラの疑問に長い睫毛を伏せた。無言で閉じた目を、数秒後ゆっくりと開ける。

「本当です」

「そっか。なんで黙ってたか聞いていいか？」

アキラがあっさりと流したことに、彼女は少なからず驚いたらしい。大きな目を一瞬瞪る。

だがすぐに彼女は深々と頭を下げた。

「すみません。これをお話してしまうと……私を普通のプレイヤーとして見てもらえない気がしたのです」

どこか悲しげな翳は、シエラが家族について語る時に、いつもつ

いて回るものだ。

父や姉に向き合うことを避けていたと言った彼女。マテイルドは、シエラが父親の苦勞を知りながらこの世界に関わらなかつたとも言った。それは彼女が持つ引け目で、出会ってまもないアキラが理解できるようなものではないのかもしれない。契約者との距離をはかりながら、アキラは言葉を選ぶ。

「それ、ゲームの中で優遇が受けられないことに不満持ったり、出来レースだとか疑わないようにか？」

「ええ。ですがそれ以上に、なぜこのゲームが必要なのか、代行者に疑問を持たれたとしても、私は答えられないのです」

大きなため息は、彼女自身への失望を含んでいるように聞こえた。シエラの黒い目が、机の上に置かれた空塔の模型を見上げる。

「私は確かにシステム管理者——ゲーム提唱者の娘です。ですが、私には実質なんの権限もないのです。ゲームでの優遇はおるか、父の真意を尋ねても答えてはもらえません。なぜこのようなゲームをやるのか、私も父に問いかけはしたのです」

少女の口元が自嘲ぎみに歪んだ。シエラはわずかな間をおいて、小さくかぶりを振る。

「ですが、返されたものは沈黙でしかありませんでした。彼の娘であることで私が得られたものは、飛び込みでの参加権利だけです」

「姉貴のためだと言ってても、だめだったのか？」

「父はずっと姉のために、システム管理を通じて尽力してきました。その父からすれば、私の行動など、遅きに失したあがきにしか見えないでしょう」

「つつつてもさ」

「いいのです。本当のことですから」

微笑もうとするシエラの声音は、少しだけ強張って聞こえる。アキラはそのことに気づくと、彼女の父に対する批判的な言葉を飲み込んだ。少女の唇はぎこちなくも笑む。

「こちらの世界に来る時、父に言われました。私の好きなようにす

ればいいって。だから、この勝負において私は自由です。——そして、それ以外何もありません」

「シエラ」

「黙っていて、すみません」

さかさまの彼女は、もう一度頭を下げる。

細い体はその時、濡れそぼったように消沈して見えた。アキラは届かないとわかっていながら、天井へ手を伸ばしたくなる。代わりにあげた声には、焦りに似たものが滲んでいた。

「気にすんなよ。優遇なんてあったら、かえって他のプレイヤーに文句言われる」

「でも」

「正々堂々やって勝てばいいだろ。問題ないって」

彼女の家庭の事情を全て知ることはできない。

だが、父親に引け目を抱いてうなだれる必要などないだろう。好きにやれと言われたなら、好きにやればいいのだ。そして結果を出せばいい。

「俺は、シエラが契約者でよかったって思ってる。だから気にすんな。お互い様だろ。他のやつらとかとんでもないやつばかりだし、人質とか本気でむかつくし……」

なにを言えばいいのか、口にすればするほど脈絡がなくなっていく。彼女を傷つけずに慰めたいと、思っているのだが、どうすればいいのかわからなかった。

けれど少女にその思いは伝わったらしい。顔を上げたシエラは濡れた目で彼を見つめた。

紅い唇が彼の名を呼ぶ。

「……アキラ」

「ん」

「私は——」

掠れかけた呟き。途切れた言葉は、アキラの沈黙と入り混じった。机の上の蛍光灯が白くぼんやりとした光を投げかける。

なんとはなしにその光を見つめる彼に、ややあつて少女の囁くような声が届いた。

「アキラ。私、きっとあなたに応えます」

見上げた少女は、ひたむきな目をアキラへと向けている。その目に頷いて、彼はシエラへと手を差しのべた。

18・衝突

おばけビルの中は不気味な静寂に満たされている。

階段をのぼって上の階に出ることに、シエラはペンライトでビルの中を探っていった。

壁で区切られていないため一目で見通せる広いフロアには、しかし今のところ誰の姿も見つからない。そのまま八階まであがってきたアキラは、ついに外壁もなくなり視界の先に夜景が広がっているのを見て、げっそりした顔になる。

もとからそうだったのか違うのか、この階には外側を覆うネットも見えない。正面の外周ぎりぎりには資材らしきものが積み上げられており、その上にはブルーシートがかけられていた。

真向かいから吹いてくる生温い風。彼は足を振って疲れをほぐすと、軽くぼやいた。

「これ、どこまでのぼりやいいんだ？ あんま上行くと解体されるだろ」

「それは大変ね」

唐突な声は、頭上から聞こえた。

それが誰のものであるのか、わかったアキラが身構えるより先に、シエラの悲鳴が響く。

「あああっ！」

「シエラ！」

ペンライトが落ち、視界の半分が闇に覆われる。だがアキラは外からのわずかな明かりを頼りに、引きずられていこうとするシエラの手をつかんだ。軽い体を逆に引っぱる。

細い足首に、男の手が取りついてるのが見えた。

「離せよ！」

腕だけのそれに、アキラは思いきり警棒を叩き込む。鈍い光を反射する警棒。ちょうどその先端が手首の部分を打ちすえた。

「ぐあっ」

闇の中から男のうめき声が聞こえ、足首の拘束が緩む。そこから抜け出したシエラはふわりとアキラの背後に回った。逃げ出そうとする腕へ、アキラはさらに警棒を振りかぶる。だが追撃はすんでのところで空を切った。腕は外からの光が届かぬ場所へ消える。

「くそ。どこいった」

すかさずシエラがペンライトを拾って天井を照らす。

しかしそこにマティルドの姿はない。アキラは声の聞こえた方へと足を踏み出した。

「シエラ、離れるなよ」

「はい」

敵の目的はシエラだ。アキラは死角から襲われないよう注意しつつ、近くにいるはずのマティルドへ声を張りあげた。

「来てやったぞ！ つれていったやつを解放しろよ！」

「そうね。奥を見てみたら？」

くすくすと笑う声がフロア内に反響した。歯軋りするアキラの横でシエラが囁く。

「アキラ。あれ……」

壁のないビル。中には一定の間隔で太い角柱が立っているだけだ。そのうちの一本、正面奥の柱を少女は指した。夜景をバックに影になって見える柱の根元には、目をこらすと誰かが寄りかかって座っているようである。がっくりとたれて見える頭に、アキラの血は一瞬で凍った。

「ミヤ！」

「助けてあげれば？」

悪意に満ちたマティルドの声は、どこから聞こえてくるのかよくわからない。

今もどこかの影から彼らを狙っているのだろう女のあからさまな罾に、アキラは判断を迷った。けれどすぐに、決然としたシエラの声が頭の中に送られてくる。

（行きましょう）

「シエラ」

ペンライトが照らす範囲は狭く、その光はあまりにも微弱だ。アキラは細い光が震えているのに気づいて、少女を振り返る。もしかしたら恐怖を感じているのかもしれない、と心配した彼女はしかし、表情を見るだに怒りと緊張で震えているようだった。

大きな双眸を見返したアキラは、左手をシエラに差しだす。

「悪い。……行こう」

「ええ」

見え見えの罾だとしても、ミヤを解放しないことにはここに来た意味がない。アキラはしっかりとシエラの手を握りながら、正面の柱に向かって進みだした。

第八都市の街の灯が、人知れぬ衝突に淡い光を投げかけている。その中央では細い空塔が、夜景の中で青白く静謐な姿をさらしていた。

今は黒となっている鏡面体。その先にあるという虚都に、アキラは皮肉な思いを抱く。

「突然来やがって。なんでも勝手にできると思うなよ……」

彼の弦きが聞こえたのか、どこからか女の含み笑いが聞こえてきた。

「お前はまだシエラ・ハーディを信じているの？　嘘つきなお姫様を」

「そっちには関係ない」
管理者の娘であるというシエラへの揶揄は、悪意に満ちたものである。

十二人のプレイヤーのうちもつとも異質である少女は、繋いだ手

に力をこめた。

「マティルド・ウジエ。私に全てが継がれるだろうという、あなたの推測は間違っています」

「だからなに？ 見逃して欲しいのかしら。お姫様」

「いいえ」

深い黒の瞳は冷えて空塔を見すえる。

「好きになさい。こちらも退く気はありません。……あなたのやり方は目に余る」

シエラからの宣戦に、マティルドの笑声がこだました。自らの優位を疑ってもみない嘲笑は、数秒ごとに場所を変えながら二人を包みこむ。

アキラと目配せをした少女は、ペンライトの明かりを消した。闇に慣れつつある目には、近づいてくる外の光でだいたいが見通せる。柱の影に座っている人間が、見覚えのある制服を着ていることを見てとって、アキラはひとまず安心した。

柱まではもうあと数メートルだ。思わず足を速めようとした時、だが右側の柱の影から何かが飛び出してくる。

「つと……っ！」

男の腕めがけて、アキラは警棒を横薙ぎにする。しかし腕はそれをよけ、アキラの右膝をつかんだ。そのまま足を引っぱられるアキラに、横からシエラが抱きつく。

「アキラ！」

少しだけ体が浮き上がるような感覚。上への重力に支えられ、アキラは尻餅をつくことをまぬがれた。左足だけで踏み止まりながら警棒を振り下ろす。腕はけれど、とたんにはっと手を離して退いた。思わず舌打ちしそうになったアキラは、視界の隅に光るものをとらえてぎよっとする。抱きついたままのシエラをはがして前へ投げた。

長い三つ編の先端すれすれを、落下する刃物がつらぬいていく。すぐ近くからマティルドのくすくすと笑う声が聞こえた。アキラは警棒を構えながら叫ぶ。

「シェラ！ ミヤを頼む！」

彼女の背後を守って、アキラは警棒を構える。マティルドの姿は見えない。頭の奥が緊張で痛んだ。宙を漂っていた手が警棒の届く少し先で静止する。シェラの震える声が聞こえた。

「ア、アキラ……これ、ミヤさんじゃない……」

「え？」

思わず振り返ったアキラの目に、顔のないマネキンがうつる。

シェラのペンライトによって照らされたそれは、ミヤの制服を着せられただけのただの人形だった。マティルドの声が楽しげに謳う。
「本物はこつちよ」

床の終わるぎりぎりのところに積み上げられた資材。その上へと下りてきた女は、資材を覆うブルーシートに手をかけた。シートはまるで空気をはらんだかのようにふわりと浮き上がる。女はそれを無造作にビルの外へと投げ捨てた。

青白くぼんやりとした光が、鉄骨の山を照らし出す。下着姿のミヤは仰向けにその上へと寝かされていた。さかさに浮くマティルドは、右手を伸ばしてミヤの髪を手にとる。左手には大振りの肉斬り包丁が握られていた。

厚刃が鈍くきらめくのを見て、アキラはぞつと戦慄する。

「離せよ！」

「この人形がそんなに大切？」

「あたりまえだろ！」

ミヤとは十年もの間、一緒に育ってきたのだ。当然のように用事を頼まれたり、つきまとうてくことをうつとうしく思うこともあるが、そんなことは全部ささいなことだ。

アキラは床を蹴ってマティルドへと向かう。シェラがその腕に飛びついた。

走ってくる二人を見て、女は嫣然と口もとをほころばせる。

「それはあなたにとっても同じかしら？ お姫様」

「当然でしょう！」

「なら助けたら？」

マテイルドは、おもむろに右手をミヤの体の下へ差し入れた。細い体はそれだけで重さが軽減したかのようにたわんで持ち上げられる。

生温い風。資材の山をのぼりながら、アキラは大きく手を伸ばした。

「ミヤ！」

マテイルドは鼻で笑う。

あとわずか届かない距離。

そしてミヤの体は、ビルの外へと投げ捨てられた。

19・夜の終わり

視界から幼馴染の姿が失われる。

「――っ」

呆然としかけたアキラの腕を、シェラの足が蹴った。彼女はまるで飛び込みでもするように、落ちていくミヤを追って消える。

その衝撃で我に返ったアキラは、見えない向こうを指さした。

「ミヤと俺の、位置を入れ替える！」

ゆがむ世界。脳内に激痛が走った。思わず目を閉じたアキラは、刹那の浮遊感に奥歯を噛む。

足もとの床がなくなる。風が顔に吹きつける。静寂が消え、空気の音が耳を圧した。

――だがそれも、ほんの一瞬のことだ。

床の感触が戻ってくる。アキラは嫌な予感を覚え、後ろへ跳んだ。目を開けると顔のすれすれを包丁の刃が通りすぎていく。

「あつぶね！」

「スキルの無駄づかいをしているからよ」

「無駄じゃない」

態勢を完全に立て直す間もなく、背後から男の腕が襲いかかってきた。アキラは身をよじってその腕をよける。すれちがいざまに振り回した警棒は、偶然腕の中ほどに当たった。

しかしそれはたいした威力にならなかったようで、腕は宙を旋回して彼に向きなおる。

二対一となった状況。けれどそれも、シェラを信じればこそ持ちこたえるつもりがあった。アキラはマティルドと腕の両方から数歩距離を取る。

「位置の入れ替えは、たしかに初期状態じゃコンマ一秒も持続しな

いつて言われたけどな。……ゼロじゃないんだ」

そして、ほんの一瞬でも落下を止めることができるならば。

シエラはきつと間にあう。アキラはそう信じてマティルドをにらむ。

女は面白くもなさそうに唇をゆがめた。

「だから？　今は自分を心配した方がいいわ。まずはお前からよ？」

「それでシエラを排除したら次はこの都市を滅ぼすのか？　——お前は、第八都市を壊そうってやつに協力してるのかよ」

吐き捨てた言葉の半分は、マティルドではなく隠れたままの男へむけたものだ。

返事はない。だが息を飲む音が聞こえた気がした。アキラは警棒を握りなおす。

「知ってんのか？　この騒ぎが虚都から空塔を操作する権利を賭けたものだって。こんな女を勝たせたら都市が滅ぶぞ！　好きにさせていいのかよ！」

「ずいぶん言い草ね」

マティルドは高いヒールを鳴らして天井に降り立った。硬質な音を聞いて、アキラは気を引きしめる。

虚都から来た人間は、機敏な動きはできないと思っていた。だがそれは、彼らに上方への緩やかな重力がかかっているため、何かを蹴って移動すれば俊敏な攻撃も可能になるのだ。

アキラはマティルドを見ていてそれに気づいた。おそらくシエラもそうだろう。頭の中に伝わってくる声に、アキラは深く息を吐き出す。

男の腕は動かない。だが指先はかすかに震えていた。マティルドは不快げに片眉をあげる。

「動きなさい。お前も他の人間のようにになりたいの？」

びくりと男の腕が震えた。弾かれたように動き出すそれを、アキラは険しい目で見やる。今のやりとりだけで彼はおおよそを察した。「何人も首を絞めたのは、代行者を作るためか？」

「そうよ。本当はタイプEが欲しかったのだけれど。見つからないからDで妥協したの」

「……ふざけんなよ」

「ふざけてなどないけれど？ お前はどちらのタイプだったのかしら？」

過去形で語られた問い。女は言い終わると同時に天井を蹴った。同時に男の腕が跳ねあがる。

二方向からの攻勢に、アキラは考える間もなくコンクリートの上を転がった。向かってくる腕のすぐ下をくぐりぬけ、両手について跳ね起きる。

「だから、言いなりになってんなよ！」

目標を失った腕に向かつて警棒を振りぬく。今度の攻撃は、避けられることなく男の腕を強打した。

「ぎゃっ」

短い悲鳴が後ろから聞こえる。

それまではアキラの反撃を、さつとかわすことが多かった腕は、今は痛みのせいかもしれないと右に逃げようとしていた。彼はさらにそれを追って警棒を薙ぐ。風を切る音をさせ、銀色の棒は腕の中ほどを打ち払った。

またもや上がる悲鳴と鈍い動きに、アキラはベランダのことを思い出す。悲鳴の聞こえた方から計算して、彼はすばやく自分の体の角度を変えた。

——この腕は、おそらく使用者が目視で動かしているのだ。

だからこそ腕を見えないようにしてしまえば、コントロールはままならなくなる。

意図的にその状況を作ったアキラは、痛みのにたうつ腕へと、さらに警棒を振り下ろした。

骨の折れる音。嫌な感触が伝わって、アキラの顔は自然とひきつる。暗がりの中から大きな叫びがあがった。

「ぐああああああっ！」

男の絶叫を聞いてつい振り返りかけたアキラは、しかし正面に向きなおると警棒を構えた。床を蹴って向かってきたマティルドの刃をとっさに警棒で外に払う。

女の青い瞳が驚愕に染まった空隙。

止まっていられる時間はない。躊躇は敗北に繋がるだろう。

だからアキラはさらに一步踏み込むと、左手で作った拳を、迷わず女の顔に叩きこんだ。

マティルドは悲鳴をあげなかった。

天井近くまで浮き上がった彼女は、空いている方の手で鼻を押さえる。細い指の隙間から、憎悪に燃える目がアキラを射抜いた。

「この、クソガキが」

「……あんた、スガとは似たもの同士だな」

呼吸を整えるため挟んだ軽口は、相手になんの効果ももたらさなかった。マティルドは包丁を握り、身をひるがえす。暗がりの中へと走り去る女を、アキラは逃げたのかと一瞬思った。

しかしその考えはすぐに間違っていたとわかる。

闇の中から男の絶叫が聞こえる。尋常ではない悲鳴は、あきらかにそれまでのものとは異なっていた。目の前でのたうっていた腕が跡形もなく消える。

「……え、まさか」

当たって欲しくない予感ほど、おうおうにして当たる気がする。

まもなく闇の中から現れた女は、包丁を握る右腕を胸の前に漂わせながら、残る左手で頬の返り血を拭った。

「最初からこうしていればよかったのよ。代行者なんて不要だわ」

「……あとの成績に口スが出るんじゃないかなかったのかよ」

「多少はしかたないわね。シェラ・ハーディの方が優先事項だわ」

「うぜえ。粘着すぎ」

気分の悪さが胃の中にせりあがってくる。アキラは唾棄したい衝

動をこらえて、血濡れた包丁を見上げた。天井に立つ女の左手のひらに、青いコードが浮かび上がっているのがわかる。

マティルドは唇の両端をつりあげ、自分のコードを見つめた。

「さあ、そろそろ片づけてあげるわ。殺しはしない。お姫様にスキルが戻らないようにね」

包丁の切っ先が、アキラへと目標を定める。いつ向かってくるかわからない刃。その切っ先に意識を集中させながら、しかし沸き起こってくるものは恐れではなく強い怒りだ。

第八都市空塔を背にして立つ彼は、この都市に住む一人としてさかさまの女に対する。

「俺さ……今まであんたのこと、振り分けられた都市に帰れって思ってたけどさ、やっぱいい」

「屈する気になったということ？」

「まさか」

脳内を感じる熱はおさまっている。

もう一度スキルを使える余裕はあるだろうか。あるはずだ。現に相手はずっとスキルを使い続けている。チェンジリングが彼らのものより特異なスキルだろうと関係ない。

慣れと集中、そして確固たる意志。全て持っているはずだ。今この場を勝ち抜くくらいには。

アキラは空を切って警棒を払う。

「お前にはどこのシギルも渡さない。——俺が、ここで排除してやる」

肺の中の息を全て吐ききる。彼は静かに燃える目で女を見た。

上下反転した人間。別の世界で生きる女。美しいと、誰もが認めるであろう彼女の顔はその時、赤くゆがんで醜いものになっていた。マティルドは狂ったように哄笑する。

「ならお前から死ね！」

弾かれたように向かってくる腕。アキラは警棒を下ろした。背後から警告の声が飛ぶ。

「アキラっ！ 危ない！」

シエラの声に、今は振り返らない。

まっすぐ飛んでくる腕。アキラは左手を上げて女を指さす。

「お前と俺の、視界を入れ替える！」

スキルの発動を宣言する。眩暈が生まれ、見えている景色が変わる。

さかさまの世界。自分を見る自分。アキラは目を閉じる。そうして女の視界を頼りに、彼は包丁の刃をすれすれで避けた。左手でその腕をつかむ。

（シエラ！ 引きずりおろせ！）

戻ってきた少女が、それを聞いてくるりと体を回転させた。両足で思いきり床を蹴る。

細い手を伸ばし、必死の形相で飛びかかってくる少女。迫りくるその光景を見て、アキラはまるで自分がつかみかかられるような錯覚を覚えた。――だがこれはマティルドの視界だ。

アキラは二人に向かって走り出す。視界の中、駆けてくる自分がちらりと見えた。

しかしそれもすぐにシエラの手で遮られる。

「マティルドっ！」

「なんで見えないの……っ！ シエラ・ハーディ？ 離せ！」

「おとなしくしなさい！」

視界入れ替えの持続時間を、アキラは忘れてはいない。二人はもつれあい落ちてくる。

酔いそうになる視界を見ながら、彼は暴れる腕をつかんで二人の前へと立った。視界の中の少年は、女の手がきつく握る包丁を、その持ち主へと向ける。

（離れる）

少女の体が離れる。アキラは両目を薄く開いた。

狭く薄暗い視界。マティルドが見たものは、黒服の真ん中に刺さるうとする大振りの刃物だ。

女は快哉を叫ぶ。

「死ね！」

包丁は使用者の命じるままに前へと突き出された。鈍い光を放つ厚刃が、深々とマティルドの胸に食い込む。遅れてチェンジリングの効果が切れた。

「あ……？」

己の胸に刺さる刃物。それを見下ろした青い目が、理解できないと大きくまたたく。

アキラは青ざめた顔で彼女を見下ろした。

「二度と来るな」

生温い風が吹く。敗者へと送る宣告はたったそれだけだ。アキラは大きく息を吐く。

次の瞬間廃ビルには、女の絶叫が響き渡った。

短い衝突の後に残ったものは、包丁と床にしたった黒い血、そして灰色のスキルストーンだけだ。

それらを見たアキラは激しい疲労感を味わうと、シェラを振り返る。

「これであいつは権利剥奪か？」

「ええ。虚都に送還されたはずです」

「ミヤは？」

「下に寝かせてあります。一応ビニールシートをかけてきましたが

……」

「あー、制服回収しないとな」

今の状態でミヤが起きたならおかしいな誤解をされかねない。服の回収をシェラに頼もうとしたアキラは、けれど彼女が自分をきつくらんでいることに気づいた。

「……なんだよ」

「どうしてあんな危ないことをしたのですか」

「危ないって。そんな危なくもないだろ。視界の入れ替えは前にも試したことあったし」

「あんなぎりぎりまで引きつけて……刺されちゃったかもしれないじゃないですか！」

拳を震わせ訴える少女は、どうやら心配を通り越して憤っているらしい。アキラは内心あわてて言いにくろった。

「引きつけないと誤認させづらいだろ。包丁手放さそうだったし」

「最初から狙ってたっていうんですか？」

「あーまあ、半分くらいは」

「黒い服を着てきたのも？」

「マティルドはこっちで服買うようには思えなかったし」

薄暗いところで同じ色の服。おまけに激昂した状態で視界を入れ替えれば、誤認するかもしれないとは思ったのだ。だがここまでうまくいったのは、たんなる幸運と言っていいだろう。

ぬぐえない疲労感に肩をほぐしていたアキラは、ふとシエラを見てぎょっとした。大きな黒い瞳からは、今にも涙がこぼれ落ちそうになっている。

「な、なんだよ」

「……も、もう少し、自分を大事にしてください」

「って言われても」

「私が原因なのはわかってます。でも」

シエラはそこで唇をぎゅっと噛んだ。普段から頼りなげな姿が、表情のせいかよりいっそうしおれて見える。

アキラは冗談で場をとりつくるおうかと考えて、だがそれを思いなおした。

今日ずっと考えていたことを、自らの中で整理する。彼は頭をかきつつ、正面から少女に向きなおった。

「これは俺の考えだから、シエラは気に病む必要はないんだけどさ」

「……はい」

「俺に何かあっても、スキルがシエラに戻るっていうなら、俺は、いざっていう時に捨て石になってもいいと思うんだ」

「アキラ、それは！」

「まあ聞けって」

食いついてこようとする少女を、アキラは手で留める。

「俺が無事でも、変なやつに都市を握られたら意味ないだろ。だったら相打ちでもなんでもそいつを排除して、あとは次の代行者に任せればいい。……そりゃ、こんなの巻き込まれて終わるのは嫌だけどさ。事情が事情だろ。どうしても嫌ってほどじゃない」

自分が、全てを背負えるようなヒーローではないとわかっている。だがそれでも背負わなければならないなら、いざという時の優先順位は見失わないでいたい。

その結果、「瀬戸アキラ」が失われるのだとしても、それは無駄な喪失ではないだろう。むしろ平凡な一高校生の選択としては最善のはずだ。

冗談や投げやりで言っているわけではない。

シエラにもそれは伝わったのか、長い沈黙の後、彼女は溜息をついた。

「私とあなたでは、生きる世界も、生死の常識も、考え方も違うことはわかっています」

「うん？」

「それでも私は……代行者は、あなたがいいです」

後ろから突き飛ばされるような感覚。思わず彼が目丸くすると、シエラはどこか傷ついたような表情で顔をそむけた。そのまま目元を押さえて背を向けた少女を、アキラはあっけに取られて見上げる。泣いているのか怒っているのか紅潮している両耳。細い両肩が震えている。

その様子を心配するより先に——アキラは「かわいいな」とふと思った。

「……っ、もういいです！ 早くミヤさんの制服回収してください

「!」

「つて、俺が？」

「トークももう切りますからね！ 先行ってます！」

「あ」

シエラは真っ赤になった顔を隠してビルの外に消えた。

戻ってくる静寂。アキラは言いようのない気まずさを味わう。

「あー……トーク忘れてた」

よけいな雑念が伝わらないよう気を引きしめていたのだが、どうやら最後の最後で失敗してしまったらしい。

そのせいで取り残されることになったアキラは、激しい虚脱感に襲われながら、一人マネキンの服を脱がす作業に取りかかったのだ。
った。

20・迷子の記憶

「——とはたして、なんであると思う?。」

男の声での問い。それは、今のアキラにはどうしても意味がわからない。

何を問われているかがわからないのだ。ただ、夢の中の彼は、その質問の意味が理解できているようであった。白い光の眩しさに目を閉じたアキラは、仰臥したまま男に返す。

「俺にはわからない」

「だが君は、知っているはずだ」

「知ってるけど、わからないんだ」

そう返すしかない。彼は望まれるような答を持っていないのだ。

男は、小さな失望のため息をこぼす。

「私はもうすぐ、それを知ることになるだろう」

にじむ哀切は、先の時間に向けてのものなのだろうか。

アキラは男のために何かを返そうとして、だが結局自分のことだけを口にした。

「俺は、あなたが知ってることを探しに行く」

そのために、今ここにいる。それを無意味とは思わない。もちろん、男を批難するつもりもなかった。

白。

満ちている光に、アキラは兄の記憶を思い出す。懐かしい夢。繋いだ手の感触をまだ覚えている。

「俺は——」

後悔はない。

男の声が囁くように「好きにきなさい」と呟いた。

「……っ」

夢の中から跳ね起きる。

そうして辺りを見回したアキラは、おぼろげな現実との境界に、自分がどこにいるのかわからぬ不安を味わった。

白い空は見えない。今はまだ真夜中だ。天井ではシエラが布団にくるまって眠っている。

アキラは肩で息をつくとき、枕元の時計で日時を確かめた。

「なんだ……まだ今日か」

おぼけビルでマティルドと戦ってから、時刻はほんの三時間弱しか経っていない。

あれから気絶したミヤを近くの公園で起こし、女子寮に届けた彼は、部屋に戻るとあらがえぬ疲労にベッドへ倒れこんだのだ。

布団がかけられているのはシエラのおかげだろう。アキラは、きちんとシャワーを浴びて着替えたらしき少女を見上げた。安らかな寝息を立てている彼女は、マティルドに啖呵を切っていた時から別人のようにあどけなく、年相応に見える。

——起きている時の彼女はできるだけ、強く在ろうと意識しているのだろう。

管理者の娘ということで、シエラには他のプレイヤーよりもずっと負担がかかっているはずだ。だが彼女は、ゲームに関してアキラに弱音を吐くことはしなかった。理不尽な敵意をむけられても、毅然とした態度を崩さず、他のプレイヤーに向き合ってきたのだ。

それは、彼女自身の性格のためもあるのだろうが、きっとそれだけではない。そもそもシエラは、システム管理権が欲しいわけではないのだ。姉の治療法を調べたいだけなら、空塔攻略までする必要はない。他のプレイヤーにもそう説いて不戦を結ばいいだけだ。

にもかかわらず、彼女は当然の目的のように、ゲームを遂行しようとする。そうする理由の一つに、アキラへの誠意が含まれている

ことを、彼は気づいていた。

「まったく、損しそうな性格だよな」

苦笑しながらアキラは、彼女を起こさぬよう風呂へと向かう。帰ってすぐ寝てしまったが、明日も学校はあるのだ。汗だけでも落としておきたい。

着替えとタオルを手にユニットバスへと入った彼は、普段よりも温度を高く設定して、シャワーを浴び始めた。体のあちこちがひりひりするのは、おぼけビルでこすったりしたのだろう。体温が上がるに比例して、寝起きでぼんやりしていた頭が、少しずつクリアになつていく気がした。

だが翌日のことを考えると、いささか頭痛を覚える。

「ニュースにでもなったら面倒だな……。ミヤが黙って引き下がるとは思えないし」

マテイルドとの対戦においては、相手方の代行者に犠牲が出てしまっている。

アキラたちがおぼけビルにいたという痕跡は、できうる限り消しきてはいるが、なにかのきっかけで関係を疑われないとも言えない。第一、ミヤへは「なんでもないから、黙っとけ」と強引に言い含めて別れてきたのだ。まず明日になつたら間違いなく問い詰められる。アキラは髪を洗いながら、面倒くささに顔をしかめた。

「ま、やるしかねえけど」

数日後には空塔に上らなければならないのだ。後顧の憂いはできるだけ取り除いておきたい。

そう思いながらアキラは——このゲームが終わったなら、シエラはどうするのだろうか、ふと考えた。

治療法について調べたことを持ち帰るのだから、当然虚都に帰るのだろう。

だがそれから先はどうなるのか。学校にも行っていないという彼女だ。きちんと支えてくれる人間はいるのだろうか。父との関係はどうなるのか。他のプレイヤーに恨まれたりはしないのか。

早々に退場させられたスガなどは、送還された虚都でシエラの動向をうかがっているかもしれない。その結果もし報復が行われたりなどしても、アキラにはもうどうすることもできないのだ。彼女に手は届かない。空を越えるすべを、彼は知らない。

刻々と色を変える鏡面体。明確な境界線について考え込んでいたアキラは、我に返ると濡れた頭を振る。

「とりあえず、今だ今」

あまり先のことまで考えてもしかたがない。

アキラは壁面パネルに手を伸ばすと、お湯を止める。

そうして浴室の天井を仰いだ彼は――白い電光を直視した。くらりと、軽いめまいが襲ってくる。

『好きにしなさい。それが君を救うと思うなら』

男の声。

聞いたはずもないそれに、だが記憶の底が妙にうずく。

「なんだ……？」

アキラは片手で顔を押さえて息をつめる。

だが、不可思議な既視感の正体をいくら探ろうとしても、その声の主が誰で、いつ会ったことがあるのか、まるで夢の中のことのように思い出せなかったのだ。

生誕祭初日を三日後に控え、夕暮れの街はどこもかしこも高揚した空気に包まれている。

空は澄んだ緑色。繁華街にあるほとんどの店には白い花々が飾りつけられ、生誕祭のちらしを配っているところも多かった。

午前中いっぱいクラスの準備に参加し、午後から空塔の様子を見に来たアキラは、街灯の柱によりかかって白い塔を見上げる。カイの話では、明日の朝から空塔見学のための整理券が配られるらしい。すでに何人か行列ができているのを見て、アキラは疲れた顔になっ

た。

「これ、どれだけ並ばなきゃだめなんだよ……」

「整理券もらえることになってよかったですね」

「まったくだ」

本来ならば激しい競争率を誇るという整理券は、カイの伝手で分けてもらえることになっている。そのカイ本人は学園祭の関係で今年は昼の回に参加するらしい。多くを聞かず便宜を図ってくれた友人にアキラは感謝した。

「空塔内部の情報ももらったけど、やっぱりわかんないことが多いよな」

「統制が厳しいそうですからね。最初のポートの場所がわかっただけでもすごいです」

「思ったんだけど、管理部の人間味方に引き込めれば楽勝じゃないか？」

「無理だと思いますよ。管理部職員はこんな話を信じはしないでしょうし、ゲームの性格から言ってもそれには制限がかかっている可能性があります」

「げ……そんななのか」

どうしたら管理部にまで制限がかけられるというのか。

しかし制限などなくても、彼らが子供の話を信じてくれるとは思わない。それくらいで聞いてくれるようなところなら、これ程嚴重で有名にはなっていないだろう。考え込むアキラに、シエラは微笑した。

「あくまで推測ですけどね。ただ人を味方につけるのは無理でも、内部端末に触れられれば情報が引き出せますから、それでなんとなるでしょう」

「それ、本当にできるのかよ。カイは絶対無理って言ってたぞ」「できますよ。私、そういうの得意なのです。知っているでしょう？」

アキラと同様街灯に寄りかかっている少女は、胸に抱えたノート

型の端末を指さす。それはここへ来る途中彼女の希望で買ったもので、かなり高機能なものであるらしい。アキラがスキルコントロールの練習などを考えている一方、シェラもシェラで攻略準備をするようだ。彼女は先ほどまで初期設定を散々いじっていた。

空塔の入り口を確認したアキラは、街灯を離れアーケードへと向かう。その途中、道路の脇には緑色のワゴンが停まっていた。小さな看板を出している車の前で、アキラは足を止める。

「お」

「どうかしましたか」

「パン食べる？」

たまに学校の敷地内にもやってくるそれは、焼き立てパンの移動販売だ。アキラが手招くと、シェラは興味津々の顔で寄ってきた。さかさまの彼女に、アキラはメニューを兼ねた看板を示す。

「焼きたてメロンパン」

「焼きたて！」

「あ、でもたしか朝もメロンパン食ってたよな。なんか別のものにするか」

あつさりと意見をひるがえして歩き出そうとしたアキラは、後ろ髪を引っ張られて立ち止まった。見上げるとシェラが必死な顔で彼の髪をつかんでいる。

「いや……そんな一日に何個も食うもんじゃないだろ」

「けど、焼きたてですよ！」

「なんでそんなメロンパンに執着してるんだよ！」

アキラは思わず呆れ声をあげてしまったが、通りすがりの若い女に異様なものを見る目を向けられ閉口した。これ以上独り言をつぶやく人間にならないよう、苦い顔で注文する。

「焼きたてメロンパン二つで」

いい匂いのする紙袋を受け取った瞬間、背後でうれしそうな声が上がったのは気のせいではないだろう。アキラは人通りの多い場所

を離れ、広い街路のベンチに座る。自分の分を一つ取ると、残りを袋ごとシエラに手渡した。少女は目を輝かせて茶色い紙袋を受け取る。

「あたたかいです!」

「そりゃ焼きたてだしな。冷める前に食べるよ」

「綿菓子みたいにふわふわ! でも外はさくさくですよ!」

「……お前、何しにこっちに来てるんだよ。メロンパン食べにか?」
最初に食べやすそうだからと選んだものが、ここまで気に入らると思わなかった。端末をベンチに置いたシエラは、幸せそうな笑顔でメロンパンに口をつけている。

アキラはその様子に内心ほっと安心した。物憂げな表情をされるよりも、嬉しそうな方がずっといい。シエラは彼の視線に気づくと目をまたたかせる。

「アキラ?」

「いや。おいしそうに食べるなーって」

早々に食べ終えたアキラは手を払った。あらためて少女を見ると彼女は澄んだ目で都市の街並みや行きかう人々を眺めている。大きな黒い双眸にはこの時、アキラの見間違いでなければ、静かな感動がたゆたっていた。少女は彼を見上げて美しく微笑む。

「アキラ、おいしいってすごいことですよ」

「そりゃよかった」

「私、この世界に来てよかったです」

目を閉じたシエラは歌の一節を口ずさむ。それは日常の幸せを謳う二十ナ最後の曲だった。

21・開示

住宅街へと向かうエリア道は、生誕祭を目前に控えていてもいつもと変わらぬ様相のままだ。

何ものからも取り残されているかのような無音が、整然とした風景を縁取っている。広い車道を通るものはなく、人の姿もまた、長く伸びていく歩道のどこにも見えなかった。

寮へと帰るアキラは薄青紫の空を仰ぐ。彼の肩につかまるシエラは、イヤホンを片耳に差し込みながら、周囲の景色を懐かしそうに見つめていた。その意味に気づいたアキラは得心する。

「そういやここだっけか。お前が降ってきたのって」

「降ってきたって……まあそうですね」

「なんかすげー昔みたいに感じる。まだ何日も経ってないんだよね」
それだけの間に変わってしまったものを思っ、アキラは苦笑いした。その時背後から軽い足音が駆けてくる。

「アキラくん！ みつけた！」

「げ……っ、ミヤ……」

反射的に首をすくめてしまったのは、午後の準備に参加しなかったと、怒られる気がしたからだ。だがこれに関しては、よく考えればミヤには断っていたことである。もっとも彼女からすれば「机に置手紙を貼っていくのは、断ったうちに入らない」ということなのかもしれないが。

アキラは一瞬逃走を考えかけたが、ここで走るとシエラも置き去りになってしまう。覚悟を決めると苦い顔で幼馴染を待った。

息せき切って走ってきた少女は、アキラの前で急ブレーキをかけると、残っていた勢いのまま彼の両肩を掴む。

「ア、アキラくん！」

「……なんだよ」

「説明して」

端的な言葉は、実際もつともな要求だ。アキラは昨日のことについて、まだミヤに何も説明していない。彼女が生誕祭準備で忙しいのいいことに、適当にはぐらかしたままなのだ。

今日もどうせ彼女は、門限近くまで学校にいるのだろうと踏んでいた。そうして弁解を後回しにしようとしていたアキラは、しかし結局は希望に反して捕捉されてしまっている。

色々と手遅れ感を感じて、彼は歩道にあるベンチを指さした。

「ま、とりあえず座れよ。お前、倒れそう」

「ず、ずっと走ってきて……」

「普段ポートでばっか移動してるからだ」

ミヤは素直にベンチへ移動すると、通学バッグから水のボトルを取り出した。彼女がそれを飲んで一息つく間、アキラは空を仰ぐ。今日の色は薄い青紫だ。明度が落ちているのは夕暮れが近いからだろう。白い空などめったに見られない。

宙を漂うシエラが、気づかうように彼を見つめた。

「大丈夫ですか？」

「平気平気」

「アキラくん？」

空にむかつて独り言を吐く彼に、ミヤは不安げな目を向ける。二人の少女から同時に心配を含んだ視線を投げかけられ、アキラはまるで正気を疑われているような、釈然としない思いを味わった。彼は顔の前で軽く手を振ると、ミヤに向きなおる。

「あー、昨日のこと？ だろ？」

「そうだけど……。アキラくん、どうして逃げるの？ 助けてくれたんでしょ？」

「助けたなんておおげさなもんじゃないって。公園でお前が寝てるの見たから、起こしただけだろ」

「なんでわたしに嘘つくの？」

即座に返された問いには、とがめるような響きは含まれていなかった。ただ純粹に不思議でしかたないというもので——そのことがかえって、アキラにはこたえた。

黙ってしまった彼を、ミヤはまっすぐに見上げる。

「わたし、学校の中で声かけられたよ。『外で子供が転んで泣いてるから、治療シート持ってないか』って。それで、その人について……あとは覚えてない。でも公園になんて行かなかった。わたし、どうなったの？」

「何もされてない。気絶させられてただけだ」

「アキラくん、知ってること教えて」

彼女の目は真摯だ。

昔子供だったころ、よく「どうして？」と聞かれたことを、アキラは思い出す。

今でこそ彼をたしなめがちなミヤは、かつては彼の後をよくついて回る、疑問屋な子供だったのだ。だからアキラは、中学生になるまで彼女を妹のように思っていた。

彼の中のミヤが妹ではなくなったのは、彼女が明るい性格と愛らしい容姿で、周囲から注目を浴び始めてからのことだ。そのころから感じていた距離は、けれどミヤにとっては初めから存在しないものだったのだろう。腐れ縁がここまで続いたのは、クラス分けなどの妙を除けば、彼女が変わらぬ態度で彼に接してきたからだ。少なくともアキラは、自分の方から彼女との関係を保とうとはしてこなかった。

自分にむけられるその親しさを、わずらわしいと思っていたことは確かだ。

だが今アキラはそれを、ありがたいとも思う。彼女との間にある固い信頼は、なかば以上彼女が築いてきてくれたものだからだ。アキラはもう一度空を見上げると、そこに漂う少女に問うた。

「これ、別の人間に事情話したらペナルティとかあるのか？」

「それは……ないと思いますが」

「ならいいか。いいよな？」

「アキラくん、さつきからどうしたの？」

ミヤはいぶかしげに首を傾げたが、シエラの方は黙って頷いた。契約者の了承を得て、アキラは幼馴染を見下ろす。緊張はない。気負いも特には感じていなかった。

「どこから話すかな……。最初から順番でいいか」

「アキラくん？」

「まあちよつと聞けよ。本当の話なんだからさ」

落ち着いた彼の声音に、ミヤもなにかを感じたらしい。すつと居住まいを正した。

アキラはもう一度空を見上げる。あの日、降っていた予定外の霧雨が、脳裏で鮮やかによみがえった。

「実はお前に変な杖もらった日のことなんだけど――」

まるで唐突だったシエラとの出会い。

アキラはそこから、今日までのことを一つずつミヤに話していた。

他の人間が相手であれば「荒唐無稽で信じられない」と言い捨てられただろう。

だがミヤは、全てを聞き終わるとあつさりうなずいた。

「そつか……大変だったね、アキラくん」

「そ。だからまだこれからも大変なんだよ。って飲み込み早すぎるだろ！」

「アキラくんが嘘ついてるかどうかわからない、すぐわかるよ」

「いや、そりゃそうだろうけど。お前、懐大きいな」

「そりゃおつきいよ！ 毎日牛乳飲んでるしね！」

「胸には反映されてないけどな」

言った瞬間、激しく膝上を蹴られた。シエラには耳をつねられる。

一方通行でしか見えていないはずの二人に連携攻撃を受け、アキラは無駄口をつつしむことにした。

ミヤはなにもなかったかのように、話を続ける。

「それで、その虚都から来たって女の子、今もいるの？」

「いるよ。すぐそこにいる」

「わたしには絶対見えない？」

「見えない。プレイヤーが代行者でなきゃな」

言いながらアキラは空へと手を伸ばす。シエラはその手を伝うと、アキラのすぐ傍まで下りてきた。長い黒髪が彼の頬をくすぐる。アキラはふとあることを思い出すと、ミヤの脇に置かれている水のボトルを指さした。

「シエラ、それ持ってみろ」

「はい」

さかさまの少女はアキラの腕を軽く押すと、その反動でベンチへとむかう。白い指がボトルに触れ、くびれた中ほどを掴んだ。ミヤが注目する中、シエラはひょいとボトルを胸に抱えこむ。

「え……？ 消えた？ なんて？」

「シエラが持ったから。なくなっちゃいない。こいつに属したものは、普通の人間には見えなくなるんだ」

アキラは親指で隣の少女を指さす。シエラは苦笑すると、ボトルを元の場所に返した。

今度は突然出現して見えたのだろうそれに、ミヤは大きな目をまんまるにする。

「え、すごい。なにかに見えそう」

「俺みたいなこと言うな。手品はやらないからな」

ボトルを手にとったミヤは、不思議そうにそれをひっくり返していたが、ひとまず納得したらしい。「へー、そうかあ」とのんびりした感想を述べた。

「それでアキラくんは、その子と一緒に住んでるの？ こないだ買い物したのってそれだよな」

「……そりゃ俺にしか見えないんだからな。じゃないと面倒見られないだろ」

「ふーん」

「なんだよ」

声音に棘が感じられるのは気のせいだろうか。

探るような目で見上げてくる彼女の思考は、いまいち不透明だ。

アキラは若干の居心地悪さを感じたが、いまさら嘘をつく意味はない。

やってきた微妙な沈黙に、アキラはため息を飲み込んで空を見上げた。頭上に戻っていたシエラは、彼を見てやわらかく微笑む。アキラはつられて微笑した。

「ね、アキラくん」

「ん？」

ミヤの呼ぶ声に、アキラはあわてて表情を戻す。

続いていく青信号を眺める彼女は、いつになく不安げな目をしていた。

「生誕祭にその子と空塔にのぼるんだよね？ 大丈夫？」

「たぶんなんとなかなるだろ。塔内の移動はポートだっていうし。階段じゃなくてよかった」

「全部階段だったら、空塔管理部の人はみんなマッチョだよ。って、そういう話がしたいんじゃないかって！」

彼女は大きく首を横に振った。

「アキラくんは、それが終わったら虚都にいつてみようとか、ひよっとして思ってる？」

「へ？」

——そんなことを考えたことはない。

ただ、「シエラを一人で帰すのは不安だ」とは思った。それだけだ。だからと言って自分が虚都に行こうなどとは考えもしなかったし、行けるかどうかさえわからない。なぜそのようなことを聞かれるのか、あっけにとられてしまったアキラに、ミヤは申し訳なさそ

うな顔を見せた。

「ごめんね。でもアキラくん、よく空を見上げてるでしょ」

「そりゃ見てるけど……別に」

「それ、どうして見てるか、自分で気づいてる？」

ミヤの声は、乾いた歩道の上を砂に混じって流れていくようだ。

普段の彼女のものとは違う大人びた響きに、アキラは思わず息を飲む。

「アキラくん、今でもお兄さんを探してるよね。だから空を見上げてる。鏡面体の向こうになにか見えないかって」

「ミヤ」

「覚えてないかな。初等部のころのこと。アキラくん、言ってたよ。『お兄ちゃんは、違う世界にいったんだ』って」

白い空。

隣には兄がいて、一緒に眩しく光る空を見上げている。

アキラは、その手を握っている。兄の声が聞こえる。

「——考えてたんだ。それで決めた。やっぱり行こうって」

「どこにいくの？」

「違うところ。お前も行く？」

「いきたいけど。みんながこまらないかな」

二人ともがいなくなってしまったなら、きっと皆が困る。母は泣いてしまうかもしれない。

兄はそれを聞いて笑った。

「そうだよな。じゃあお前は留守番してろよ」

「わかった」

「父さんの言うこと聞けよ。母さんを守れよ」

「うん」

「帰ってきたら色々話してやるから」

一度きつく握られた手が、そうして離される。

兄は笑っていた。

そして、行ってしまった。

「アキラ」

白い手が、彼の肩を揺さぶる。

意識のゆるやかな乖離。横を見た彼は、そこに契約者である少女を見た。

急速に現実が戻ってくる。アキラは正面の幼馴染へと視線を戻す。座ったままのミヤは、少しだけ淋しそうに微笑っていた。

「アキラくん。——終わっても、ここにいてね」

伸ばされる幼馴染の手に、子供だった自分の手が重なって見える。アキラはその手のひらをじっと見つめると、「……行くわけねえだろ」と呟いた。

22・空問答

生誕祭当日になれば空塔に入れるという話はあるが、裏を返せばそれは「準備にかかる十分な時間がない」ということだ。

もちろん、シエラははっきりと言わないが、早く攻略した方が評価はいいだろう。だからその点から言えば、変に躊躇する期間がなく、幸運ではある。

アキラはそんなことを思いながら、ベッドの上にあぐらをかいて翌日に迫った攻略用の持ち物を揃えていった。

寮の自室には、他にもう一人がいるだけだ。天井に寝そべっている少女は、小型端末を開いて何かを準備しているらしい。アキラは、しばらく真上にいる少女を眺めていたが、不意にあることを思いつきその背を指さした。

「シエラと俺の、かかる重力を入れ替える」

「——え？」

唐突な宣言に、シエラは間の抜けた声をあげる。

しかしそれは直後、悲鳴に変わった。天井から落下してきた彼女を、逆に宙へと浮いたアキラは受け止める。彼は自分の足下を見て感嘆の声を上げた。

「すげえ、浮いてる」

「ア、アキラ、戻してください」

「そのうち切れるだろ」

アキラは上へ、シエラは下へ、普段とは逆にかかる重力は、しかしすぐに気分の悪さをもたらした。ぐらぐらとめまいを覚えて、彼は口元を押さえたくなる。

「これ、どうやって切るんだ……」

「解除って言うてください。スイッチ切るみたいなイメージで」

「解除」

「きゃあああ」

言うと同時にアキラの体は、軽い音を立てベッドの上に落ちた。シエラがまた悲鳴を上げたのは、天井に落ちたからではなく、アキラが彼女を抱えたままだったからだろう。それに気づいて少女を解放すると、彼女はよたよたと天井に戻っていった。

「あの、スキルテストする時は一声かけてくれると嬉しいです……」

「悪い悪い。ちょっとどうなるかと思つて。でもこれで空塔の外壁上れないか？ 俺だったらシエラ持ち上げられるけど」

「途中で時間切れになつて落下すると思います」

「……ミンチだな」

想像したくない結果を想像して、アキラは反省した。

ここ数日ためにスキルの訓練をしているのだが、それが実を結んでいるのかどうか、いまいち分からない。回数をこなしているせいか、ひどい頭痛でしばらく次が使えない、などということとはなくなったが、肝心のアイデアの方はさっぱりだ。チェンジリングで重要なのは、どちらかというと「どのようにつかう」の発想だろう。アキラは乱れてしまった髪を、さらに手でかきまわす。

「できるだけ効率よく行きたいんだよな」

「転移ポートを直接最上層に出るよう、書き換えられればいいのですが」

「さすがに無理だろ。あれの設定つて、ハード側も関係してるらしいし」

「急に工事を始めたら、さすがに怪しまれますね」

そんな作業を見逃してもらえるほどなら、とつくに最上層に入れている気もする。彼が「あーあ」と大きく背伸びをした時、廊下からノックの音がした。

「アキラいる？ 整理券持ってきたんだけど」

「お、いるいる。サンクス」

ベッドを飛び降りてドアを開けると、まだ制服のカイが入ってくる。「まずこれ」と整理券を差し出されたアキラは、丁重にその一

枚を受け取った。

「助かった。手に入れるの大変だったろ？ 悪い」

「いいよ。仲間に融通してもらったただけだし、普段はおれが融通する方だから」

「ほんと感謝。あとでなんか返す」

「いいって」

アキラが机の前の椅子を指すと、カイはそこに座った。天井のシエラが見えぬ彼は、机の上のミニチュアを眺める。

「また増えてない？」

「減ってたら困るだろ」

「大学出る頃には、机のスペース残ってないね」

「それはそれでよし」

もともとアキラは、部屋で勉強をすることなどほとんどない。机はいわば作業机と同義だ。

彼が備え付けの小さな冷蔵庫からジュースを取り出して投げると、カイは礼を言つてそれを受け取った。

「でさ、アキラ」

「ん」

「何してるか聞いていい？」

「……ぐ」

聞かれるのではないかと思つたが、実際急に問われると言葉につまる。アキラは、「模型を作りたいから」という言い訳を押し通そうかと一瞬考えた。しかし友人の真剣な表情を見て、すぐにそれを感じ直す。

「悪い。今は言えない」

「まさか空塔でテロするとか」

「そのつもりはない。けど」

騒ぎにはなるかもしれない、との言葉をアキラは飲み込んだ。カイは軽く眉を上げる。

——ミヤに話してこの友人に話さないのは、一重にカイが空塔に

なみなみならぬ情熱を抱いているからだ。

そんな相手に「空塔のシステム干渉権を賭けて勝負をしている」などと言えば、怒りに目の色を変えてしまっただろうし、下手をすれば自分も行くなどと言い出しかねない。

だが目的や結果がどうあれ、空塔内で騒ぎを起こしたとなれば、それは重大な犯罪行為だ。そうなればただでさえ難関である管理部への門戸が、完全に閉ざされることは目に見えている。カイが昔から、地道な努力を重ねて管理部を目指していると知っているアキラは、どうしてもこの友人を巻き込む気にはなれなかった。

全てを伝えることはできない。

アキラは慎重に言葉を探す。ブラインドの隙間から、夜の中に浮かぶ白い塔が見えた。

「俺もさ……空塔を守りたいんだよ」

「空塔を？」

「そりやお前ほどじゃないけどさ、こうなって気づいた。やっぱり空塔は特別なんだって」

都市の全天候を司る塔。それは誰によっても支配されるべきではない、彼ら都市住民の誇りだ。

今まではその存在を当然のものと思っていたアキラも、このゲームに参加して以来、そう強く思うようになった。よその人間に、空塔を好きにさせてはならない。もしそのようなことになれば、都市自体を蹂躪されていると同じことだと。

アキラは、自分よりもずっと都市の歴史に詳しい友人に尋ねてみる。

「あのさ、空塔が誤作動起こしたこととかってあるか？」

「空塔が？ あるよ。もう何年も前のことだけど。ほら、システム異常でひどい嵐が続いたやつ。覚えてない？ 都市機能が完全に麻痺してさ」

「覚えてない。そんなことあったか？」

「あれ。アキラ寝てた？ 初等部のころなんだけどさ。記録だと収束まで十五日くらいかかってる。地下にあつた設備とかが全部水没して駄目になつてさ。第七都市と第九都市から支援受けて、なんとか持ち直したんだ」

「うへえ。そりゃひどい」

システム異常でそれだけの大災害になるなら、意図的に都市を潰そうと思えば、やはり不可能なことではないのだろう。アキラはひやりとするものを感じて首をすくめた。天井を仰ぐと、シエラが困つたような表情を見せている。

カイはポケットから一枚の畳んだ紙を取り出した。

「これ」

「ん？」

受け取つて広げてみると、それはなにかのフォーラムのログを出したもののようだった。一番上の記事内容に目をとめたアキラは、思わず絶句する。

「え、これ……いつの話だ？」

「昨日」

書かれている内容は第二都市についてのものだ。昨日の晩、不可思議な事件が発生したという話。それは、書かれていることをそのままに信じるなら、空塔内に勤める職員が数百人、突然に眠りこんでしまったというものだった。

彼らは命に別状はないそうだが、そのまま約三時間何をしても起きなかつたらしい。

この件によつて空塔の機能は一時的に狂い、都市には予定外の豪雨によつて大きな混乱が起きた。

——だがここに書かれている話では、その時空塔の最上層付近が白く発光したのだという。

アキラは顔を上げると、カイを見た。

「これって公式ニュースか？」

「違う。空塔愛好家のサークルのもの。ただ豪雨の話は本当だ。生

誕祭直前だからニュースが目立ってないってのもあるけど、第二都市が報道規制を敷いてるらしい。——職員が昏睡したっていうのと空塔の発光は、第二都市の会員からのリーク。管理部所属じゃないけど、空塔に近い筋からの情報」

「まじかよ……」

アキラはその紙がシエラにも見えるように、広げてベッドの上に置く。

端末を抱えて下りてきた少女は、ざっと目を通すと蒼ざめた顔で「シギルが確保されたのでしょうね」と呟いた。

どのようなプレイヤーと代行者が、早々にゲームをクリアしたのか。アキラは焦燥を覚えて奥歯を噛みしめる。

カイはジュースのボトルを手に立ち上がった。

「言えないっていうならいいんだ。アキラのことは信用してるしさ。ただなんかおかしいことが起きてるっていうのは、おれも薄々わかる。協力できることがあるなら言って欲しい」

「……ああ」

「用はそれだけ」

苦笑してドアへとむかう友人に、アキラは「部屋まで送る」と言って廊下に出た。留守番のシエラが、空中から手を振ってくる。

翌日の準備で忙しいのか、寮の廊下には他に人の姿はない。

アキラは友人と並んで歩きながら、廊下の突き当たりを示した。

そこは非常階段へと繋がるドアがあり、二人はそのドアを開けて踊り場に出る。外は既に暗くなっており、地上の白い街灯が点々と敷地の奥にまで続いているのが見通せた。

錆びた鉄柵に寄りかかりながら、アキラは黒い空を見上げる。

「詳しいことは悪いけど今は話せない。——ただ、頼みはあるんだ」

「なに？」

「もし明日俺に何かあったらさ、ミヤに事情聞いて、俺の友達の助けになってやってほしい」

「友達？ ミヤも知ってる人間？」

「見えてないけどな」

怪訝そうな顔になるカイに、アキラは肩をすくめてみせる。

実際そうとしか今は言えないのだ。だがもし自分が駄目だったのなら、誰かに後を継いでシエラを助けてもらいたい。それくらいの保険をかけてもいいだろう。シエラいわく、ミヤは適応者ではないそうだが、カイや彼女はアキラよりも広い交友関係を持っているのだ。きつと次の代行者を見つける助けになってくれる。

シエラの前でこのような頼みをすれば、彼女はむきになって「次のことなど考えないでください！」と訴えてくるだろう。だからこそ部屋を出てきたアキラは、苦笑して幼馴染に向かう。

「こんなことしか言えなくて悪いんだけど、頼むよ」

無茶を言っている自覚はある。だがカイは、物言いたげな表情ながらもうなずいた。

「わかった」

「ほんと悪い。あ、お礼に俺のミニチュア好きなの持ってっていいから」

「空塔のはもう持つてるからいい。ってかおれ、別にミニチュア好きじゃ——」

カイの言葉は不自然に途切れた。大きく見開いた目がアキラの頭上を捉える。

何を見ているのかと振り返りかけた時、アキラの後頭部に誰かの手が触れた。男の声が響く。

「ターゲット、セト・アキラ。アナリゼーション」

「——って、おい！」

プレイヤーの使うコマンド発声。アキラは反射的に拳を上げながら振り返った。そこに浮かんでいた男は、しかし殴られる前に、彼の手の届かぬ位置まで上昇する。

灰色のスーツを着た二十代後半と思しき男。さかさまに浮いていることを除けば、たんなるビジネスマンにしか見えない人物は、軽

く驚いた目でアキラを見上げた。

「タイプEか……なるほど」

「またか！ 下りてこい！」

今まで二人も相手にしてきたのだ。もう来ないと信じていたわけではないが、正直まだ来るのかと思った。

とりあえず相手を叩き落そうと指を上げたアキラに、だがカイの強張った声が聞こえる。

「なんだあいつ……幽霊？」

「カイ、見えるのか！？」

「なるほど、その彼も適応者か」

男の相槌は、アキラに新たな戦慄を呼び起こした。

——代行者ではない人間に見える虚都人は、未契約のプレイヤーだけだ。

全体の一割にも満たないという適応者。代行者となりうる彼らは、プレイヤーにとって貴重な人材だろう。アキラはマティルドの犠牲になった青年を思い出す。カイをかばうように、一步前へ出た。

「なにしに来た……話し合いか？」

「たんなる事前調査だ。君は既に二人のプレイヤーを屠っている。正面から挑むのは分が悪い」

「お前もシェラの敵か」

つくづく他のプレイヤーの思い込みが腹立たしい。

アキラは内心うんざりして、上空の男を睨んだ。表面的には敵意を感じさせない男は、あつさりとかぶりを振る。

「そのようににらまれるのは心外だ。あくまでこれはゲームで、私はハーディ嬢を痛めつけたいわけではない」

「そうかよ。痛めつける気満々の変態が、今まで二人ほど来たけどな」

「彼らは近くのことしか見ていない。ビジネスとはもっと先までを見通して行わなければ」

淡々とした受け答えは、スガヤマティルドと比べればはるかに冷

静なものだ。服装からの第一印象を裏切らない相手に、けれどアキラは少しの親しみも覚えなかった。

「痛めつけたいわけじゃないなら、不戦でも結ばうっていうのか？」

「そのつもりもない。気づいていないのかもしれないが、君たちに勝つことはそう難しいことではないのだ。一度契約を結んだ代行者は、その死まで変更はできない。君が他都市に出られない以上、この都市のシギルを私が取ってしまうえば、勝敗はつく」

「げ……」

——十六歳のアキラには、出都許可が下りない。

それは最初にシエラへと断っていたことではあるが、あくまでも治療法を調べるための手段として、障害になるかもしれないと思っただけなのだ。それがゲーム攻略に支障をきたすとまでは思わなかった。

顔色をなくすアキラを、男はじつと観察するかのように眺める。

「まあ、それには私にも代行者が必要だ。加えて——本当にそれでいいのかとも迷っている」

男の低い声には目立ったゆらぎはなかった。だが、わずかな逡巡は感じられる。

アキラは鏡面体に落ちていきそうなプレイヤーを、顔をしかめて見据えた。

「本当にそれで？　どういうことだよ」

「このゲームの正解とはなにか、だ」

「正解って。割り振られた都市を攻略しろってやつだろ」

「そうだろうか。本当にそれだけだろうか」

宙に立つ男の言葉は、その足場と同じくあやふやだ。

アキラは、背後の友人がどんな顔をしているか振り返りたく思ったが、男から目を離すことはできなかった。スーツ姿の男は、青みがかった灰色の目で彼らを見つめる。

「ともあれ、知りたいことはわかった。今日はこれで失礼しよう」
「待てよ！」

ここまで言われて逃がすわけにはいかない。アキラは手を上げると、先ほどシエラにやったように、男との重力を入れ替えようとした。しかしその瞬間、ひゅっと頭上で空を切る音がする。

「アキラ！」

カイの手が後ろからアキラを強く引く。同時になにかが顔の前を通り過ぎていった。

風だけが切るように鼻先を撫でていき、アキラの体はぞっと緊張する。

「また会おう」

男の声は、やけに遠くから聞こえた。

そして言葉の通りアキラが空を見上げると、そこにはもう何の姿もなかったのである。

23・螺旋

プレイヤーの男のことは気にかかるが、同じシギルを狙うライバルがいる以上、攻略を延期することはできない。アキラはカイに「絶対一人になるな。ああいうさかさまのやつを見たらすぐ逃げる」と言い含めて、翌朝早くから寮を出た。生誕祭初日のざわめく街を抜けて、空塔へと到着する。

整理券を出して入った塔の内部は、黒く磨かれた床に薄い灰色の壁で統一されていた。美しく機能的に整えられた景色。入口ゲートから一歩先に足を踏み入れたアキラは、広がる円形の空間を見て嘆息する。

「すげ……なんか感動するな」

外から見た時はすらりと細く見えた空塔も、中に入ってみればかなりの広さがある。一階部分は直径約六十メートルとされているが、壁の厚みなどを除けばもう一回り小さいだろう。今日は見学者用にか、フロアのあちこちに空塔や都市の主要施設の模型が、ディスプレイされていた。

アキラはそれら模型を夢中で見て回りたい欲求と戦いながら、人の間をぬってフロアの中央へと立つ。三階までの吹き抜けを見上げると、天井には第八都市の地図が意匠として描かれていた。圧倒される眺めに見入りつつ、アキラはすぐそばの少女に呼びかける。

（行けるか？）

（はい。行つてきます）

トークで答えたシエラは、吹き抜けを見下ろす手すりめがけて上昇していった。丈の短い白のワンピースにジーンズ、そして端末を入れたポーチを腰に下げた少女は、そのまま三階に到達すると通路

の奥に消える。アキラはそれを確認して息をついた。

——三階にあるというポートから、まずシェアだけを中層部に送りこむ。

そうして彼女は中層部の端末から空塔管理システムに干渉し、アキラを管理部員のデータベースに登録するのだ。

一度、「空塔管理部」として登録されてしまえば、彼にも塔内ポートが使えるようになる。人の目さえごまかせれば一気に上層階にも行けるだろう。監視カメラなどのシステムは、シェアが対策すると言っていた。

「これ、あいつ一人なら軽々上まで行けるんだろうな」

だがシギルは代行者でなければ取れないルールなのだからしかたがない。彼女からの連絡を待つ間、空塔を見学していることにしたアキラは、壁際に立つガイドに気づいて歩みよる。紺色の制服を着た女は、やわらかい声で彼に応えた。

「何かご質問でもありますか？」

「あー、いや、空塔って全部で何階まであるんすか？」

これから目指す場所はどれほどの高みにあるのか。基本的なことさえ知らないアキラに、女は造り物めいた笑顔を見せた。

「正確なところはお教えできませんが、フロアは二百以上存在します」

「……うわ」

途方もなさすぎるとはこのことを言うのだろう。

思わずげっそりしかけたアキラに、「準備が終わった」とトークがきたのは、それから二十分後のことだった。

見学者が立ち入りを許されるのは、二階フロアまでである。

そこからポートのある三階に行くには、奥の階段をのぼらなければならず、広い階段の前には開放日とあって二人の警備員が立っていた。見学者が多く行き来する通路からは、角を曲がって死角にな

る階段。その角の前まで来たアキラはあたりの様子をうかがう。

「今から騒ぎ起こしちゃまずいしな……」

先の長さを思えば可能な限り存在を気取られないでいたい。アキラは目を閉じると、角の先に向けて宣言した。

「あいつと俺の視界を入れ替える」

暗闇だった視界に灰色の壁が見える。警備員の男は突如目が見えなくなつてか、混乱の声をあげた。すかさずアキラは、残る一人を意識において宣言する。

「今の俺の視界と、あつちの男の視界を入れ替え」

二度目の発動によつて、もう一人も目の異常に驚愕したらしい。最初の一人は何も見えずに四つ這いになり、二人目は床しか見えぬことに慄いて尻餅をついた。

短い混乱の中を、アキラは音を立てぬようすりぬける。このための予行演習は今まで何十回もしてきたが、さすがに足が緊張でぐらつきそうになった。ほんの十五秒ほどで、アキラは警備員のわきを通り過ぎ、階段をあがりだす。踊り場を折り返すと口の中で小さく呟いた。

「解除する」

頭の中からずっと違和感が消え去る。本来の視界を取り戻した彼は、すばやく残りの階段をのぼった。階下の音に耳を澄ませたが、警備員たちは今の異常をいぶかしむだけでどこかに報告しようとはしていない。ほっとしたアキラを、階段の出口でシェラが迎える。

（大丈夫ですか）

（なんとかうまくいつてる）

（案内します。今は人もいません）

天井を走るシェラの後について、アキラは小走りに廊下を駆け出す。

喉元にせりあがってくる緊張。脈拍が加速度的に早くなつていく。磨かれた黒い廊下に自分たちの姿が映ることさえ、今はなんだかよくないことのように思えた。先行するシェラは二度角を曲がる

と、行き止まりのポートホールにアキラを案内する。

そこには直径二メートルほどの小ポートが五つ並んでおり、さいわい今は人の姿もない。ポートはそれぞれ円柱を四隅に置かれ、白い真円のタイルが作動床にはめ込まれていた。どれも同じに見えるそれらをアキラは見渡す。

「どれだ？」

「一番右です」

シエラの言葉に、アキラは頷いて右へと走った。ポートの操作盤を探り、作動ボタンを押す。頭の隅に一瞬「人の多いところに出たらどうしようか」という考えが浮かんだが、その時には既に景色は変わっていた。二つのポートしかない小さなホール。シエラはすぐに「隣へ」と指示する。

人目を避け、ルートを選びながら上へ上へとぼつていく。

慎重に偵察をし、気配を殺し、人と出くわしそうになるたびに咄嗟の判断で隠れる。どうしても隠れられない時は、スキル使用でなんとか切り抜けた。

——そういえば昔、こんなビジュアルゲームをやったことがあるな、とアキラは思う。

そしてシエラが当初考えていた「ゲーム」の性格も、このようなものだったのだろう。

スキルを使い、お互い協力しての空塔潜入ゲーム。それがいきなりプレイヤー同士の対戦ゲームになってしまったのだから、彼女もさぞあわてたに違いない。引け目のせいか、シエラは気づけずと遠慮がちになってしまった。

アキラは小走りに角を曲がる。二百以上あるというフロアに対し、空塔管理部の人数はわずか約千三百人。どこも同じ景色に見える塔内は無人の倉庫階がほとんどだった。

そのような無人階の一つで、「フロア143」と書かれたプレート
をアキラは見やる。

「結構上まで来たな……二時間くらいかったか？」

「人のいない道を選びましたから。それくらいですね」

ポート移動は基本的に、シェラを先行させ移動先の様子を見てから、移動するようにしている。おかげでまだ一度も見つからずに済んでいるが、これから先は厳しくなってくるかもしれない。アキラは薄灰の天井を見上げた。

「そついや最上層に出入りできる管理部員はごく一部って聞くけど、大丈夫なのか？」

「大丈夫です。上位権限を設定してあります」

「……すげー」

これだけのことができるのは、彼女が虚都の研究者だという才媛だからなのだろうか。不可能を可能にする不条理は、強力な助けではあるが空恐ろしさもまた感じさせる。これが他の傲慢なプレイヤーだったらと思うとぞっとするほどだ。

そもそも彼はシェラを信頼してはいるが、本音を言えば虚都に空塔操作システムがあるということ自体愉快に思っていない。虚都人からすると、この世界の人間がどうなるうとたいした問題ではないのかもしれないが、こちらはこちらでまったく別の世界なのだ。越えてはならない一線はあってしかるべきだと思う。

——そう、越えてはならない、越えられない境界はたしかに存在するのだ。

少女の指示により一旦立ち止まったアキラは、壁に背を預けた。角の先を窺う少女を見上げる。

「なあ、これが終わったら、シェラも帰れるんだろ。姉貴に会えるな」

そんなことを口にしたのは、半分は彼女の反応を見たいがためのものだ。

シェラは少し驚いた目で彼を見上げた。小さな唇がなにかを言お

うとわななく。

だが彼女はなにも言わず——口元に淋しげな微笑を浮かべると、うなずいた。

「がんばりましょう」

「ああ」

目の裏に白い空がよぎる。

しかしアキラは、それを無視した。

スキルの使用はできるだけ節約している。ここ数日してきた持続時間のコントロール訓練は、きちんと成果を出していた。ポートの前で立ち話をしている間に動かなかった二人の背後を、チェンジリングですりぬけたアキラは、誰もいない廊下で一息つく。

「これ精神的にじりじり来るな……」

「大丈夫ですか？」

「平気。休憩は入れてるし」

上からアキラの額に手をあてたシエラは、心配そうな表情ながらも手を引く。百五十階くらいまでは遠回りをしたとはいえスムーズに来ていたのだが、そこから先は倉庫階が少なくなってきたらしい人と出くわす機会が増え、心身ともに疲労が溜まりつつあった。アキラは額ににじむ汗をぬぐう。

「百七十三階か……。次は東ポートでいいのか？」

「ええ。そちらは普段使用されていないようなので。そこから百八十階層に行けます」

「じゃ、さっさと行くか」

小声で話しながら右にカーブする廊下を歩いていた二人は、だが近づいてくる声に気づいて顔を見あわせた。アキラはシエラの手を取ると、もと来た道を走り柱の影に隠れる。

聞こえてくる声は三人。いずれも大人の男のものだ。廊下に分かれ道がない以上、いずれはここまでやってくるだろう。そして他に

隠れるところはない。見つかるのも時間の問題だ。

（いったん戻りますか？）

（いや）

戻ろうとしても柱から出た時点で視認されるかもしれない。

（どうせ見つかるなら進んだ方がいい）

アキラは身をかがめて両膝をほぐす。シエラが天井で目を丸くした。

（突破しますか）

（できるなら口封じする。三人相手だとスキルだけで切り抜けるのは難しいからな）

ここまで見つからずに済んだことが幸運だ。あと残り三十フロア前後。この場をなんとかできれば行き着ける距離だろう。そこは、行かなければならない場所だ。

シエラは頷くと天井を走り出す。アキラは息を整えて彼女からの合図を待った。数秒後、物の落ちる音がして、廊下の先から男たちの声が聞こえてくる。

「ん？ この靴、どこから落ちてきたんだ？」

「女物だな」

シエラが落とした靴を手に首を傾げる三人。その様子をそつとうかがったアキラは、思わずふきだしそうになった。三人のうち一人のジャケットを、シエラが背中からそつとまくりあげようとしているのだ。彼はしかし、すぐに気を引きしめなおすと、もつとも体格のよい若い男へ狙いを定める。そしておもむるに、柱の影から飛び出した。

「なんだ、お前――」

アキラを見て、三人の表情が変わる。しかしそのうちの一人はすぐに顔が見えなくなった。シエラがめくりあげたジャケットで男の頭を包みこんだのだ。アキラは若い男に向かって宣言する。

「あんたと俺の、腕力を入れ替える！」

男は、正面からアキラにつかみかかってきた。その手を彼は外側

へ払う。アキラよりもずっと太い男の腕は、予想を超え軽々と跳ね除けられた。相手の男はぎょっと目を見開く。その鳩尾を、アキラはすかさず無言で打った。悶絶する男から視線を外し、二人目へと向き直る。

ひよろりとした男は、啞然とした目で見知らぬ少年を見返した。

「え？ 高校生……？」

現実が認識できていない顔。アキラは男の内心にはかまわず握った拳を振りぬく。男は「ひええ」と短い悲鳴を上げた。

——そうしてどたばたしたもみ合いの末、空塔管理部の三人は、手足を自分たちのベルトで拘束されることになった。

彼らの口に布を押し込んで、適当な空き部屋に閉じこめたアキラはしみじみと言う。

「シエラが弱い代行者を選びたいって言ってた意味がわかった。チエンジリングって弱いやつと強いやつを入れ替える方が効果的だもんな」

「そんなこと覚えていないでください……。先見えます」

気まずそうな少女は靴を履きなおすと天井を駆けていった。

アキラはあがってしまった息を整えつつ、歩いて彼女の後を追う。「にしても、顔が割れたら後で捕まるな。あーあ」

いずれは見つかり覚悟はしていたが、先のことを考えると非常に面倒くさい。

だが、そんなことを気にしていられる場合でもないだろう。後に誰かが続いてくれるのだとしても、アキラ自身には次のチャンスなどない。この挑戦がきつと最初で最後だ。そう自覚すると、廊下を行く足にも力が入る。実際、空塔攻略もそろそろ上層に入るだろう。その時、アキラはふと、ジーンズのポケットに入れた個人端末のことを思い出した。

呼び出し音は空塔に入る前に切ってあったが、この先は電源自体切っておいた方がいいかもしれない。「空塔上層部には端末探知用

のセンサーがある」とは、ずっと前に聞いた噂話で、カイもシエラもそのようなことは言っていなかったが、用心しておくにこしたことはないはずだ。

アキラはポケットから薄いスティック状の端末を取り出した。小さなランプが灯っているのを見て、目を丸くする。

「あれ、誰だ」

音を切っている間に、誰かからメッセージが入っていたらしい。

生誕祭を欠席することについてはカイとミヤに言っていたが、それを知らない誰かからのものだろうか。アキラは周囲を確認すると、メッセージを開いた。最小の音量で録音された伝言が流れ出す。

それは、学校に行っているはずのカイの声だった。

『アキラ……！　まずい、急いで——』

「へ？」

焦ったような声は、ほんの数秒でぶつりと途切れる。アキラはもう一度同じメッセージを再生した。次に、カイの個人端末へと呼び出しをかける。

だが呼び出し中の表示は、いつまで経っても変わらない。それは相手をミヤに変えても同じことだった。戻ってきたシエラが、上からアキラを覗きこむ。

「どうかしたのですか？」

「いや……カイになにか」

「え？」

劇の最中なのだとしても、二人ともが呼び出しに応じないというのはおかしい。

これはおそらく、なにかがあったのだ。昨日のプレイヤーが動いたのか違うのか、アキラは個人端末を握りしめた。震えるその手を見て、表情を硬くしたシエラがすぐにうなずく。

「わかりました。戻りましょう。システムの癖は把握しましたし、空塔へはまた来ればいいですから」

「けど」

——今戻って、間に合うだろうか。

メッセージが入っていた時刻は、今から一時間ほど前だ。もう遅すぎるかもしれない。だが行かなければならぬにわかからないのだ。

逡巡するアキラの肩に、シエラの手が添えられる。

「戻りましょう、アキラ。大丈夫です」

「シエラ」

少女は微笑むと迷わず来た道を戻り始めた。

彼の周囲を攻略よりも優先してくれる少女。その姿を見上げたアキラは、遅れて意を決する。握った端末をポケットに押し込んだ。

「シエラ、待て」

「はい？」

「戻らない。先に進むぞ」

「え……でも」

「急ごう。たぶん……その方がいいんだ」

——『急いで』の後に続くものはなにか。

『急いで助けにきて』だろうか。アキラはまずそれを考えて、だがやはり「違う」と思った。

今日彼が空塔に来ていることを、カイは知っている。それが特別な目的のためだと、聡い友人は説明されずとも察していたのだ。そのような状況で、たとえ自分の身になにかがあつたとして、カイは「空塔より自分のところに来てくれ」とは決して言わない。むしろアキラの邪魔にならぬよう自分でなんとかするはずだ。

だからきつとあの言葉の意味するところは——『急いで目的を果たせ』だろう。アキラは友人たちへの心配を押し殺すと、天井のシエラを見上げる。

「上に行くぞ。先にシギルを取る」

「アキラ……」

「大丈夫だつて。信じる」

——もしかしたら自分は今、友人を見捨てる決断をくだしているのかもしれない。

そんな考えが脳裏をちらついたが、アキラは惑いを面に出さなかった。固い視線をシエラへと向ける。

契約者の少女は、軽く息を飲んだように見えた。ややあって、細い声が応える。

「わかりました。急ぎましょう」

「ああ」

「先を見えます」

シエラは廊下の先へと走り出す。その姿はまもなく先の角を曲がって見えなくなった。アキラは歩調を速めて彼女の後を追う。カイとミヤは無事なのか、どうしても考えてしまう彼は、けれど先行しているシエラの声にはっと顔を上げた。

（アキラ！ 人が……！）

驚愕に満ちた声が伝わってくる。

アキラはそれを、誰か人がやって来るのだと判断した。急いで隠れる場所がないか周囲を見回す。

しかし、続く言葉は彼の動きを止めた。

（人が、倒れています……）

「は？」

思わず肉声で返してしまったアキラは、我に返ると廊下を走り出す。カーブする通路を曲がり、見えた光景に立ち尽くした。

「なんだこれ」

天井に立っているシエラ。彼女がいる場所はポートホールの前だ。そしてその前の床には何人かの人間が倒れ伏している。服装からして管理部の人間らしき彼らに、シエラは下りてきて手を伸ばした。そつと首や顔に触れる。

「生きているみたいです。気絶しているだけで」

「へ……なんなんだ。ガスもれ？」

アキラは用心して近づいたが怪しいものはない。二人は首を捻ったが、原因がわからないのでそのまま先に進むことにした。

だが、異変はそこだけではなかったのだ。次のフロア、そしてその次のフロアにも管理部職員は倒れていた。そろって気絶させられた彼らは皆ポート周りに集中している。

最上層へといたるルートはそうして、彼らの知らぬ間に静寂で舗装されていたのである。

24・足跡を拾う

（……どうも他に侵入者がいるみたいです。データベースが破壊されています）

（破壊？）

明らかな異常事態に、偵察に出ているシェラは端末を確認してその報告してきた。

どうやら三十分ほど前に、誰かが管理部のデータベースに侵入して中をいじったらしい。それによってポートの使用許可者がクリアされてしまったのだろう。データベースを破壊した誰かは、実力行使をしながら最短で上を目指しているようだった。

人目を避けて動いたがために、その誰かに抜かされてしまったアキラは、次のポートを操作し始める。操作盤に移動階の選択は出ない。移動先の設定は一つだけのようだ。

（とにかく戻ってこい。合流しよう。別行動はやばい）

（はい）

空塔開放日に乗じたただの愉快犯であればいい。まずいのは、彼らと同じ目的を持った人間が侵入してきているという可能性だ。アキラは昨晩会った男のことを思い出す。

「やつばあいつが怪しいよな……」

だとしたらもたもたはしてられない。シェラが調べたところ、管理部もこれだけの異常とあって既に調査と避難誘導に動き出しているようだが、複数階で転移ポート自体が破壊されているらしく、激しい混乱に作業が難航しているのだという。

アキラは、すぐに戻ってきたシェラの手を取り引き寄せると、作動ボタンを押した。景色が変わり、一面白色が広がる。眩しい光景

に彼は思わず目を細めた。

今までとは雰囲気が違う。天井も壁も床も、光輝くような白だ。アキラは壁にはめこまれた銀色のプレートを確認する。

「フロア202……」

——空塔最上層。

誰に言われるわけでもなく、彼はそれを理解した。シエラを自分の背後に押しやる。

「後ろにいるよ。プレイヤーがいたらまずい」

なにしろ相手はかなりの人数を気絶させ、捕まることなく最上層へと到達しているのだ。どういう手段を使っているかはわからないが、用心するにこしたことはない。

ポートホールを出た先の廊下は左右に分かれていた。円形の塔の輪郭に沿って緩やかにカーブしている道は、左の方は幅広の上り階段になっており、右の方は平坦な通路となっている。

アキラは、右の廊下の途中に倒れている男を見つけ、そちらへと歩き出した。制服姿の男をまじまじと覗きこむ。

「これ、ひよつとして首を突かれたたのか？」

よく見ると首の血管の上にうつすらと赤い痕がある。このせいでみんな気絶しているのだろうか。アキラは疑問に思いつつも体を起こした。

「とりあえず、首かばって行ってみるか……」

長くはない廊下の終わりには、一枚のドアがある。「天候制御室」とのパネルが埋め込まれたドア。一人通れるほど開いている両開きのそこは、誰かが無理矢理こじあけていった形跡があった。片方のドアがゆがんでいる。

（シエラ、あれ）

（たぶん……）

——あそこに、誰かがいる。

敵であるのか違うのか。シギルを確保された第二都市は、原因不明の豪雨が荒れ狂ったという。アキラは、かつて第八都市を一ヶ月

以上もの間、嵐が襲ったという話を思い出し、ぞつと戦慄した。

——このゲームによって災害が起こるような事態は、なんとしても阻止しなければならぬ。

己にかかる重圧に、アキラはあらためて緊張を覚えた。シエラがぎゅつと彼の肩を握る。

「大丈夫だ」

彼女を安心させるため言った言葉は、彼自身をも支えた。アキラは一度深呼吸すると歩き出す。

そして二人は、空塔最上層、天候コントロールルームに足を踏み入れた。

円形の広い部屋は、それ自体が一つの巨大な端末であるかのようだ。

まるでガラス張りのように百八十度見通せる都市の景色。だがそれは、窓があるというわけではなく、外の風景を壁面モニタに映し出しているらしい。あちこちになにかの数字が青色で表示されていた。

モニタの下部には、壁と一体化した操作盤が、ぐると半円を描いて設置されている。それらの前には等間隔で銀色の丸椅子が置かれており、だが今は誰もそこに座っていないかった。代わりに床の上には点々と倒れ伏している人間たちがいる。

そして正面の操作パネルの前には、それをなしたのであるう男が、さかさまに宙へと立っていた。

灰色のスーツ姿の男は、アキラたちの気配に気づいたのか振り返る。

なでつけられた黒髪に灰青の瞳。有能なビジネスマンを連想させる風貌はだが、上下反転していることでかえって非現実感を助長させていた。男の傍には、黒いフードをかぶった何者かが床の上に佇

んでおり、おそらくは代行者であることがわかる。

昨晚もアキラの前に現れた男は、彼の後ろにいる少女を一瞥した。
「ずいぶんひさしぶりな気がするな。シェラ・ハーディ」

「エジード・バレ……」

プレイヤーの男の登場は、前もって予想はしていても、シェラにささやかな動揺をもたらしたようだ。アキラの肩につかまる少女は、美しい顔を歪めた。

「やはりあなたでしたか」

「ああ。自分の目であちこちを見てみたかったからな。貴女のところに来るのが遅れてしまった」

エジードと呼ばれた男は、コントロールパネルから手を引くと、感情の薄い目でシェラを眺める。

「一週間の旅で貴女のほしいものは得られたのだろうか」

「……あなたには関係ないことです。なぜ私の前に現れたのです」

「私なりにこのゲームについて色々と考えた結果だ。本当は挑戦者として貴女に挑むつもりであったが、少し早く着きすぎたようだな」

「挑戦者？ 言っている意味がよくわかりません。それとも、あなたもプレイヤー同士の戦闘に興味があるのでしょうか？」

険悪な空気のやり取りを聞きつつ、アキラは状況を確認する。

男のそばにいる代行者は、アキラよりも若干背の低い体を足先まで黒いローブで覆っており、どのような人物かよくわからない。目深にかぶったフードの下には、どうやら白い仮面をつけているようだった。

アキラは自分も顔を隠していればよかったか、と思いつつ、内心胸を撫でおろす。カイが代行者として連れ去られていたなら、どうしようかと思っていたのだ。だがローブ姿の代行者には少なくとも無理矢理従わされているような気配は見られなかった。まるで空気に溶け込むように、黙って黒い操作盤の前に佇んでいる。

一触即発、というにはいびつな空気。エジードは淡々とシェラに

返す。

「プレイヤー同士の戦闘に意味があるかはわからない。競争相手を排除し権利者を減らすという点では有用だが、博士はそれを望んでいるように思えなかった。——だが、貴女が純粋なプレイヤーかと言ったら私は違うと思っている」

「……あなたも、私には特権が与えられると思っっているのですか？」
シェラの声にはその時、自嘲的な苦さが満ちていた。

肩をつかむ指が震えている。アキラはそっと彼女を振り返った。
今までにも何度か見た淋しげな目。その芯にあるものは何なのだろうか。男はまじめくさった顔で続ける。

「貴女は飛び入りで参加した人間だ。経緯からして疑われてもしかたがないだろう。私も最初は考えたのだ。この勝負はフェアなものではなく、博士は貴女を勝たせることで、己が築いた技術を隠匿し続ける気ではないかと」

「そのようなことはありません。私は、父とは関係のない一参加者としてここに来ています」

「そうだろうな。でなければハーディ博士がわざわざ貴女のスキルを洩らすわけがない」

「——え？」

その言葉の意味を理解するのに、アキラでさえ数秒を要した。

当事者であるシェラはもったかかったのだろう。何も言わない少女に、エジードは憐れむような目を向ける。

「貴女は勝つために送りこまれた人間ではない。プレイヤーの的として用意された駒だ。だが貴女にとってはそれでも構わないのだろう？ 貴女の目的ははじめから、勝利によって得られるものではなく——亡くなった姉、ニーナ・ハーディの足跡を追うことにあったのだから」

25・歌

美しい声だった。

絵本を読んでもくれる姉の声。その声が好きだった。

だから「歌手になればいいのに」と言ったことがある。

その時姉は微笑って、「そうね。なつてみたいわ」とシエラの頭を撫でた。

姉が舞台に立てるような体ではないと、父から聞いたのは同じ日の夜のことだ。

シエラはその時ようやく、姉の負っているものの重みを知った。

『亡くなった姉、ニーナ・ハーディ』

その言葉は、アキラに「理解できないもの」として届いた。

わからない、と思いながらも、何を聞いていいかわからない混乱。彼はこめかみを手で押さえる。

「……え？ 亡くなった？ どういうことだ？」

シエラを見上げると、彼女は蒼白な顔でアキラを見返していた。薄く開いた唇から、細く息を吐く音が聞こえる。それはなんらかの言葉と繋がるうとしているかのようで、しかし声になるよりも早く、エジードによって遮られた。

「君は彼女から聞いていなかったのか。ニーナ・ハーディは知って

いるだろう？ こちらの世界では有名な歌手だ。つい先日持病で亡くなり、だからこのゲームが始まった」

「ニーナ……？」

その名はもちろんよく知っている。十二都市においてもっとも有名な歌手ニーナ。

だが、彼女の姓をアキラは知らない。姓などなかった気がする。「なに言ってるんだ……？ ニーナはニーナだろ。虚都人じゃない」

彼女は他の歌手と比べてあまり派手な舞台に出ることはなかったが、それでも何度かライブを行ったことはあるのだ。アキラ自身は見たことはないが、ミヤなどからその時の話は聞いている。少なくともニーナはさかさまではなかった。いたって普通の、美しい女性だったはずだ。

そんな彼女が、シエラの姉のはずがない。第一シエラは、姉を助けるためにこの都市にやって来たのだ。

そう思うアキラの脳裏には、ただ一瞬、ずっとイヤホンをはめていた少女の姿がよぎった。

淋しげな、深い後悔を宿した瞳。家族について語る時、いつも物憂げであつた彼女を、アキラは見上げる。

「シエラ？ 姉貴って虚都で病気になるんだよね？」

「アキラ……」

「なるほど。彼女は君にそのような説明をしていたのか。——無理もない。こちらの世界では『死』という概念からして希薄だからな。事実を話しても、理解を得られないと思つたのだろう」

「死、という概念？」

異物のような単語は、アキラの意識の中に溶けることなく転がる。それを「知っている」と思いながら、だが同時に彼は「わからない」とも感じた。

なかば呆然としているアキラに、エジードは興味深げな視線を向ける。

「ちようどいい。こちらの世界の住人と話をしてみたかった。そう、

君たちにとって、死とはどういうものであるのか」

「死が、どういうものであるのか？」

飲み込めない問いを、アキラはそのまま反芻する。

シエラは動かない。彼女は人形になってしまったかのように凍りついていた。

いつかどこかで聞いたような質問。アキラは軽いめまいを覚える。
「俺は……」

「質問の意味からしてわからないのか？ 概念の希薄とともに単語も消失してしまったか」

「エジード・バレ……やめなさい」

「どうしてだ？ このようなゲームに巻き込んだのだから、確認しておいた方がよいだろう。もっとも私たちプレイヤーにとっては、そつとしておいた方が都合な問題なのかもしれないが」

震える手で額を押さえるアキラを、男はまじまじと眺めた。観察と探求の目。エジードはあっさりと結論を口にする。

「この世界の人間は、死を迎えてもそれで終わるわけではないのだろう？ 記憶を消され、新たな肉体を得て、子供時代からやりなおす。別の人間としてではあるが、次の生が保証されているとは、どういう気分なのか。私はそれを聞いておきたい」

エジードの声は、教師を連想させる抑揚のないものだ。だがその言葉は、今度はおおよそが理解できた。

アキラは呆然としかけていた気を引き締めると、あらためて男をにらむ。

「それがどうした？ 当たり前のことだろ」
アキラの指は、無意識に自分の耳の後ろに触れた。その奥にあるのだらうチップを意識する。

——人の脳には、みな小さなデータチップが埋め込まれている。それは一人一人の核のようなもので、肉体が限界を迎えて機能停

止した際に回収され、新たな体に埋め込まれるのだ。

培養層によって作られ、六年間保管された子供の体は、チップを入れられて初めて人間となる。約一ヶ月の睡眠を経てチップと体をなじませ、目覚めた後は初等部へと入るのだ。

もちろん体が入れ替わると同時に、容姿や名前も変わる。性別は同じままだが、記憶はまったくさらな状態に戻るのだ。そうならばはや別の人間と言った方がいいだろう。アキラも今の自分が終われば、「瀬戸アキラ」はそれでおしまいだという認識を持っている。

だがそれはそれとして、次に新たな人生が待っていることは事実だ。人はそうして、何度も違う生を渡っていく。十二都市において「終わり」を深く嘆かれるのは、ニーナのような特別な人間だけで、普通の人間はその終わりを親しい人間たちに惜しまれながら、だが希望をもって見送られるのだ。

エジードはアキラの返答を聞いて、「なるほど」と呟いた。

「意識の違いを知りたいのなら、こちらの常識について伝えておくべきか」

「そっち？ 虚都のことか」

「そう。こちらでは、全ての生き物には『死』という厳然とした終わりが存在する。肉体が機能停止した後続くものなどない。何の保証もないのだ。別人になることも戻つてくることもない」

「え？ 阿呆か。それだと人間絶滅するだろ」

「生殖によって増えていくから問題はない。私たちは君たちと違い、自らの体によって次世代を生み出す。最初からチップなど必要ないのだ」

スーツ姿の男は、表情こそ変わらぬままであったが、アキラとのやり取り自体に関心を抱いているようだ。知らなかった話を聞く少年の眉の動き一つにさえ、注目している気配を感じた。

アキラはそのことに薄気味の悪さを覚えつつ、シエラを振り返る。「あいつの言ってること、本当なのか？」

シエラは、すぐには返事をしなかった。

だがその目を見れば肯定か否定かはわかる。アキラは内心「だからシェラは捨て身の行動を嫌がるのか」と納得した。

マティルドを退けた後、シェラは涙ぐみながら『私とあなたでは生死の常識が違っ』と言ったのだ。その時は意味がよくわからなかったが、彼女はこの差異を知っていて、それを悲しんでいたのだろう。

黒い瞳には、収まりきらぬ焦燥が浮かんで見えた。

アキラが彼女へと手を伸ばした時、だがエジードの声が続ける。

「君たちにとって、死の持つ意味は軽い。それがどのような意識の変化を及ぼすのか、私は聞いておきたいのだ。たとえばマティルドはこのゲームにおいて多くの人を殺害したが、それは大した問題視もされていないように思える。もちろん報道はされていたが、私などから見ると『扱いが軽い』と思うのだ」

事務的に処理される人の終わり。事故などの原因はきちんと調査されるが、多くの人間は、人の終わり自体を重大事とは思わない。「同じことが繰り返されなければいい」と、ただ願う。他の多くのニュースと同じように通り過ぎていく。

「それに君自身も、自分の身をかけることにさして抵抗を抱いていないのだろうか。私たちプレイヤーを攻撃することについてもそうだ。スガやマティルドのやり方は誉められたものではなかったが、君は彼らに実力行使することを選んだ。そこには死の不在による倫理観の差異が影響しているのではないか？」

喉の奥が乾く。

男の声は、やけに遠くから響いているようだ。夢の中で聞くに似たそれに、アキラは軽い苛立ちを覚える。

世界が違って、生死の常識が異なって、それがなんだというのか。死がない世界ならば、人や都市を軽んじていいのか。踏みじつ

てもいいというのか。

興味がある、という男の物言いは、実に傲慢なものに聞こえる。それはアキラ自身意識していない奥底の何かを、汚しているような気さえするのだ。

『——とははたして、なんであると思う？』

白い記憶はあいまいなままだ。

先ほどから妙に痛む頭を押さえて、アキラはシエラに向きなおる。虚都と十二都市が違うのだという話はいい。今はそれよりも聞きたいことがあった。

苦しげに顔を歪ませた少女は、紅い唇をわななかせてアキラを見る。

「アキラ……」

「聞いていいか？ ニーナがシエラの姉貴だって、本当のことなのか？」

詰問するつもりはない。できるだけ落ち着いた声での問いに、やああってシエラはかすかに頷いた。大きな眼が軽くうるむのを見て、アキラは聞いたことを後悔しそうになる。

ニーナの訃報が流れたのは、シエラが来る数日前のことだ。シギルが置かれるよりも前の話。

姉の治療法を探しに来たと、少女が言った時には既に、ニーナは十二都市にいた。都市にいて、「終わって」いたのだ。その食い違いがなにを意味しているのか、アキラは一つの答に辿りついていた。「姉貴の容態が悪かったからか？ だから死がないってこつちの世界に連れてきたのか。親父さんは……それに携わってたんだな」

今更だ、と言っていた少女。それは歌手だった姉に会えなかったことを悔やんでいるのだろうか。最初の生に間に合わなかったことを、悲しんでいるのかもしれない。

だとしても、この世界で「終わり」は絶望ではない。アキラが消えてしまった兄の無事を期待しているように、ニーナにも次があるはずだ。——そう思う彼に、シエラは長い睫毛を震わせる。

「い、今まで黙っていてすみません……」

「謝るなよ。それはいいんだよ。最初から言ってくれたってよかったんだ」

それとも自分は、エジードの言うように彼女の気持ちを理解できていないのだろうか。

アキラの渡した音楽プレイヤーを肩身はなさず持ち歩いていた彼女。騒がしい雑踏の中からでも姉の歌を聞き分けた彼女は、今までどのような思いでいたのだろうか。なぜそれに気づけなかったのか、アキラは喉がつまるような感覚を覚える。

シエラは小さく首を横に振った。

「嘘を、ついていて……ごめんなさい。私ただ、姉のいた世界を見なかったのです。だから無理を言って参加して……」

消え入りそうな声。少女はアキラを見て、もう一度「ごめんなさい」と言った。

26・願いと義務

姉のために来たと言った少女。

もし彼女のその気持ち自体が嘘であったなら、アキラはもっと早くシエラの言うことを疑っていただろう。契約自体したかどうかかわからない。

けれど、姉について語る彼女はいつも真摯であった。真摯で、消すことのできない後悔を漂わせていたのだ。

少女がよく見せていた翳の理由を知ったアキラは、かける言葉に迷う。

「シエラ、俺は――」

顔色の悪い彼女に手を伸ばす。しかしその手がシエラの頬に触れるより先に、視界のはしでエジードが操作盤に向きなあった。アキラは、パネルを叩こうとするその手を制止する。

「待てよ！ なにやってんだ」

「天候を変えてみたいと思っているのだが、なかなか難しそうだ。さかさまに操作するというのも大変だが、それ以前に私の技術では難しいな。壊していいのなら無理もきくかもしれないが……やはりハーディ嬢とは違う」

「はあ？ ふざけんなよ。お前も都市破壊が目的か」

「いや、たんなる調査だ。ハーディ嬢、これ进行操作してくれないか？」

「……お断りします」

シエラの声は掠れかけてはいたが、しっかりとしたものだった。エジードは軽く頷くと、パネルから手を引く。

「ならばこれは後回しだ。先に貴女の相手をしよう。それが一番の

目的であるのだから」

男の言葉に、黒衣の代行者がずっと姿勢を変えた。アキラの正面に立つその人物は、白い仮面にあいた二つの穴からじっと彼を注視する。薄気味の悪さに、アキラは思いきり顔をしかめた。

「シエラを排除するのが目的か」

「そう。それこそがこのゲームの正解ではないかというのが、私の仮説だ。――ハーディ博士はゲーム開始前、詳しい説明を求めてきた数人に、『特殊スキル例』として彼女のスキルを伝えたのだ。おそらくそれ自体が布石だったのだろう」

「お前たちがひいきひいきうるさいから、ハンデつけてやったとかだろ」

「そうだろうか。公平を期すただけに娘を危険にさらすと？」

シエラの体がびくりと震える。だがそれに気づいたのはアキラだけだった。

エジードは、壁面に映し出された街に視線を移す。

「ハーディ博士は、集まった私たちを歓迎しているようには見えなかった。そこに彼女の参入だ。スキルの漏洩もあって、私は博士が故意に彼女を狙わせようとしているのではないかと考えた」

「故意に？ 意味不明すぎんぞ」

「意味はある。君はこのゲームに対し、労力に成果が見合わないとは思わなかったか？ プレイヤーの数とシギルの数は同じだ。全員がゴールしてしまえばゲームの意味はない」

「……それは」

確かに割に合わないとは思った。だが都市住人としては意味があるとも思ったのだ。アキラはシエラを、自都市を任せるに足る相手だと考えたからこそここまで来た。

だがプレイヤーからしてみれば、全員にシギルが用意されたゲームなど茶番にしか思えなかったのかもしれない。エジードもそうして博士の真意を疑ったのだろう。彼は自分の代行者を一瞥した。

「額面通りのルールであれば、シギルを確保する意味は薄い。だが、

誰かが彼女の存在を危ぶみ排除しようとすれば、そこで篩いがかけられる。現に二人も脱落者が出ているのだ。私は彼女こそが今回のゲームにおいて、ただ一つの本当のシギルではないかと考えた」

「本当のシギル？」

「ああ。敗北して強制送還されたプレイヤーは、その場にスキルストーンを落としていく。このような処置がなされる理由とはなんだろう？」

「俺に聞くなよ」

「考えたまえ。簡単な推察だ。――すなわち、チェンジリングのスキルストーンこそが、博士が求める本当のシギル、つまり勝利者の証なのではないか？」

ゲーム提唱者の娘。都市で暮らす歌姫の妹。

飛び入りで参加したシエラは、最初からどうあがいても目立つ存在であつたのだらう。それに加えてスキルが知らされた。直接攻撃のできないチェンジリングは、好戦的なプレイヤーからすれば格好の獲物に見えたに違いない。アキラは今まで交戦した二人の男女を思い出す。

「あんたもだから、俺たちと戦うつてのか？」

「ああ。一応これが仕事であるからな。システムを入手すれば次に生かせる」

当然のように答える男は、スガやマティルドと違ってシエラ個人への敵意はないようだ。

ただそのような理由があるなら、戦闘になるのはまず間違いない。身構えるアキラは、背にシエラの乾いた声を聞く。

「エジード・バレ……あなたは勘違いをしています」

「勘違い？ 博士と分野こそ違えど、貴女も優れた才能を持つ一人だ。貴女でなければ空面制御塔のデータベースを誰にも気づかれずに書き換えることなどできないだらう。このゲームの乗り越えるべき壁としてふさわしい存在ではないか？」

「そういう意味ではありません。父にそのような意図などないとい

うことです。あの人が私のスキルを伝えたのだとしたら、それは単に私へ罰を与えたかったというだけのことでしょう」

シェラの口調は淡々としたものだったが、アキラの耳にそれは苦しい吐露に聞こえた。

孤独と、悔恨をうかがわせる述懐。美しい貌がわずかにゆがむ。

「当然のことです……私はずっと姉に会いにも来ない、姉の死に際にも間に合わない薄情な人間だったのですから」

水晶を思わせる澄んだ声。それは意識してみれば、ニーナの歌声によく似ていた。

彼女の言葉を聞いたアキラは、なぜか軽い眩暈を覚える。頭の奥がちくりとうずき、目の裏に白い空が浮かんた。

だがすぐにそのなにかも消え去る。かすかに残る記憶の残滓にエジードの声が重なった。

「貴女がそう思っているのだとしても、私は貴女を打ち破ってこの都市のシギルを取る。結果には変わりがないはずだ」

「……ええ」

少女の首肯に応じて進み出たのは、エジードの代行者だ。黒服の人物は袖に隠れていた左手を上げる。その白い手には赤いつるくさのような模様が浮かび上がっていた。アキラは鮮やかな刺青を揶揄する。

「ずいぶん派手な代行者だな」

「一応こちらにも気を使ってこのような格好なのだが」

「……さつきから聞こうと思ってただけだよ。あんた、俺の学校に行ったか？」

カイからのメッセージを受けて確認すると、男はあっさり返した。「いつのことか限定しない質問であるのなら。たしかに行った。君のことを知リたかったからな」

「ほんとうぜえ……いい加減にしろよ」

「お気に召さなかったか。では、そろそろ始めるとしよう」

エジードはもっともらしく宣言すると、自分は黒服の後ろに下が

った。

シエラにとって、そして彼女の父にとって、この勝負にはどういう意味があるのだろうか。

アキラの頭にはそんな疑問が一瞬生まれたが、彼は思考を退けた。広い室内を見回す。

——ここで戦闘は起こせない。天候制御システムになにかがあつては第二都市の二の舞だ。

おまけに倒れている管理部員もいる。アキラは来た道を頭の中で逆にたどった。

（シエラ、さっきのわかれ道、どこに出ると思う？）

（上り階段になっていましたから……おそらく最上階、展望室でしょうか）

（オーケー、じゃあ、そこまでひっぱるぞ）

黒服の代行者が一步踏み出す。

アキラはそれをきっかけに、すばやくシエラの手を取った。踵を返し走り出す。

「ってか、先にシギルを取っちまえばいいだろうよ！」

ひしゃげた扉をくぐりながらの挑発に、エジードの「なるほど」という呟きが重なった。

アキラはそれに構わず弧を描く通路を駆けていく。転移ポートの前を通り過ぎ、ゆるやかな階段を一足飛びに上っていった。

まもなく階段の終わり、壁の右側に薄いガラス扉が見えてくる。

アキラは走ってきた勢いのまま、そのドアを押し開けた。ためらわずシエラを中に引きこむ。

そこに広がっていたのは半円形の白い部屋だ。

展望室と言ったシエラの予想通り、中にはなにもない。天井は高く八角形になっており、その下には純白の床がつややかな輝きを放

つていた。塔の内壁に当たる部分は全てガラス張りになっており、そこからは第八都市の景色が一望できる。

椅子の一つもないがらんとした部屋。だが中央には小さな石の台座が置かれていた。何も置かれていないディスプレイ台を思わせるそれに、アキラは息を整えながら、そつと歩みよる。平面に見える台座の上部にはなにかがはめこまれているのか、外からの光がきらりと反射していた。

「ひよつとしてあれが……」

「アキラ！」

鋭い声に、反射的にシエラの手を引いて右へ跳ぶ。

同時に風を切る音が、彼のすぐ左を通り過ぎていった。昨晚のことを思い出させる音。アキラは着地の勢いのまま、少女を壁際へと放る。

「下がってろ、シエラ！」

振り返った先には、黒服の代行者がいた。扉を片手で押さえたままのその人物は、アキラにむかって右手を上げる。道中倒れていた管理部員の様子や、今アキラたちを攻撃してきたものの気配からして、直接攻撃のスキル持ちだろう。しかも射程が広い。

アキラは次の一撃が来る前に距離をつめようと床を蹴った。遅れて黒服の後ろに現れたエジードが命じる。

「迎え撃て」

最小限の戦闘指示。

それに応えて——刺青に見えた赤いつるくさが、ゆらりと消えた。

27・ゆりかご

黒服は右手の袖をひるがえす。だぼついたその中から、ひゅっと鋭い音が聞こえた。

アキラは反射的に首をかばって身をかがめる。直後、頭の上を赤いものが通り過ぎた。激しく打ちつけるような音とともに、背後の床に亀裂が走る。

「うげ。なんつう威力だよ」

傷ついた床を顧みるだに、今までの使用は相当手加減していたらしい。アキラの全身はぞつと粟だったが、今は凛としている間も惜しかった。彼は再び黒服へ向かおうとして、しかし嫌な予感に床の上へと伏せる。今度は後ろから前へと、空気が軋んで裂かれていった。「ブーメラン……？ いや、鞭か」

黒服の右手の中に、赤い鞭がしゅるしゅると戻っていく。それは全部で三本あり、まるで意思のある蛇のようにうごめいていた。元のようにしまわれた鞭の先端は、手に張り付いて刺青のように見える。

恐怖と嫌悪感を刺激する光景に、アキラは思わず半歩後ろへ下がった。エジードが首をひねる。

「降参か？」

「早すぎるだろ、それ」

軽口を叩いてはみたが、半分は強がりだ。広範囲かつ自在の攻撃に、どう対処すればいいのかわからない。

アキラは立位置を変えようとして、だが振るわれる鞭を前にたたらを踏む。赤い軌跡が床を打ち据え、タイルの細かい破片が周囲に散った。その破片から目を庇って腕を上げる。

「くそ」

——なんとか鞭をよけて距離を詰めたいが、タイミングがつかめない。

これではまるで、大縄跳びの前で待っている子供だ。もっとも大縄跳びであれば、縄は子供を執拗に薙ぎ払おうとはしてこない。膝程の高さでしなってくる鞭を、アキラは真上に跳んで避けた。バランスを崩して転びそうになるのを、なんとか手について支える。

「めんどくせ……」

今までの分は全てかわせているが、読みにくい軌道を持つスキルだ。いつまでもつかはわからない。アキラは反対側から戻ってきたそれを、とつさに床を転がってよける。

そんなことを何度か繰り返しているうちに、いつのまにかあちこちの床にはひびが入り、タイルがかけてしまっていた。白い展望室は、たった数分で見える影もないほどのありさまになりはてている。

その光景に責任を感じないわけでもないが、実際それどころではない。アキラは追いつめられた壁際で息を整えた。

「すき放題壊しやがって。覚えてろよ」

背を伝う汗が気持ち悪い。疲労のせいか吐き気がする。このままでは体力的にあまり長くは耐えられなさそうだ。だが、黒服にどう対抗すればいいのか、まだいい案が浮かばない。

チェンジリングは使いどころを選ぶスキルなのだ。何を入れ替えれば優位が得られるのか、有効な一手を考えなければならぬ。

アキラは必死で頭を回転させる。その間にも鞭は空を切って彼に迫った。アキラは赤い軌跡を見て大きく横に跳ぼうとする。——だがそれは、完全にはうまくいかなかった。

「……痛、つてえ！」

よけそこねた鞭の一本が脇腹をかすめる。

自分の体を見下ろしたアキラは、厚手の服が破れ、その下に血がにじんでくるのをみとめた。これはまともに食らっては肉が裂けるかもしれない。

「つてか、空塔最上階で八つ裂きとかはかんべん……」

「死ぬのが嫌なら、諦めるといふ選択肢も君にはあるだろう」

「あるか、んなもん」

ここで譲って失われるものは大きい。それは虚都人にはわからぬものかもしれないが、アキラは二人のプレイヤーと戦って、ますますそう感じるようになったのだ。

じくじくと広がる痛みをこらえて、彼はまっすぐに立つ。黒服に向けて右手を上げた。

「お前と俺の、痛みを入れ替える！」

相手の体がびくりと震える。苦痛の声こそあげなかったが、脇腹に痛みが走ったのだろう。鞭を振るおうとした手が止まり、赤い三本の紐が垂れた。アキラはその隙に走り出す。

台座にはめこまれたシギル。それが意味するものは、都市の自由そのものだ。

アキラは石の台座を背に、己の拳を握った。黒服にむかって大きく床を蹴る。

赤い鞭はまだ動かない。きつと間に合う。

白い仮面を前に腕を振りかぶって――だが、アキラはその時ふと違和感を覚えた。

振りぬこうとした手が止まる。シェラの声が聞こえた。

「アキラ！」

警告か悲鳴かわからない叫び。

彼の体は次の瞬間、部屋の端まで弾き飛ばされた。

『好きにきなさい。それが君を救うと思うなら』

男はそう言った後、少し考えるような顔を見せた。横たわるアキラにむかって付け足す。

『もしいつか君が、知りたかったことを見つけられたのなら。その

時は――』

数秒の間気絶していたのかもしれない。

気がついた時、アキラは床にあおむけになっていた。プレイヤーの少女がその上に覆いかぶさるようにして歯を食いしばっている。白かった彼女の袖は引き裂かれ、血で黒く染まっていた。アキラはそれを見て跳ね起きる。

「っ、ぐあ……っ！」

「アキラ！」

あまりの痛みに頭の中が真っ白になる。

どういう状態であるかはわからないが、黒服の攻撃を至近から浴びたのだらう。アキラは激痛にあえぎながら、それでもシエラの体を両腕で抱き寄せた。くるかもしれない追撃から彼女をかばおうとする。

しかし恐れていた攻撃はいつまで経ってもやってこない。代わりにアキラの耳にはエジードの嘆息する声が聞こえた。

「降参する気があるなら言うといい。私の目的は貴女たちに苦痛を与えることではない」

「よく言うよ……」

アキラにはそれだけ答えるのがやっとである。シエラは彼の腕の中でみじろぎしたが、何も言わなかった。

寄り添う傷だらけの二人をエジードは真面目くさった目で眺める。「場違いな感想とは思うが、そうしてあがいている君の姿を見るとますますこのシステムを手に入れなければ、と感じる」

「は……？ 頭おかしいのか、あんた」

意味のわからぬ戯言に怒りの言葉を返す余裕もない。アキラは目を閉じて深く息を吐き出した。傷口の上でそっと動く白い手。彼はシエラを抱く腕を少しだけゆるめる。

「正直な気持ちだ。私も実際この世界を体験するまで、半信半疑だったところはあるのだからな。だが、君を見て確信した。博士の試みは成功だった。このプログラムとデータを応用すればもっと多くのことが可能になるだろう」

「意味わかんねーよ」

呼吸が楽になる。アキラは浅い息を繰り返す。胸の上でシエラが唇を噛んだ。彼は少女の背に回していた手を下ろす。拳を握って指の感覚を確かめた。

淡々とした男の声が、壊れかけた部屋に響く。

「わからないというのなら彼女に聞けばいい。君には知る権利があるはずだ」

弧を描く窓に傷はついていない。見える空は濃い紫だ。

広がる第八都市の景色。整然として美しいその眺めにエジードは目を細める。

男のもとに、台座からシギルをはずした代行者が歩み寄った。白にも銀にも見える小さな珠。掌におさまるほどのそれを、エジードは黙って受け取る。

「あとはこれを屋上の台座に納めるだけか……。もっともそれだけでは不足だ。チェンジリングのスキルストーンがなければな」

「——っ」

とどめを刺されることを警戒して、アキラは起き上がろうとする。だがそれを、シエラの手が留めた。彼のすぐ上に浮きあがった彼女は、顔だけでエジードを振り返る。

「スキルストーンを抽出すれば、彼を見逃してくれますか」

「シエラ！」

「彼を殺さなくてもそれが可能だというなら。いや、貴女なら可能なのだろうな。スキルコードへの干渉くらいいたいた問題ではないのだろう」

「不正行為のように言わないでください。プレイヤー権利を放棄すればいいだけです」

「シエラ、やめろ」

——ここで負けては、都市が滅びてしまいかもしれない。

それは死ぬことのない都市人一人よりも、よほど重要な問題だ。アキラは契約者を止めようと手を上げる。強張って伸ばした指が、かろうじて彼女の服をつかんだ。

少女はその手を見て息を飲む。黒い瞳にいくつもの感情が衝突して跳ねた。

「少し……彼と、相談させてください」

猶予を求める声が絞り出されると、エジードはあっさり頷く。

「わかった。決心がついたのなら上の台座まで来るといい。貴女の立会いをもって、私はこの勝負を終えよう」

男は視線を巡らすと、黒服の代行者に部屋の片隅を示した。そこには金属のハシゴが壁に打ちこまれており、天井の非常出口へと続いている。その先は屋上になっているのだろう。黒服はさつさとハシゴを上りはじめた。一方宙を歩く男は、憐憫に似た目でアキラを見る。

「君には先ほどの質問について答をもらっていないが……聞かずにわかるな」

男の声は、まったく違う世界から来る言葉のようだ。ひびわれた部屋をただ感慨もなく流れていく。

「君にとってやはり『死』は軽いものでしかない。永遠に姉を喪った彼女の後悔を、まったく理解できていないのだからな。タイプEでこれとは、空恐ろしいことだ」

小さな嘆息が聞こえて、エジードの姿は空に続く出口へと消えた。アキラは天井を仰ぐ。

探しているものは、そこにはなにも見えなかった。

敗北感を味わうことは初めてではない。

そのようなものは、今まで何度も味わってきた。普通に生きてきた人間なら、それはけっして珍しい経験ではないだろう。

けれど今ほど強い焦燥に駆られたことは、きつとなかった。アキラは自分のすぐ上にいるシエラを見上げる。

「降参とか、しないよな」

「でもアキラ。あなたが」

「俺のことはいいって。前から言ってるだろ。それよりも都市の方が大事だ」

言いながらもアキラは、言葉にできないある種の予感を覚える。それはまるで、どうしても聞き取れない囁き声のようで、忘れてしまった夢の欠片のようだ。そこになにかがあることはわかるが、なんであるかはわからない。

シエラとエジードの応酬において、はしばしに感じられた齟齬感。二つの世界の違い、思い出せない記憶。最後に男が向けてきた憐れむような視線が、見えない不安をあおりたてる。

シエラは、じつと自分を見上げてくる代行者の視線に、小さくかぶりを振った。けれどそれは拒絶というより、迷いを打ち消すためのものに見える。細い指が、震えながらアキラへと伸ばされた。

「話さないでいようと思っていました。あなたたちに言うようなことではないと」

「いいよ、言ってくれ。——俺はシエラの、なにを理解できてないんだ？」

予感が強くなってくる。

波打ちながら近づいてくるそれは、アキラの喉元にこびりついたまま動かない。正体も知れない。だが目の前の彼女であれば知っているのだろう。

少女の小さな手のひらがアキラの頬に触れる。彼女はそうして、泣き出す寸前のように顔を歪めた。

「アキラ……全ては、私の姉のためのものだったのです」

「ニーナの？」

生まれつき病弱だったニーナ・ハーディ。

稀代の歌姫ニーナ。

同一人物だったという女の名は、どこかでなにかを呼び起こす。

シエラは頷く代わりにゆっくりとまばたきした。長い睫毛が作る影は、白い肌にひどく映えて見える。

「姉は生まれつき寿命を宣告され、ベッドから出ることもままなりませんでした……。だから父は研究を重ねて、不自由な体に縛られず生きられる世界を用意したのです。大切な娘が、せめて最後の数年を幸福に過ごせるようにと」

黒い双眸が、涙を湛えて彼を見下ろす。その涙は、しかし彼の上には落ちてこない。ただ鏡の空へと還っていく。

「アキラ——この世界は最初から造り物なのです。あなたたちの住む十二都市とは、父が構築した仮想現実で……。つまり、姉のための巨大なホスピスだったのです」

シエラ・ハーディはそう言って、濡れた瞳をきつく閉じた。

じんと、頭の奥が焼ける気がした。

だがそれは気のせいかもしれない。理解することを拒む感情が、きつとそのような熱を錯覚している。

理解する自信がないのだ。——この世界が、仮想のものであるなどとは。

「嘘ついてる……わけじゃないよな、シェラ」

彼女以外が口にしたのなら、はなから相手にもしなかった。今でもよくて半信半疑だ。

だがアキラの直感は、「彼女の話の聞け」と囁いてくる。まるでその先に、既知の事実が待っているかのように。

シェラは軽く目頭を押さえると首肯した。

「本当の話です……。この世界で『死』の概念が希薄であるのも、ここが『そうであるように』作られたからです。プログラミングによつて生み出された住人たちが、繰り返しの生を経験を積むことで、本物の人間に近づいていくようにと——」

「生み出された、住人」

アキラは血に汚れた自分の手を見やる。

その肌、皺や関節の一つ一つ、握り締めた感触さえも、虚実のものとは思えない。思考も感情も、作られたものとは思いたくなかった。アキラは笑おうとして、乾いた息を洩らす。

「信じられない」

「ええ」

少女はかすかに微笑む。自嘲的な表情は、彼女自身の負い目を表しているかのような。シェラは傷ついた彼の手を取る。

「けれど、アキラ……たとえば生誕祭とは、誰の誕生日を祝うものなのだと思いますか？」

「誰の？」

そんなことを不思議に思ったことなどなかった。

生誕祭は生誕祭だ。十二都市全てをあげて祝う祭り。だがそれが何に端を発しているのか、きつと今まで誰も考えたりはしなかった。それくらい当然のことだったのだ。当然すぎて、まるで考えてはいけないこともあるかのように。

しかしそう思いながらアキラの口はひとりでに、ある女の名を呟く。

「ニーナが」

ニユースで何度も聞いた。ニーナはもうすぐ二十二歳の誕生日をむかえるところだったと。

その訃報を誰もが悲しんだ。

彼女を知る皆が泣いたのだ。死がないはずの世界で空までもが予定外の涙をこぼした。誰もが知る、誰よりも特別だった人間。そしてシェラの話信じるなら——彼女はもう二度と戻ってこない。

「なんだ、それ」

アキラは我知らず息を止める。少女の硬質な声が耳の横を通り過ぎていった。

「ですが……姉が死んだことにより、この世界は当初の目的を終えたとみなされたでしょう。父のもとには複数の企業や研究所から人がやってきて、こぞってプログラムの移譲や詳細データの公開を求めました。中にはサーバそのものを欲しがる者さえいて、私が父の研究所に駆けつけた時には揉みあいにもでなりかけていたのです。——そこで父は、今回のゲームを提唱しました」

淡々とした言葉には、ひとかけらの棘が含まれている。

娘の遺物にむらがり、それを得ようとする人間たちを、博士はどのような目で眺めたのだろうか。

アキラは嘆息を飲み込む。握った手に力をこめると、シェラは「最初からお話します」と囁いた。

シェラとニーナの父であるハーディ博士が、大規模な仮想現実のプロジェクトを立ち上げたのは十三年前、ニーナの具体的な余命について医師から触れられた時だったという。

現実のコピーとして巨大な仮想世界を構築し、その中にリアルな人間の生活を再現するという試み。当初は絵空事と見向きもされなかったプロジェクトは、しかしある企業の出資により現実のものとしてスタートした。

博士は他にも協力者を得て現在の基盤となる仮想世界を作り上げたが、プロジェクト自体は出資会社の経営悪化により二年で打ち切られてしまった。しかしその後も博士はそれまでの研究で得てきた私財をつぎ込み、また副産物のデータを定期的に発表して資金に換えることで、精巧な仮想現実を維持し続けたのだ。

サーバの限界でそこはドームに覆われた巨大な都市という限定された世界になり、またさらにフィールドを十二に分割することになったが、その分内部は安定した。外部から逐一調整の手を加えなくとも、作られた人間たちで世界を回せるようになった時、博士はようやくニーナをその中に送り込んだのだという。

そして彼女はこの世界の時間で十年あまりを、普通の人間として自由に生きた。

シェラの言葉は流れるように耳に入ってきたが、その全てを理解することはできなかった。

アキラはすぐ上に漂う少女を見上げる。彼女は罪悪感に傷ついたような目で彼を見ていた。

「シェラ」

外の世界から来たさかさまの少女。宙に浮く彼女こそがかし、

本当の、普通の人間で——アキラたちはそうではないのだという。固く繋いだ手。二人の手を少女の黒い血が伝い、アキラの服に小さな染みを作る。

——自分は今どういう顔をしているのだろう。少なくともシエラの目に映る自分は、いつもと変わらないように見える。

変わらないのだ。普通で平凡な高校生。どこにでもいるただの人間だと思っていた。

シエラはじつとアキラを見つめている。

黒い、夜そのものの眼。その双眸が今は憂いにけぶっていた。悔いているような目が作り物に見えないのは、彼女が虚都から来た実在の人間だからなのか。

目を閉じる。

どちらが上でどちらが下かわからなくなった。かつて幾度も聞いた言葉がよみがえる。

『アキラくん。それは夢よ。お兄さんなんていない。現実じゃないの』

現実ではない。

では現実とはなにか。

今感じている痛みさえも作られたものならば、シエラを巻き込んで戦う意味はあるのか。

胸につかえる虚無感を、アキラは喉を鳴らして飲み干す。

シエラの手が、汗に濡れた彼の前髪をかきあげた。

「エジード・バレの属する企業の目的は、このプログラムを元に巨大な仮想リゾートを構築することです。ですから……もし私たちが敗北したとしても、第八都市の住人のデータはそのまま引き継がれる可能性が高いです。記憶は消されてしまうでしょうが……」

人が失われることはない、と。

シエラは続きを言わなかった。言うことができなかったのだろう。息苦しさ、固形に変わってしまう気がした。

——昔、兄の存在を皆に否定された時、自分は泣いたのだろうか。満ちてくる静寂の中、少女の手を取ったままのアキラは、ふとそんなことを思い返した。

かつて自分の現実を否定された時、自分が何者であるかさえわからなくなったのだ。それはほんの子供にはすさまじい衝撃で……だが自分は泣かなかった、のだと思う。

ゆるやかな自失に似た空白。アキラは手に、たしかな温度を感じる。

「なあシエラ、ここは作られた世界なんだよな」

「……はい」

シエラとともに過ごしたのはたった一週間だ。だがそれだけの間に築いてきた信頼が、彼女の言葉を「嘘ではない」と断じていた。アキラは窓の外を眺める。

「それは、俺も作られた人間ってこと？」

「いいえ」

しんと響く声。なめらかな手のひらがアキラの頬に触れた。

「あなたはこの世界において一握りしかない稀少なタイプ——父のプロジェクトに同意し、被験体として参加している、実在の人間です」

「被験体？」

アキラは床に手をつきながら体を起こす。繋いでいた手が離されると、シエラはくると回転し、さかさまに戻った。彼と同じ目線を保つ少女は、澄んだ目で少年を見つめる。

「仮想世界を作るにあたって、もっとも重要であったのは住人の存在です。父は考えた末、五つのタイプを導入しました」

「それ、DとかEとかあいつらが言ってたやつか」

「ええ。タイプAからEまで」

シエラはその一つ一つを端的に挙げていく。

—— AからEまでの五つのタイプは、後者に行くほど割合が少なくなる。

タイプAは、単純なプログラムで動く作られた人間。主に、都市の生活の基盤を支える生産・製造業や、管理・行政業務に従事している人間たちだ。

タイプBは、自動学習型人工知能。人間のようにふるまい、人間のように成長していく。だがその行動には定型化されている部分が多い。

タイプCは、DかEの特定の人間について、その人間から学習していく人工知能だ。

そしてタイプDは、タイプEをトレースしたコピー。

最後にタイプEは、ニーナ・ハーディと同じく、実在の人間が動かしている人間。

五つのタイプから成る住人は、時が経つほどに互いに交流を持ち学習して、都市の現実性を高めていく。このプロジェクトははじめから、仮想現実をどこまで現実に近い近づけられるかという意図を持っていた。

「——死を排除して経験を蓄積させるといふやり方は、リアリティという点で反対意見もありました。ですが仮想現実での生殖はいまだ困難がつきまといます。この方式は、まず中だけで完結したコミユニティを作ることが優先ということで、暫定的に受け入れられたのです」

少女の白い手が両頬に触れる。

包み込むような手のひらは、不思議と彼を落ち着かせた。アキラは自分の体を見下ろす。

「それって、俺も本当は虚都の人間ってことなのか」

「虚都というのはこちらからの呼び方ですが、そうです。本当のあなたがどんな人間か、私は知りません。名前も顔も年齢も今のあなたとは違うかもしれない」

「なんかもう、色々信じられないな」

「ですがあなたは、本来の自分の記憶を持っているはずです」

深い黒の瞳に自分の顔が映る。特徴のない、どこにでもいそうな顔。

だがアキラは、それが本当に自分の顔なのか、今は確信が持てなかった。

「私があなたを解析した時に得た情報は、あなたが実在の人間であるタイプEということ。そしてレベル1……一度も体を変えたことがないということです」

「体を変えたことが、ない」

「ええ。では、あなたが持っているお兄さんの記憶は、どこから来たのだと思いますか？」

白い空を見上げていた。

二人で、手を取って。

仲のいい兄弟だったと思う。兄は、アキラにも一緒に来ないかと聞いた。

白い、のっぺりとした——あれは、空ではない。白かったのは病院の天井だ。

リハビリに通っていた兄。あの時兄は、被験体にならないかという誘いを受けていた。

そして兄は、一人で、

「俺は……っ」

頭が痛む。

スキルを使った時とは違う、痺れるような痛みには彼は頭を抱えた。

ひとりでに涙があふれてくる。

目が回る。経験したはずもない記憶が行き過ぎていく。

兄の顔。ミヤの顔。カイの顔。鏡面の空。本物の夕焼け。都市の顔。見知らぬ海。

全ては濁流のように押し寄せ、そして去っていく。

通り過ぎていく。

残るものは名前のない自分だけだ。どこの誰もない中途半端な自分。

何もない中空に放り出される。

そのままどこまでも落ちていきそうになる。

空のない世界。都市のない空。

茫洋としたデータの海で、一人の自己はあまりにもはかない。なに一つたしかではない。

だが、そうして遠ざかりかけた彼を、シェラの腕がそつと抱いた。

「アキラ」

透きとおる響き。伝わる温度。

染みこむ名に、アキラはただ目を閉じる。少女の呼び声が反響する。

一つ一つたぐりよせられる感覚。生まれる輪郭。

見えるもの。聞こえるもの。匂い。味。感触。重ねていく言葉。

好悪。苦痛。渴望と憧憬。全ての感情。そして生きていく意志。

記憶の中を泳ぐ彼は、何色でもない空を仰ぐ。

頭の中で知らぬはずの声が——『好きにきなさい』と言った。

29・形而上の息

——白い天井を見上げる。

兄がいた病院の天井もこんなだった、とアキラは思い出した。

とは言え、視界はあまり広くない。カプセル状の被験台から見える範囲はほんのわずかで、すぐにそれも閉ざされることになるだろう。彼は今までに何人かから聞いた長い説明を反芻する。兄も同じ説明を受けたのだろうか、頭の隅でちらりと考えた。

隣で機器を調整している男が、手元を見たままアキラに話しかけてくる。

「なにか質問は？」

「特にない、と思う」

「あるなら今のうちに。意識の変換がかかれば、本来疑問に思うようなことも気づかなくなる。もつとも、最初のうちは君も六歳の子供に戻る。思考も感情も相応に退行するから、それどころではないかもしれないな」

「うつわ……でもすぐに戻るんだろ。一年が百日ないっていうし、その一日も短いつて聞いた」

「それは事実だが、中では時間の感じ方が変わる。せつかくの機会だ。子供時代を楽しめばいい」

楽しめばいい、と言われても、男の声は事務的なものでしかない。アキラは肩を竦めたくなかったが、上腕も肘も既に固定されていて動かなかった。あらためて意識してしまった窮屈さに、アキラは「もう早く始まればいい」と心の中で念じる。

しかし準備をする男の手は一向にとまることがない。アキラが思わずあくびをしそうになった時、男は唐突に口を開いた。

「死とははたして、なんであると思う？」

「はあ？」

なぜ急にそんなことを聞かれるのか。平坦な連絡事項でも、上滑りする世間話でもない言葉に、アキラはあっけにとられた。しかし男はその反応にかまわず続けてくる。

「死とは、なんであると思う？ 人が死に、失われるとはどういうことだろうか」

——難しい話をされるのかと思った。

だが、男が聞きたいのはそういうことではないのだろう。アキラがどういう理由で被験体を希望したか、相手の男は当然知っているはずだ。

三年前に亡くなった兄が「めちゃくちやおもしろい。お前にも見せてやりたい」と言っていた仮想現実。それを直接体験したいと希望したアキラに、許可を出したのはこの男本人だ。その後もいくつか質問に答えた。アキラの事情は完全に把握されている。

簡単に答えることがはばかれる問いに、彼は少し考えて返した。
「俺にはわからない」

「だが君は、知っているはずだ」

知っているというなら、たしかに知っている。家族を失う非現実感を、後からやってくるどうしようもない喪失感を、アキラはよく知っている。

だがそれは「死」そのものの答ではない。男が求めているものも、そのようなものではないのだろう。

アキラは過ぎ去ってないうずく思い出を振り返った。

「知ってるけど、わからないんだ」

あるいはわからないから、この旅を希望したのかもしれない。兄がなにを見たのか、なにを喜んだのか、知りたいと思った。

憤りと後悔ばかりを抱いた最初の半年。それから一年は思い出を振り返った。そのあとの一年半は……兄のことを考えない日の方が多かった気がする。そんな時ふつと空白の時間を得て、アキラはも

う一つの世界のことを思い出したのだ。

男のため息が聞こえる。

「私はもうすぐ、それを知ることになるだろう」

——彼の娘は、もうあと二年ほどしか生きられないのだという。アキラと前後して仮想現実の中に入るといふ彼女。この世界はもと、彼女のために作られたものらしい。だがそうして苦勞を重ね作ったものが、ほぼ完成した今にいたっても、男は少しも嬉しうではなかった。

男は額のしわをより一層深くして、機器から手を離す。アキラは横目でその姿を眺めた。

兄はもういない。だが、その生きてきた足跡を見たいと、アキラは思う。

しかし男が見ているものはまるで逆だ。まだ生きている娘に、未来の死を見て悲しんでいる。

『今を大事にすればいい』——アキラはそんなことを言いかけて、だが言葉を飲み込んだ。そのようなことはわざわざ言うようなことでもないだろう。男もきつとわかっている。ずっと長く悩んできたに違いないのだ。

だからアキラは、自分のことだけを口にした。

「俺は、あなたが知ってることを探しに行く」

仮想世界で生きるといふこと。そこで得られるものはなんなのか。男はおそらく既に知っている。知っているからこそ娘にそれを贈るのだ。

だからアキラも探しに行く。被験体として、己のデータを提供することと引き換えに。

「俺は——」

急に視界が眩しく感じられて、アキラは目を細めた。意識がゆっくりと薄れていく。

事前に投与された薬が効いてきたのかもしれない。男の声がぼやけて聞こえる。

「好きにきなさい。それが君を救うと思うなら」

苦味の混じる囁き。だが男はそう言った後、少しの間を置いて付け足した。

「……もしいつか君が、知りたかったことを見つけられたのなら。その時は、私の娘にもそれを教えてやってくれ」

「あなたの娘に？ 会えるかな。歌手になるんだろ」

とたんに強い眠気が襲ってくる。アキラは耐えきれず目を閉じた。記憶の中から兄の面影を拾う。子供だった兄はあの日、軽く笑ってアキラを見下ろしていた。

『お前もくるか？』

後悔はない。迷いもない。

差し出された手を取る旅に、そんなものは必要なかった。

急速に意識が浮上する。

それは夢から覚めるよりもずっとあっさりとしたもので、その代わり思い出したはずの多くのことは、目を開けると同時に止める間もなく霧散してしまった。

ぼやけていた視界がクリアになり、体の感覚が戻ってくる。

座りこんだままのアキラは、血に汚れた体を見下ろした。そこにはシェラの手でありったけの治療シートが貼り付けられ、伝わる痛みを麻痺させている。エジードにわからぬよう彼女が行っていた手当ても、時間が経ってだいぶ効いてきたらしい。アキラは指が動くことを確かめると、床に手について立ち上がった。

窓の外に見える都市は普段と少しも変わらない。整然とした美しい街並み。住人たちが、そしてアキラや友人たちが平穏に暮らす世界。

——自分は、兄の後を追ってここに來たのだ。
そのことだけはもうわかってる。兄がもう、いないのだということも。

だがそれ以外の本来の記憶は、やはりどうしても思い出すことができなかった。自分について考えてみても「瀬戸アキラ」だということしかわからない。

もっとも他の記憶など、今この場において必要なものではないだろう。アキラは手についた血をジーンズで拭う。頭の中は多少混濁していたが、気分はすっきりしていた。

「喉渴いたな……」

そう呟くと、シエラがあわてて小さなボトルを差し出してくる。礼を言つて口をつけると、鉄の味がするぬるい液体が、痛んだ喉を潤していった。そのあまりのリアルさに、アキラはつい苦笑してしまう。

反転した二つの世界。現実は何によって定義されるものなのだろう。

彼はこの世界において、ただ一人自分と対称である少女を見つけた。

「シエラ」

「はい」

「お前は、この世界をどうしたい？」

ニーナ・ハーディのための世界。彼女が死んだ今、これらの都市をどうするのか。

問われた少女は目を瞠る。飲み込めないものを嚥下するように、彼女は長い睫毛を震わせた。

「私は最初、ただこの世界を見てみたいと思ったただけなんです……。姉が最後を過ごした世界を見て回って、その歌を聞いてみたいと思いました。それだけでいいと思っていたのです。父はこの世界を維持するために、全てを犠牲にして他を顧みていませんでしたから」「淋しかった？」

「どうでしょう。わかりません」

微笑んで見せる少女は、まるで懺悔をしたいかのように見える。黒い大きな瞳が急にうるんだ。

「でも私、ここに来て色々わかったのです。あなたと一緒に過ごして、笑ったり食べたり怒ったりして……ああ、姉が見ていたものはこういうものなのかって」

この世界の一つ一つに驚き興味を持っていた少女は、そうして姉のいた世界の欠片を拾っていたのだらう。アキラにとっての普通が、彼女にとっては何もかも新鮮だったに違いない。

「私はだから……この世界を今のままに保ちたいです」

「シエラ」

伏せられた目。その名を呼ぶと、少女の目から不意に涙がこぼれる。震える声に、細い嗚咽が混じった。

「ずっと向きあえなかったけど、わ、私、姉のこと、好きだったんです。いまさら遅いって思うけど、でも、ここにはまだ、姉の歌が残ってる。お、お姉ちゃんを覚えてる人がいる……。だから、私は……」

「わかったよ」

それが聞ければ充分だ。

そして、アキラもそう思っている。

——仮想が現実よりも、価値がないなどということはないだらう。そうでなければ彼女が泣くはずもない。アキラがここまで来ることもきつとなかった。

作り物だらうと虚構だらうと、彼が立つ世界は在る。兄やニーナは、この世界を現実として生きて、きつと充足を得ていたのだ。

そしてアキラもまた、ずっとこの都市で友人たちと暮らしてきた。都市も人も、外から勝手に好きにされていいものではない。真実を知ろうとも変わらない思いを確認して、アキラは両手を固く握る。

自分を、世界を肯定する意志。

記憶の中の兄を思い出し、彼は頷いた。

「俺もこの街が好きなんだ。だから後の難しいことはシエラに任せ
る。その代わり――」

白い天井を、アキラは見上げる。

「シギルは俺が獲る」

空は赤く染まっていた。

はじめて見る鏡面の色。のしかかってくるような不吉な赤は、空
塔頂上の広場から見上げてすぐ上に広がっている。

風はない。空気も薄くはない。ハシゴをのぼって外に出たアキラ
は、広場に立つてまずそのことに安心した。背を支えるシエラに言
う。

「おどおどすんなよ。なめられるぞ。最初の時みたいに高慢になっ
とけって」

「……私、高慢だったつもりはないですよ」

「気位の高いわがままお嬢様って感じだった」

シエラは頬を膨らませたが、すぐに破顔する。美しい顔に勝気な
笑みが乗った。

「なら行きましょう。絶対勝ちますよ」

「オーケー」

常人が立ち入れる場所ではない頂上は、白い円形の広場になって
いた。直径三十メートルほどの広場を中心として、外周には白い柱
が六本見える。それらの柱は、王冠のように広がって上の鏡面体を
支えていた。美しくはあるが細すぎるそのフォルムに、アキラは苦
笑をこぼす。

「よくよく考えてみりゃ、こんな柱だけで空が支えられてるっての
も変な話だよな」

「空塔は十二ある都市サーバのメインシステムに相当するのです。
規定外の運用があつては困るので、空塔管理部は全員タイプAカタ

イプBです」

「そりゃ、優秀な人間でも受からないことがあるって言われるわけだよな」

アキラは頭をかきながら広場の中へと踏み入る。中央にはシギルを置くためのものだろう、空の台座があった。

その向こうには二人の人間が彼らを待っている。

広場から数メートル上の宙に立つエジードは、手にシギルを持っていた。

そして彼よりも後ろの石畳には、さっきの黒服が立っている。今はもう仮面をかぶっていない顔。人形のように表情がない幼馴染の少女を、アキラは無言で見すえた。

「で、そいつに何したんだよ」

「驚かないのだな。君にもう一度挑む気があるのなら明かしておこうと思ったのだが」

「付き合い長いから、近くまで行きや顔隠しててもうすうすわかる。俺への嫌がらせか？」

「いや違う。プレイヤーを二人もくだした君の素質を評価して、近しい者を選んだだけだ。今の状態は……契約の副作用のようなものだ。適応者以外のタイプは、代行者となるとプレイヤーの操作下に入る」

「いいかげんイラっとくる。わかりやすく言えよ」

「サガワ・ミヤはタイプC。君とともにいて、君の言動からこれまで学習してきた人工知能だ。——だからこそ君にもっとも近い働きが期待できる」

「……ミヤが？」

下ろされたフード。いつも高い位置で二つに結ばれている髪は、今はただ下ろされている。虚ろな目は普段の彼女からは想像もつかないもので、だがその分異様な美しさがあった。

背後でシェラが表情を陰しくする。しかしアキラは小さく息をついただけだ。

「アキラ」

「いやもういいかげん驚かないって。それが本当でも嘘でも知ったことか」

なぜミヤとたびたび同じクラスになっていたのか。誰からも好かれる彼女が自分にまわりついてきていたのか。腐れ縁の理由がわかってても何かが変わるわけではない。

ミヤはミヤだ。アキラにとってはそれが現実だ。

「それより、あのプレイヤー送り返せばミヤは戻るのか？」

「ええ。おそらく」

「了解。ミヤも俺が変に過大評価されたせいでいい迷惑だよな」

「彼女は迷惑とは思っていないでしょう。あなたの力になりたがっていました」

「お人よしっていうんだよ、そういうのは」

空の台座をはさんで、アキラはミヤの正面に立つ。

武器を持つてこなくてよかったのかもしれない。いくらなんでも、彼女を警棒で殴る気にはなれなかった。アキラは空を見上げて気が抜けたようにぼやく。

「まったくなあ……普通でよかったんだけどな」

だが、きつとこれでいい。

普通であるからこそ自分は、当然の怒りと希望を抱いてここに立つのだ。

30 ギフト

怪我を負った体はシーートの鎮静が効いてはいるが、普段どおりには動かない。

勝負を長引かせては、負けるのは自分たちの方だろう。アキラは白い石タイルの感触を靴で確かめた。台座越しにミヤを見る。

黒い右袖からは三本の鞭がこぼれ、しゅるしゅると動いていた。そういえば劇で彼女は、魔女の役をやることになっていたのだ。案外あれがそのまま衣裳なのかもしれない。衣裳合わせを見ていなかったアキラは苦笑する。

「ちょっと待つてろよ、ミヤ」

さっきは致命的な一撃を食らってしまったが、一応シエラと簡単な打ち合わせはした。どこまで上手くいくかはわからないが、まずはやってみるだけだ。

白い石タイルには頭上の赤い空が映っている。周囲には足がすぐむほどの絶景が広がっていた。アキラは一度深呼吸すると走り出す。直線上にある台座を左に避け、ミヤにむかって距離をつめた。エジードが少女に命じる。

「足を狙え」

命令と同時にふるわれた鞭は、石畳すれすれを薙いでいった。しかしそれを予測していたアキラは、三本全てを跳び越えて走る。がらあきになった少女へと肉迫した。

「ミヤ！」

握った右手を振りかぶる。

腹を狙って気絶させようとした拳。けれどそれは、だばつくローブを殴っただけで空を切った。大きく後ろに跳んだ少女は右手を上

げる。

——鞭が戻る。

アキラは身を伏せてそれをよけようとした。空気の鳴る音。遅れて背中に痛みが走る。

「痛っ……」

どうやら鞭の一本が背を掠めていったらしい。アキラは態勢を崩して片膝をついた。ミヤの目が彼を見下ろす。一瞬の空隙。だが少女は迷わず右手を振り下ろした。

「ちょ……っ！」

なかば反射的にアキラは横転して鞭をよけた。赤い縄が彼のいた場所を強打する。

つややかな石のタイルに大きな亀裂が走り、石の破片が周囲に飛び散った。立ち上がったアキラはうんざりした顔になる。

「これ以上出血したら貧血で倒れるだろ……」

じんじんと熱い背中がどうなっているか、自分では見ることができない。だがそれは、石畳についた血を見れば見当がついた。

少女の手に戻った鞭が宙をくねる。ミヤは再び右手を振り上げた。しかしそれが空を切るより早く、彼女の背後にシエラが取りつく。

シエラはミヤの右腕をつかんだ。

「アキラ！ 今のうちに！」

「わかった」

倒れそうな全身を酷使してアキラは走る。シエラともみあうミヤに手を伸ばし、細い肩をつかんだ。鳩尾に拳を叩き込もうとする。

けれどアキラの右手は彼女に触れる直前で止められた。何かが絡みつく感触に自分の手を見下ろした彼は、奇怪な光景に思わず啞然とする。赤い鞭三本のうちの一本が、途中からさらに細い糸として枝分かれし、びっしりとアキラの手を絡み取っていたのだ。

「げえ、ってなんだこりゃ！」

「そのスキルは『ヴァイン』と言う。チェンジリングほどではないが、応用の利くスキルだ」

エジートの補足が耳に入ったが、それについて考えている余裕はない。

赤い糸は見る間にアキラの拳から腕、腕から肩へと先端を伸ばしつつあり、捕まった右手は引こうとしても動かせなかった。

アキラは残る二本の鞭のうち、もう一本も同様に解けるのを見てはつとする。

「シエラ！ 離れる！」

「あ……」

ミヤに取りついていていたシエラは、それを聞いて空中に逃れようとしたが、何もない宙ではとっさに動けない。アキラは左手で彼女を指さす。

「シエラと俺の、かかる重力を入れ替える！」

宣言と同時にアキラの体は浮き上がった。代わりにシエラは石畳へと落下し、赤い糸の先端から逃れる。小さな悲鳴をあげて少女は石の上を転がった。

「ミヤから離れてろ！」

シエラは猫のようにタイルに手をついてすばやくその場から逃れる。

さかさに浮いたアキラは、左手で赤い糸をたぐりよせると鞭の枝分かれする部分を握った。一メートル下の石畳を見ながら叫ぶ。

「解除する！」

下へとかかる重力。アキラはその勢いを利用して両腕に力をこめた。体を半回転させ石畳に着地しながら全身のバネを使って両手を振り下ろす。

「っ、せつーの！」

そこまでうまくいくと思ったわけではない。だが小柄なミヤの体は鞭ごと綺麗に投げだされた。アキラの右手から赤い糸が離れ、少女はボールのように石畳の上を軽く跳ねて起き上がる。

「ってか、怪我すんぞ！ 鞭放せよ、お前！」

「スキルは離れませんよ……」

戻ってきたシェラはわずかに青ざめて言ったが、すぐに険しい表情でつけたした。

「ヴァインというからには本来は鞭ではなくつる草を模したスキルなのでしょう。扱いやすさと攻撃力のために、普段はあえて三本に縋ってあるのではないでしょうか」

「ひょっとして、さっき俺を吹っ飛ばしたのもアレか？」

アキラの体の前面は、広範囲に渡って裂傷が走っている。中には相当深いものもあり、スキルによって生み出された赤い糸の強度を思わせた。

二人の奮闘を見たエジードが小さな溜息をつく。

「まだ諦めるつもりはないのだろうか。私はあまりハーディ嬢を傷つけることはしたくない」

「本物の人間だからか？」

「ビジネス上の問題だ。ここでの禍根を現実で引きずりたくない」

男からすると、この争いなど本当に作られた盤上のゲームに過ぎないようだ。外野にいるかのような物言いに、当のシェラは怒りで紅潮し、アキラは胸糞の悪さに吐き捨てた。

「で、お前は高みの見物か。いい身分だな」

「私からすると見上げている気分なのだな。ここは実に——不思議な空間だ」

男の目が第八都市を睥睨する。憧憬とも感嘆ともつかない視線は、しかしすぐに理性的な光へと取って代わられた。エジードは立ち上がったミヤに言う。

「長引かせるな。彼を無力化しろ」

表情のない少女は右手をあげる。手の中の糸はすでに三本の鞭に戻っており、アキラを打ち据えようと動いていた。先ほど投げられたせいか乱れた前髪の隙間から、青いプレイヤーナンバーが浮き上がって見える。

「額に7つて。似合わないな。写真撮つといてやろうか」

アキラはなかなば本気でそのようなことを考えたが、後でミヤに見

せても覚えているかどうか知らない。――むしろ覚えていない方がいいだろう。自分がしたことを知ったなら、ミヤはきつと傷つく。アキラは友人にそんな思いをさせたくなかった。

後悔にかげりかけた思考を、だがシエラの言葉が支えてくる。

「大丈夫です。彼女はあなたにきつと応える」

「ん？ ミヤが？」

「ええ。彼女はあなたの友人で……もう一人のあなたです」

特定の人物について学習するというタイプC。それが真実であるのなら、ミヤは自分のうつし鏡なのだろうか。だがどう考えても「違う」としか思えない。自分はあるふうに、誰からも好かれて誰にでも優しいお人よしではない。

「全然似てないって」

「そうですか？」

似ているところなど一つもない。彼女ならきつとどのような苦境に立たされてもあきらめず笑って乗り越えるだろう。アキラはずっと一緒にいた友人の、しなやかに背筋の伸びた姿を思い出す。今のミヤはそんな彼を、感情のないガラス球のような目で見ていた。

「――そうか」

小さな思いつき。アキラは疲労のたまる足を軽く叩いた。

トークでシエラに指示を出そうとした彼は、しかしあることを思い出すと小声で告げる。

「な、お前さ、父親に『好きにしなさい』って言われたって言うてたよな」

「……ええ」

「それたぶん、俺も同じこと言われた。こっちの世界に来る前に。うつすらだけ覚えてる」

それは、あるはずのない記憶だ。記憶の濁流の中に混ざっていた断片。

月日が経ち兄の年齢を越した彼は、ある時兄の足跡をなぞりたいと望んだのだ。

そしてその時、誰かに言われた。

「好きにきなさい、ってさ、突き放してるわけじゃないんだ。自由でいろ、ってことなんだよ」

「え？」

「チェンジリングはきつと、そのためのスキルなんだ。シエラがこの世界を自由に体験できるようにって」

プレイヤーとして飛び込んできた彼女には、多くの制限が課せられた。さかさまであること自体その一つである。だがおそらくハーディ博士は、その枠内において娘にできるだけの自由を与えようと考えた。そうして与えられたチェンジリングは本来——この世界の住人と彼女の感覚を入れ替えるためのものだったのだろう。

「だからシエラ、あんまり気に病むなよ。お前はちゃんと家族だ。親父さん言ってたぞ。『もし自分の娘に会うことがあったら、色々教えてやってくれ』って」

「それは……でも、お姉ちゃんのことじゃ……」

「違うって。俺言っただよ。『歌手なんて会えるかどうかかわからない』って。そしたら『もう一人の娘の方だ』って言ってた」

——教えてやって欲しい。いつか君と、同じ道をたどるかもしれない私の娘に。

あいまいな記憶の中で淋しそうに微笑む男は、ひどく不器用な人間に見えた。

その不器用さは、シエラもまた持っているものだろう。けれど、家族とはえてしてそういうものだ。

いつまでも後悔にうつむく必要などない。そう示すアキラに、シエラは小さく息を飲む。

「けど、それならどうして父は私のスキルを……」

「そんなの、うざいやつら排除のために決まってるんだろ」

シエラに体験を与えるためのチェンジリングは、裏を返せばステータス書き換え権を持った最強のスキルである。

どのような状況から逆転の可能性を導くスキル。それが父から

彼女へ贈られたものだ。立場上表立って競争者を追い払えない博士の代わりに、欲をかきすぎた者たちを排するための武器。博士は食いがたつてゲームの内容を問うてきた人間だけに、その存在を伝えた。

「まったく、期待されすぎて気もするけど」

偶然か必然か、博士の言っていた娘に会い、その手を取ったアキラは苦笑する。少女は大きな目を見開いて彼を見下ろしていたが、ふっと表情を崩すと泣き出しそうな顔で微笑んだ。

「……私は、そうだったら嬉しいです」

「そうだろ。現に俺たちは勝ってきたんだ」

だからここで負けるつもりもない。広がる世界は彼にとって、決してゲームのための盤上ではないのだ。

トークで打ち合わせた内容はほんの二、三言だ。

短いた承の言葉を聞き、アキラは再び白い広場を走り出した。体はすでに限界に近づきつつある。

動きにもそれはあらわれているのだろう。よけたと思った鞭は、彼の爪先を払っていった。

顔からタイルに突っ込みかけたアキラは、とっさに両手をついてそれを回避する。追撃を用心して跳ね起き、さらに右へ跳んだ。彼を追う鞭が顔のすぐ横を薙いでいく。アキラはあらためて息を整え、広場の様子を確認した。

「なかなか壮絶な眺めだな……」

すでにあちこちのタイルはミヤの攻撃でひび割れ、場所によっては大きくめくれががたつてしまっている。注意していなければすぐつまずいてしまいそうな有様は、アキラが逃げ続けているためのものだった。

しかしミヤはそれにはかまわずアキラを追尾してきている。二人

は一定の距離を保ちながら台座近くをじりじり移動していた。

代行者の戦闘を見守るプレイヤーは、今は宙にたたずんでいる。広場での戦いから離れ台座の上にいるシェラが、エジードに何かを話しかけた。彼女の手招きに応えて男は高度を下げる。

——ねらっているのは一度のチャンスだ。

アキラは慎重に全ての距離を測った。少しずつ迫ってくるミヤの足もとに目を凝らす。ゆらゆらと首をもたげる鞭の輪郭が、唐突にぶれた。

「——つと！」

高さを変えて薙いでくる三本の鞭。顔と腹と足を同時に狙った攻撃を、だがアキラは鞭の間に飛び込んですりぬけた。石畳を前転して起き上がり、めくれあがったタイルを跳び越えて下がる。体に痛みは走ったが、彼はそれを無視した。

ミヤはアキラを追ってまた歩を進める。ひるがえされたロープが風をうけて台座にかかった。

彼女は何も言わない。エジードが作る影が、少女の整った顔を陰鬱なものに見せた。黒い裾の下からちらりと足が見え、アキラは思わずふきだす。

「なんだそりゃ。そんなのでここまで来たのかよ」

ミヤが履いていたのは学校指定の上履きだ。おそらく学校にいるところを連れ去られたのだろう。カイが伝えたかったメッセージもそのことに違いない。彼女ははたして劇には出られたのだろうか。出る前にここへ来てしまったのか。ずっと今日の日のために駆けずり回っていた少女の姿を思い出すと、アキラは苦いものを覚える。

ガタガタになったタイル。少しずつ移動させてきたミヤ。

最低限の布石はそろった。アキラは少女の足もとの瓦礫を見やつてうなずく。

目を閉じた。頭の中をクリアにする。そして彼は、吐き出す息と

ともに宣言した。

「ミヤと俺の、視界を入れ替える」

暗闇を少女へと押しつける。鞭を振るおうとした彼女の手は、だがバランスを崩して下ろされた。視界を失った少女はタイルの瓦礫につまずく。よろめいて膝をついた彼女は、様子を探ろうと右手を前に出した。その手をすばやく駆け寄ったアキラが鞭ごとつかむ。

「解除」

ミヤは顔を上げる。

人形のような貌は、空っぽな、それでいて泣きそうなものだった。見慣れすぎて多くがわかってしまう顔。アキラはそこに感情を見て、だから笑いかける。

「そんな顔すんなよ、ミヤ。いつもどおりでいろよ」

赤い鞭の一本が音もなくほどける。それはアキラの両足にからみつき、静かに肉を圧した。残る二本が大きく宙をしなる。その様子を見たシエラが二人の頭上で顔色を変えた。

「アキラ！ あぶない……！」

この場から動くつもりはない。ここが最後の地点だ。

迫りくる鞭の音を聞きながら、アキラは静かに宣言する。

「ミヤ。お前と俺の、タイプを入れ替える」

少女の目が見開く。

アキラの両眼から意思の光が消える。

だがそれでも鞭はとまらない。彼の背後に黒髪が飛び込んでくる。風を切って動く赤は、そのまま激しくアキラの背へと叩きつけられた。

音が消える一瞬。ゆっくりと崩れ落ちる体をミヤは両腕で抱く。

「あ……アキラ、くん？」

震える声。唇をわななかせたミヤはその時、床に倒れている少女を見た。

ずたずたになっている背は、鞭とアキラの間に割って入ったのだろつ。長い黒髪の少女は、わずかに顔を上げると、ミヤに向かって

真上を指さす。

目に見える空は赤い。

少女の指を追ってミヤが鏡面を見上げると、そこには灰色のスーツの男が浮いていた。

男の顔に驚愕が浮かぶ。

「そんなまさか」

「ああ、そっか……」

細めた双眸から涙がこぼれる。

ミヤはそうして左手を上げると、自らの契約者である男を、鞭が消えるまでくりかえし薙ぎ払ったのだった。

31・青空

空である鏡面体の上には、同じ鏡面を空とするさかさまの都市――「虚都」がある。

まるで子供の空想のような話。けれどその一節は実際、十二都市全ての記録に共通して記されており、都市公認のものとなっている。そして記録にはそれ以上の記述はない。

都市に生きる者はみな、なにも知らぬまま平穏な毎日を送っている。

色の変わる鏡の空と、白く美しい空塔を誇りに思いながら。

エジードの手から落ちたシギルは、石畳のひび割れにすっぽりとはまりこんでいた。

身をかめてそれを拾い上げたアキラは、台座を振り返って笑う。

「ほら、あったぞ」

「投げないでくださいね。落としちゃうかもしれませんから」

「わかったよ」

アキラは少女の待つ台座にまで戻ると、手に持ったシギルを差し出す。

宙に浮かぶシェラはしばらくそれをじっと見ていたが、やがてとても貴重な宝石に対するように、両手のひらで珠を受け取った。彼女がそれを胸に押し戴くさまを、アキラは静かな目で見つめる。

――決して楽なゲームではなかった。

アキラもシエラもともに負傷し、特に彼はずたばろの有様だ。チエンジリングが解けたミヤは、契約が消失した反動か気を失って眠っていた。

だがそれでも勝利を手にすることができた。自らの手で都市を守りきったのだ。

シエラはその証たる珠を両手で掲げる。上から下へ捧げられるシギル。透明な珠はコトリと小さな音を立て台座に置かれた。

次の瞬間、シギルからはまばゆい光があふれだす。

「……っ」

あまりのまぶしさに、アキラは腕で目を覆った。

脳の中までを焼く白光。上下の感覚が消え、宙を漂っているような感覚が襲う。もしかしてここで全てが消え去ってしまうのかもしれない。——そう思うほど外も内も全てが溶けあつて、何もわからなかった。

だが目を固くつむっていたアキラは、ふっと光が消えたことで腕をおろす。

そうして瞼をあけて息を飲んだ。

「——シエラ」

淡い緑色のサンドレス。宙に広がる黒髪。現実のものとは思えぬ繊細な美貌。

アキラの目の前には、あの日と同じ、さかさまの少女が浮いていた。

腕や背を汚していた黒い血も、今は綺麗に消え去っている。雨に濡れていない以外、その姿は何一つ最初と変わらない。アキラは時が巻き戻ったかのような錯覚に言葉を失った。今までのことが全て夢だったのかとさえ一瞬疑ってしまう。

だがこれは夢ではないだろう。

もつとも空に近い場所。瓦礫だらけの広場をささやかな風が吹いていく。

少女の閉じていた双眸がゆっくりと開かれた。その瞳を見た時、

アキラは一つだけ残る変化に気づく。

強い感情をたたえて彼を見る目。震える声が彼を呼んだ。

「アキラ……」

「――帰るのか？」

それは聞かずともわかっていたことだ。

彼女は帰る。彼女の世界で、この世界を守るために動き出す。だからアキラが助けられるのは、ともにいられるのはここまでだ。

シエラはじつと彼を見つめていたが、やがて濡れた睫毛を揺らし、て首肯した。

「ええ……今までありがとうございます」

「そっか。そうだよな」

それ以上の言葉がうまく出てこない。言すべきことがあったはずなのに、必要な言葉はどれも見つからなかった。シエラは淋しそうに微笑する。

「あの、私……」

空の色が変わり始める。

赤から紫に、そして澄んだ青に、世界の境界線は色を変える。

シエラは逡巡を表に出すと、言いかけた言葉を切った。目を伏せて小さくかぶりを振る。長い睫毛を伝って涙がこぼれていくのを、アキラはじつと見ていた。

「ア、アキラ。私、きつとあなたに応えます。この世界を守りますから……」

「ああ……気をつけろよ」

台座に置かれたシギルが不意に音を立てて砕け散る。

驚くアキラの目の前で、シギルの破片は白く光る粒となって舞い上がった。少女の髪に、服に、腕に次々吸いついていく。そしてそれらが触れた部分もまた、白い粒となってゆっくりと空気中に拡散しはじめた。

「あ……っ」

散っていく己を見てシエラは小さく声をあげる。

嗚咽にも聞こえる声。あまりの光景に愕然としかけたアキラは、この時ようやく残された時間がもうないのだと実感した。探していた言葉が喉を突く。

「っ、シエラ！　むこうで困ったら俺を起こせ！」

何が現実を定義するのか。その答は自分に決まっている。

だからどちらの世界でも変わらない。アキラにとってその時目の前に広がる世界こそが現実だ。二つの世界は等価で、その両方を受け入れられる。踏みしめる地を信じて進む。

「かならずお前を助けてやる！　名前が違ってても、顔が違ってても、俺は俺だ！　かならずお前の力になる！」

「アキラ……っ」

くしゃくしゃの泣き顔になっていたシエラは、その言葉を聞いて嬉しそうに笑った。

裸足のつま先が消えていく。長い黒髪が宙に散り、その体も次第に薄れていく。

シエラはせいっぱい細い両腕を伸ばした。アキラはその手を取って少女を引き寄せる。

寄せられる体。やわらかな温もり。

空を泳ぐ魚のように、彼女はしなやかに自分の上下を変えた。黒い髪が尾を引いてアキラの視界に広がる。何よりも深い瞳が涙に濡れてまたたく。

頬に触れる手。額と額が触れあう。その一瞬に思い出がよみがえる。

そうして彼女はただの少女のように笑うと――目を閉じてそっと彼に口づけた。

偽りではない温もり。唇が離れた時、最後の言葉が伝わる。

（ありがとう）

澄んだ響きはアキラの中に溶けて消える。

やわらかな風が吹き抜ける。

彼女の消える音は、何よりも澄み切って空の下に響いた。

腕の中から消える温度。アキラは少女の姿を追って顔を上げる。
見上げた空は、美しい青色だった。

「で。そろそろ俺、帰りたいんだけどさ」

「アキラくん、ちゃんと聞いてよ！　だってさ……どうしてわたし、あの時眠っちゃったんだろ。生誕祭初日だったってのに！」

机をどんと叩きながらミヤが叫ぶ内容は、もう何十回聞いたかわからない。

帰りのホームルームも終わった放課後、たまたま忘れ物を取りに教室へ戻ってきたアキラは、幼馴染に捕まって苦い顔を隠せないでいた。日直日誌を書いているカイが、顔を上げないまま笑う。

「それを言うならおれだってそうなんだからさ。気にしてもしかないよ」

「でもカイくんは空塔の集団睡眠事件がらみでしょ！　整理券持ってた人はみんな昏睡したっていうし！　わたしなんて、なにも持たなかったのにだよ！　なんで！」

「準備で疲れてたんじゃない？」

「うつつうつつ」

逃げる隙をうかがっていたアキラは、ミヤがうめいている間にそっと彼女から離れた。音をさせないように机の間をぬって帰ろうとする。

「アキラくん！　まだ話終わってないよ！」

「もうその話は嫌ってほど聞いたっつもの！　いいかげんにしろ！」

「だって納得いかないんだもん！」

「空塔の方も、もう三ヶ月も経つのにいまだに原因不明だもんなあ」
不思議そうな二人の友人を前に、本当の理由を知っているアキラは沈黙する。

話しても信じてはもらえないだろう。あの日の一件にかかわった人間は、アキラを除いて全員その記憶が失われてしまったのだ。

ミヤは教室の隅に自動転送され、ずっと眠っていたことになった。それだけでなくあの時空塔にいた人間や見学の整理券を持っていた人間は、管理部も一般人もみな謎の睡魔に襲われ眠ってしまったらしい。その間に彼らの記憶はすっかり改竄されていた。

シギルが確保された都市はそうしてもとの平穏に戻り——三ヶ月経った今も、世界はまだ消えてはいない。

過去の記憶をなぞっていたアキラは、ミヤの溜息を聞いて我に返る。

「つてか、俺本当に帰るから。今日雑誌の発売日だし」

「また付録でしょ！」

「付録が好きで何が悪い！」

子犬のようにわめくミヤを振り切ってアキラは教室を駆け出す。外に出ると空は淡い緑色だった。

今日の天候予定は一日晴れ。散策するにはちょうどよい陽気だ。アキラは校門を出てエリア道へと向かう。通学バッグから音楽プレイヤーを取り出し、片耳だけにイヤホンをはめた。プレイヤーからは水晶のような女の歌声が流れ出す。

綺麗に整えられた街並み。

埃っぽい街路には今日も人影が見えない。車道を通る車もない。だが閑散とした景色はアキラにとつてとてもリアルで、作られたものにはとうてい思えなかった。あるいは彼女といった時間の全てが夢だったのかもしれない。

「……違う。夢じゃないだろ」

反射的に口をついた言葉に、彼は自分で苦笑する。

——夢ではない。虚構でもない。

記憶を疑いそうになる時、アキラはいつも空を見上げて歩いた。在るけれど無い虚都に向かって手を伸ばす。いつかそうして彼女

の手を引いたように。

「ちゃんとやってるのか？ やってんだろっな。お呼びがかからないんだから」

空に向けての嘆息は、少しの苦味と喪失を乗せて消えていった。

まるでその問いかけが届いたかのように、鏡面の色がゆっくり変わりはじめる。

あの日と同じ青。

記憶の中で、少女が笑う。

（アキラ）

「わかってるよ」

長く伸びる道。

彼はその道を踏みしめ歩いていく。有限の空を見上げる。

彼らが生きる世界は今日も変わらず平凡で、何よりもたしかに現実だった。

【了】

後日談：同じ空

何の変哲もない日だ。

いつも通り寮に帰り、いつも通りベッドに入る。

そして眠りにつく。――夢の中に落ちていったはずの意識が、鏡面の空を越えるのは半年ぶりのことだ。

目覚ましに似た電子音が耳元で鳴っている。

徐々に間隔が狭くなるそれは、やがて一本の線のように連続して彼の意識に寄り添った。

目を開ける。白い空、ではなく天井が見える。

「起きた」

ぼつりと呟くと、傍で人が動く気配がした。

仮想世界の時間で半年に一度やって来る調整と身体検査の日。

だが「瀬戸アキラ」はもちろんそのことを覚えていない。覚えているのは本来の彼だけだ。

何度かまばたきをした彼は、器具をはずすため隣に立った少女を見上げる。

白衣を着ていながら長い黒髪を束ねていない彼女は、一瞬だけ彼を見て、だがすぐに無言で種々のコードをはずしていった。

各部の拘束も解かれ、少女の手を借りて体を起こした彼は、見慣れた白い部屋を見回す。

「報告と調整を」

いつも通りの言葉を口にしてから、彼はそれがまだ必要なのだろうかと考えた。

しかし、壁際に立っている男は気にした風もない。

仮想世界の最高管理者とも言えるバイロン・ハーディは「来なさい」とだけ口にして、そこにある椅子を示した。

向かい合って座るわけではない椅子は、壁に設置されたシステム端末へとむいている。

彼は少女の手を借りて立ち上がると、ゆっくりと一步一步あるきだした。久しぶりの動作に、多少の違和感を覚える。

ようやく椅子に座ると、彼は自分のＩＤでログインし、管理画面を開いた。

バイロンが「調整箇所を」と促す言葉に、決められたチェック項目から挙げていく。彼の音声を認識して、モニタにログが流れていった。

兄がいた仮想世界をはじめて体験してから三年。その間、身体検査のために何度かこうして起こされた。

そうして何度目かの覚醒時——彼はバイロン・ハーディと話し合っ
て決めたのだ。

自分がたんなる被験者を越えて、管理側の人間となることを。

もともと仮想世界に入った時には、苦勞して入った大学を半ばドロップアウトしていた。

そのような自分が、今は身分上「研究員」だというのだから、これは社会復帰していると言っているのかどうか。

各都市に一人ずつしかない「世界内管理者」である彼は、けれど「瀬戸アキラ」である時はそのことを覚えていない。

いつも通りの報告を重ねていった彼は、けれど不意に言葉を切るとバイロンに問うた。

「それで、どうなったんですか」

「どうなったとは？」

「ゲームの結果について」

——このプロジェクトは解体され散り散りになるのではないか。

当然の懸念を彼が口にした瞬間、だが背中にどんと固い感触がぶつかった。

振り返ると大きな目に涙を溜めた少女が、拳を震わせて立っている。

「お、覚えているんじゃないですか！」

「……覚えてなかったら仕事できないし」

「何も言ってくれないとか、ひどいです！」

「シエラが何も言わないから。触れない方がいいかと思ったんだよ」
一応反論してみたが、シエラは「ひどいひどい」と言い続けている。
だがそれも無理のないことかもしれない。今の彼は「瀬戸アキラ」
とは年齢も外見も違う。彼女からは声がかげにくかったのだろう。
ひとしきり彼をなじったシエラは、ぶすつとした顔で腕の中の書類
に目を落とす。

「システム運営の現状については、私から後ほど説明いたします。

……セト・アキヨシさん」

「アキラでいいよ」

昔から家族にはそう呼ばれていた名を明良が口にする、シエラは
瞬間息を止めて、だが花のようにはにかんだ。

懐かしいその笑顔に、明良は自分もつられて微笑む。

仮想世界が存続していくのなら、「現実」で彼がこうして過ごす時
間はほんのわずかだ。

だがその間に一度彼女と外に出てみるのもいいかもしれない、と明
良は思う。

そうやって空を共に見上げて、いつかのように手を取る。同じ空の
下、同じ地に立つ。

たとえ「瀬戸アキラ」がそれを覚えていられずとも——彼女はきつ
と忘れないでいてくれるのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1685x/>

曲空虚空

2011年10月29日10時16分発行